

県立浮羽究真館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告書

竹 重 遺 跡 3

— 福岡県うきは市吉井町生葉所在遺跡の調査 —

福岡県文化財調査報告書 第227集

2010

福岡県教育委員会

竹 重 遺 跡 3

— 福岡県うきは市吉井町生業所在遺跡の調査 —

卷頭圖版



手焙形土器

序

本書は、県立浮羽究真館高等学校改築工事に先立って、福岡県教育委員会が発掘調査を実施したうきは市に所在する竹重遺跡の発掘調査報告書です。

竹重遺跡は縄文時代から古墳時代にかけての遺跡として知られていますが、近年古墳時代前期の前方後方墳が発見されるなど、貴重な遺跡として注目されています。今回報告する発掘調査では、縄文時代前期と古墳時代前期の遺物がまとまって出土するなど、これまでうきは市ではまだ明らかにならなかったこの時代を理解する上で、重要な発見がありました。

今回の発掘調査によって得られた成果が長く活用されることを願うものであります、この報告書が文化財愛護思想の普及に寄与することになれば幸いに存じます。

最後に、発掘調査・報告書作成の過程で、地元の方々をはじめとする関係各位の皆様のご協力が得られましたことに深く感謝いたします。

平成 22 年 3 月 31 日

福岡県教育委員会教育長

森 山 良 一

例　言

- 1 本書は、県立浮羽究真館高等学校改築工事に伴って、平成 17・19・21 年度に発掘調査を実施した竹重遺跡第 2 次・第 3 次・第 4 次調査に関する調査成果報告である。
- 2 発掘調査・報告書作成は、福岡県教育庁教育企画部施設課の執行委任を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。なお、発掘調査・報告書作成に関しては市・同教育委員会の多大なご協力を得た。
- 3 遺構の実測・遺構写真の撮影等の現場作業は調査担当者が中心となって行った出土遺物の整理・復元は九州歴史資料館において行った。遺物の実測・製図をはじめとする報告書作成業は、福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府事務所において行った。
- 4 出土遺物・図面等の記録類は、九州歴史資料館において所蔵・管理される予定である。
- 5 空中写真是術空中写真企画に委託し、気球による撮影を行った。遺物写真は九州歴史資料館において撮影した。
- 6 本書に用いた地形図は、国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図「田主丸」「吉井」「草野」「千足」及び同 1/50,000 地形図「久留米」「甘木」「吉井」「日田」を改変したものである。
- 7 本書の執筆は、I、II、III-1、III-2-(1)~(7)、IV-1 を齋部・岸本・下原・城門が分担して行い、IV-2 を下原が行った。また、III-2-(8)については、九州大学理学研究院助教 坂井 卓氏から玉稿を賜った。編集は齋部が行った。

本文目次

Iはじめ	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	3
3 調査の体制	5
II位置と環境	
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	6
3 浮羽高等女学校出土資料の紹介	10
III調査の記録	
1 遺跡の概要	11
2 検出遺構と遺物	
(1)住居跡	18
(2)貯蔵穴	30
(3)土坑	39
(4)溝	50
(5)谷部と包含層	55
(6)その他の遺構と遺物	81
(7)戦争関連遺跡	89
(8)1号貯蔵穴出土の奇石について	91
IVおわりに	
1 竹重遺跡について	93
2 竹重遺跡出土の手焙形土器について	95

表目次

第1表 出土土製品・石器・石製品一覧表	99
第2表 調査遺構番号対照表	100

写真目次

写真1 発掘調査ニュースの掲示	4
写真2 浮羽高等女学校採集の石器	10
写真3 線状岩石の外見	91
写真4 浮白色の塊状部に茶色のバンドが発達した線状の組織	91
写真5 線状岩石の切断・研磨面	91
写真6 線状岩石出土状況	91

図版目次

卷頭図版 手焙形土器	
図版1 1 上空より北側筑後川方面を望む	

- 2 第2次調査区全景（上が北）
- 図版2 1 第3次調査区全景 上空より西側を望む
2 第4次調査区全景 上空より東側を望む
- 図版3 1 第3次調査区23～28区
2 第3次調査区5～12区
- 図版4 1 第4次調査区全景（上が北）
2 第4次調査区1～4区
3 第4次調査区12～22区
- 図版5 1 1号竪穴住居跡貼床検出状況（東から）
2 1号竪穴住居跡（北から）
3 2号竪穴住居跡（北から）
- 図版6 1 3・4号竪穴住居跡（空中写真 上が北）
2 3・4号竪穴住居跡検出面遺物出土状況
3 5号竪穴住居跡（空中写真 上が東）
- 図版7 1 1号貯蔵穴（西から）
2 1号貯蔵穴堆積状況（西から）
3 2号貯蔵穴（西から）
- 図版8 1 3号貯蔵穴（西から）
2 4～6号貯蔵穴（南から）
3 4号貯蔵穴（南から）
- 図版9 1 7号貯蔵穴（北東から）
2 9号貯蔵穴（北から）
3 11号貯蔵穴（南から）
- 図版10 1 1号土坑（南から）
2 2号土坑（南西から）
3 3号土坑（西から）
- 図版11 1 4号土坑（南から）
2 5号土坑（北西から）
3 8号土坑完掘状況（西から）
- 図版12 1 9号土坑出土状況（東から）
2 9号土坑断ち割り・完掘状況（東から）
3 10号土坑出土状況（東から）
- 図版13 1 11号土坑出土状況（東から）
2 1・2号溝完掘状況（北から）
3 1・2号溝土層（北から）
- 図版14 1 1・2号溝土層（北から）
2 1号溝土層（南から）
3 4号溝土層（南から）
- 図版15 1 5号溝土層（北から）
2 5号溝土層（北から）
3 7号溝完掘状況（南西から）
- 図版16 1 7号溝土層（北から）
2 8・9号溝完掘状況（南西から）

- 3 第3次調査区 3 A区西壁谷部堆積状況（東から）
- 図版17 1 第4次調査区 22A区北壁谷部堆積状況（南西から）
 2 第4次調査区 22B区縄文時代包含層下地山検出状況（北から）
 3 第3次調査区 4 A区古墳時代包含層土器出土状況（北から）
- 図版18 1 第3次調査区 4 A区古墳時代包含層土器出土状況（東から）
 2 第4次調査区 19 A区古墳時代包含層土器出土状況（南東から）
 3 第4次調査区 19 A区古墳時代包含層土器出土状況（西から）
- 図版19 1～4号竪穴住居跡・1号貯蔵穴出土遺物
- 図版20 2号貯蔵穴・1・6・9号土坑出土遺物
- 図版21 縄文時代包含層出土遺物①
- 図版22 縄文時代包含層出土遺物②
- 図版23 古墳時代包含層出土遺物①
- 図版24 古墳時代包含層出土遺物②
- 図版25 古墳時代包含層出土遺物③
- 図版26 古墳時代包含層・その他の遺構出土遺物
- 図版27 古墳時代包含層・調査区内出土遺物
- 図版28 調査区内出土遺物

挿図目次

第1図	うきは市の位置	1
第2図	浮羽究真館高等学校と文化財調査区の配置図	2
第3図	周辺遺跡分布図（1/50,000）	7
第4図	周辺既調査遺跡位置図（1/25,000）	8
第5図	浮羽高等女学校採集資料実測図（2/3）	10
第6図	竹重遺跡 遺構配置図（1/400）	11・12
第7図	第2・3次調査区 集落部遺構配置図（1/250）	13・14
第8図	第3・4次調査区 谷部付近遺構配置図（1/250）	15・16
第9図	1号竪穴住居跡実測図（1/60）	18
第10図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図 ①（1/3）	20
第11図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図 ②（1/3、36は2/3）	21
第12図	2号竪穴住居跡実測図（1/60）	22
第13図	2号竪穴住居跡出土遺物実測図 ①（1/3）	23
第14図	2号竪穴住居跡出土遺物実測図 ②（1/3、24・25は2/3）	24
第15図	3・4号竪穴住居跡実測図（1/60）	25
第16図	3・4号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）	26
第17図	5・6号竪穴住居跡実測図（1/60）	28
第18図	5・6号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3、7・8は2/3）	29
第19図	7号竪穴住居跡実測図（1/60）	30
第20図	7号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）	30
第21図	1～3号貯蔵穴実測図（1/40）	31
第22図	1号貯蔵穴出土遺物実測図（1/3）	32
第23図	2・3号貯蔵穴出土遺物実測図 ①（1/3）	33

第24図	2号貯蔵穴出土遺物実測図 ② (1/2)	34
第25図	4～8号貯蔵穴実測図 (1/40)	35
第26図	4・7・8号貯蔵穴出土遺物実測図 (1/3)	36
第27図	9～11号貯蔵穴実測図 (1/40)	37
第28図	9・10号貯蔵穴出土遺物実測図 (1/3)	38
第29図	1～5号土坑実測図 (1/40)	40
第30図	6・7号土坑実測図 (1/40)	41
第31図	1～6号土坑出土遺物実測図 (1/3、2・14は2/3)	42
第32図	8・10・11号土坑実測図 (1/20)	44
第33図	9号土坑実測図 (1/20)	45
第34図	8～11号土坑出土遺物実測図 (1/3)	47
第35図	12・13号土坑実測図 (1/20)	48
第36図	12・13号土坑出土遺物実測図 (1・2は1/3、3は2/3、4は1/2)	49
第37図	1～11号溝土層断面実測図 (1/30)	51
第38図	1・3・5号溝出土遺物実測図 (1/3、7は1/2)	52
第39図	7号溝出土遺物実測図 (1～3は1/2、4・5は2/3)	54
第40図	第3・4次調査区包含層土層図 (1/60)	56
第41図	縄文時代包含層縄文土器実測図 ① (1/3)	58
第42図	縄文時代包含層縄文土器実測図 ② (1/3)	60
第43図	縄文時代包含層出土石器実測図 ① (2/3、14は1/2)	61
第44図	縄文時代包含層出土石器実測図 ② (1/2)	62
第45図	古墳時代包含層出土遺物実測図 ① (1/3)	65
第46図	古墳時代包含層出土遺物実測図 ② (1/3)	66
第47図	古墳時代包含層出土遺物実測図 ③ (1/3)	67
第48図	古墳時代包含層出土遺物実測図 ④ (1/3)	69
第49図	古墳時代包含層出土遺物実測図 ⑤ (1/3)	71
第50図	古墳時代包含層出土遺物実測図 ⑥ (1/3)	72
第51図	古墳時代包含層出土遺物実測図 ⑦ (1/3)	75
第52図	古墳時代包含層出土遺物実測図 ⑧ (1/3)	76
第53図	古墳時代包含層出土遺物実測図 ⑨ (1/3)	78
第54図	古墳時代包含層出土遺物実測図 ⑩ (1/3)	79
第55図	古墳時代包含層出土遺物実測図 ⑪ (1は1/2、2・3は2/3)	80
第56図	古代包含層出土遺物実測図 (1/3)	82
第57図	第2次調査区ピット出土遺物実測図 (1/3、9・10は2/3)	83
第58図	第2次調査区包含層等出土遺物実測図 ① (1/3)	84
第59図	第2次調査区包含層等出土遺物実測図 ② (1/3、39～42は2/3)	85
第60図	第3次調査区遺構外出土遺物実測図 (2/3、8・9は1/1)	87
第61図	第4次調査区ピット等出土遺物実測図 (1/3)	88
第62図	戦争関連遺構実測図 (1/100)	90
第63図	戦争関連遺構出土土管実測図 (1/8)	91
第64図	出土遺構配置略図	94
第65図	手焙形土器の諸例 (1/5)	96

I はじめに

1 調査に至る経緯

竹重遺跡は、福岡県うきは市吉井町生葉658番地に所在する福岡県立浮羽究真館高等学校敷地を中心として捉えられている遺跡である。

浮羽究真館高等学校は、平成17年4月に浮羽高等学校と浮羽東高等学校とが合併して誕生した高等学校である。浮羽高等学校は、大正10年に誕生した浮羽中学校を前身とするもので、平成20年に創立100周年を迎えた歴史ある学校である。新しく名付けられた校名「究真館」は、校舎正面の碑文にある「究真汲情 進取創造」からとられている。

大規模改築工事は、平成17年度に始まり平成21年度に完了した。事業着手に先立ち、県教育庁施設課から試掘調査の依頼が提出された。第1期改築工事は既存校舎の南側に新たに校舎を建設するもの（新第1棟建築工事）である。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地（竹重遺跡）に含まれており、しかも平成10年度には体育館改築工事に伴い発掘調査を実施している（第1次調査）ことから、遺跡の範囲を確認するための確認調査から実施することとした。確認調査は平成17年9月26日に実施し、文化財が確認されたことから発掘調査を実施することとなった（第2次調査）。

第2次調査において前方後方墳の検出といった重要な発見があったため、平成18年度に出土品の整理作業を実施し、古墳時代に関する報告書を刊行した。

平成19年度には第2次調査地の北側に隣接する地点の普通教室棟および視聴覚・図書館棟の解体工事（第2期解体工事）ならびに同地点に管理棟を建設する工事（第3期改築工事）が予定された。文化財の協議に関しては、第2次調査の成果から今後も継続した協議が必要としていたため円滑に進められた。ただし校舎の解体は騒音等の関係で夏季休暇中に実施することとされ、また年度内に改築工事に着手する必要があったため、文化財調査については10月から翌年の1月にかけての期間であることが予め設定された。校舎解体にあたっては、基礎を除去すれば文化財を毀損するおそれがあることから、基礎を残し地表面から上部を撤去することとした。また校舎に接して多くの樹木が植樹されていたが、これらについても撤去の際には抜根せず、地表面にて切断することで事前の協議を整えた。9月7日には現地における定期工程会議の中で文化財に係る協議を行い、具体的

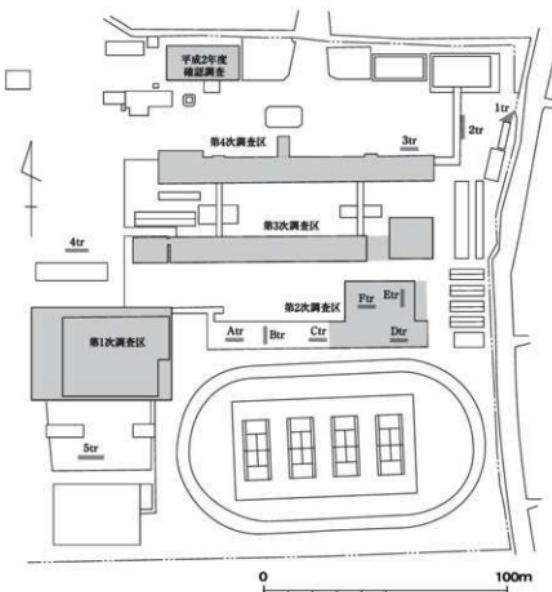


第1図 うきは市の位置

な作業工程や安全管理について確認を行った。調査期間が限定されており試掘調査を行い得ず、対象面積に対して調査面積の絞り込むことができなかった。排出土については、建設予定地に隣接する空き地をあてることとし、調査区の反転は行わず一気に表土除去して調査をすすめることと計画した。発掘調査は平成19年10月11日から開始し、ほぼ年内に作業を終了させ、安全対策の埋め戻しを含め全ての工程を翌年1月23日に完了させた（第3次調査）。

平成21年度は管理・特別教室棟の解体工事（第4期解体工事）が予定された。着工に先立って県営繕課との間で文化財に関する協議を行った。校舎解体工事を上部構造に留め、解体後は緑地もしくは駐輪場等文化財に影響の及ばない簡易な工事であれば、工事立会によるものとし、埋蔵文化財の保護にも繋がることで調整を図ったが、産業廃棄物処理の観点から地中に校舎基礎を残すことは不適とされ、校舎を撤去することが決定しているとのことであった。基礎を撤去するならば埋蔵文化財への影響は避けられず、発掘調査を実施する方向で調整をおこなった。工事最終年度ということで、平成19年度と同様に夏季休暇中に解体工事を実施し、年度内に外構工事等を完了する必要があった。また、整理・報告書作成についても平成21年度中に完了することが求められ、慌しいスケジュールを構成することとなった。第3次調査同様、基礎を残して地表面から上部を撤去し、基礎の間を掘り下げる調査となつた。また試掘調査を行ひ得なかつたため、調査当初にトレーニチを設定して遺構を確認しながら調査範囲を確定することとした。排出土は調査区周辺の空スペース

を利用することとなり、一気に表土除去して調査をすすめることと計画した。発掘調査は平成21年8月10日に開始し、10月14日に作業を終了、埋め戻しを含め15日に営繕設備課と現地確認をして全ての工程を完了させた（第4次調査）。なお、同年度に部室と渡り廊下、ゴミ処分場の改築工事が予定され、6月に確認調査を実施したが、第4次調査予定箇所付近以外の箇所では文化財は確認されず、工事着工に差し支えないないと判断された。



第2図 浮羽究真館高等学校と文化財調査区の配置図

2 調査の経過

1) 第2次調査

第2次調査の経過については『竹重遺跡2』に記載しており、ここでは概略を記すこととする。なお、第1次調査とは、平成10年に実施した体育館改築に係る発掘調査を指すものとし、この成果については平成11年度に「福岡県文化財調査報告書第147集」として刊行されている。

平成17年9月26日の確認調査により文化財の存在が確認されたことから、営繕課・教育庁施設課・高等学校との協議を重ね、11月14日から第2次調査に取り掛かった。グランド整地時の客土等の土量が多いことなどにより表土除去作業は想定以上に時間を費やした。11月18日より発掘作業員とともに遺構掘削を開始し、調査区東端の豎穴住居跡とその周辺から調査に取り組んだ。溝状遺構の存在には気付いていたものの、それが前方後方墳の周溝と認識できたのは1月11のことであり、急速主体部の有無について精査を実施したが、既に削平もしくは搅乱により失われていることが判明した。調査成果については、大学入試等も控える時期もあり一般向けの説明会は見送ったが、2月22日に生徒向けの説明会を開催した。その後、図面作成等を行い3月3日に発掘作業を終了した。

2) 第3次調査

第3次調査地点については、第2次調査の成果から埋蔵文化財は存在するものとして発掘調査の体制を整えた。調査区西端は埋蔵文化財が存在する可能性が低いと考え、表土除去を開始した。先述のように基礎を残した状態であったため、調査区がコンクリートのマス状を為しており、重機による作業の効率が悪いものとなった。調査区の名称についてはコンクリート枠を利用し、西から東に向かって1・2・3…とし、南から北に向かってA・B・Cとし、その組み合わせで区名とした。

西端(1A区)から表土除去を開始したが、2区間は搅乱が著しく調査対象から除外した。3区からは搅乱下層にて遺構面を検出し、土師器が多く出土したため調査対象とした。全面にわたって発掘調査が必要かと思われたが、19区から22区に関しては校舎建設時に徹底的に破壊を受けており文化財が残されていことがわかった。また遺構面が深いことから排土置き場が確保できるかどうか不安要素を抱えたが、東端の視覚覚棟部分では表土直下で遺構が検出される具合に遺構面は東に向かって上昇し、施工範囲内できまかうことことができた。

発掘調査は北筑後教育事務所の文化財担当である岸本が担当することとなったが、うきは市が事業主体となる三春工業団地造成に係る発掘調査が調査規模・内容的にも支援を要する状況にあり、うきは市教育委員会からの派遣依頼を受けて調査支援することとなった。全体的な遺構検出と西に広がる包含層の堆積状況の確認を実施していたが、10月一杯で東側の遺構が集中する地点を終了させ、交代することとした。11月からは調査第一係の下原が調査を担当することとなり包含層を上層より掘削する方向で調査を進めた。しかし県立修猷館高等学校の改築事業に係る発掘調査について下原が調査担当となることで協議を整えていたため、同事業が始まる12月には再び調査担当が交代することとなった。下原が古墳時代の包含層の掘削に目処をつけ、12月からは調査第二係の城門が担当して縄文時代の包含層の掘削およびその下層での遺構検出を行うこととなった。年内で発掘調査を終了する方向で進め、12月27日に気球による空中写真を撮影、年が変わって1月

9日に発掘機材を撤収し、安全対策を含め調査地の埋め戻しを行った。調査成果については、大学入試センター試験等も控える時期もあり、説明会は見送ったが、11月19日、12月14日、1月9日の3度、発掘調査ニュースという形で案内板を設置した。(写真1)

3) 第4次調査

第4次調査地点に関しては、第2・3次調査の成果から埋蔵文化財は存在するものとして体制を整えた。

この調査では改築事業最終年度ということで年度内の報告書作成を求められ、建物上部の解体工事との関係上調査期間が限定されること、また排土置き場の十分な確保が困難であったことから、排土の量と調査範囲の早急な確定が必要であった。このため、これまでの調査結果から遺構が高い位置に存在すると推測された調査区東端から表土除去を始め、作業員を投入しながら調査範囲を確定することとした。第3次調査同様、基礎を残したコンクリートの升状の調査区の掘削であり、排土置き場にも工夫しながらの重機による作業であったため、効率が悪いものとなった。調査区の名称については、本来3次調査区と合わせるべきであったが、表土除去の都合により東から西に向かって1・2・3…とし、南から北にむかってA・Bとしてこれらを合わせて区名とした。

東端(1区)から表土除去を開始し、1・2・3区A・4区Aでは搅乱下層にて茶灰色土の包含層と遺構面を検出したため調査対象とした。これより西はA区は5区から9区と12区が、B区は3区から11区までが校舎建設時に破壊を受けており、文化財が残されていことがわかった。また23区から25区は谷の深部に当たるため遺構面が深く、基礎底部より1m以上の人による掘削が必要となり伴うこと、また確認調査により遺物を確認できなかったことから調査対象外とした。これにより23~25区を排土置き場とすることができた。

発掘調査は北筑後教育事務所の文化財担当である斎部が担当することとなった。第3次調査同様、全体的な遺構検出と西に落ちる包含層の堆積状況の確認を実施した。しかし東側1~4区では搅乱が激しく、明確な遺構はほとんど確認できずピットと小片の土器を少量検出したのみであった。また全体的に巨大な風倒木の痕跡が散在し、一部遺構と見誤り掘削した箇所もあった。中央部10~14区まではピット・浅い落ち込みと溝を確認し、15区からは第3次調査区から続くと思われる溝と谷状の落ち込みを検出した。総体的に出土土器は少なかったが、谷部に落ち込む古墳時代の包含層からは比較的まとまった土器の出土があった。その下層では第3次調査で確認された縄文時代の包含層と同じと思われる粘土層を確認したものの、遺物は全く含まれておらず、また湧水が激しく掘削が困難を極めたため、21区Bで層の厚さを確認して掘削を終了した。

10月1日に気球による空中写真を撮影、その後、図面作成を行ながら安全対策のため重機による埋め戻しを行い、10月14日に発掘機材を撤収した。10月15日には営繕設備課と現地の状況確認を行い、埋め戻しを含め調査を完了した。なお調査成果については、遺構・遺物ともに顯著な成

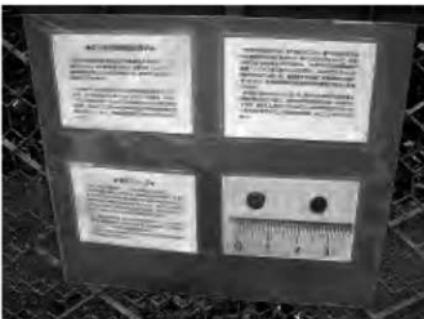


写真1 発掘調査ニュースの掲示

果がなかったことから、説明会及びその他の案内は実施しなかった。

3 調査の体制

発掘調査および報告書作成に係る福岡県教育庁の体制は下記のとおりである。

	平成17年度 (発掘調査)	平成19年度 (発掘調査)	平成21年度 (発掘調査・報告書作成)
総括			
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	清水 圭輔	樋崎洋二郎	亀岡 靖
総務部長	中原 一憲	大島 和寛	荒巻 俊彦
文化財保護課長	久芳 昭文	磯村 幸男 (本職理事)	平川 昌弘
副課長	川述 昭人	佐々木隆彦	池邊 元明
参事	佐々木隆彦 新原 正典	新原 正典	
課長補佐	安川 正輝 (本参事)	中蘭 宏 (本参事)	前原 俊史
課長技術補佐	木下 修 (本参事) 池邊 元明 (本参事)	池邊 元明 (本参事) 小池 史哲 (本参事)	小池 史哲 (本参事) 伊崎 俊秋 (本参事)
参事補佐			日高 公徳
庶務			
管理係長	稻尾 茂 (本参事補佐)	井手 優二	富永 育夫
管理係	石橋 伸二 末竹 元 潤上 大輔	潤上 大輔 柏村 正央 小宮辰之	藤木 豊 野田 雅 近藤 一崇 仲野 洋輔
調査・報告書作成			
調査第一係長	小池 史哲 (本参事補佐)	小田 和利 (本参事補佐)	吉村 靖徳
調査第一係	岸本 圭	岸本 圭 下原 幸裕	佐々木隆彦 (参事補佐) 齋部 麻矢
調査第二係		城門 義廣	岸本 圭 下原 幸裕 城門 義廣

発掘調査から調査報告書作成に至る過程で、うきは市・同教育委員会からは様々なご援助とご協力を頂いた。また発掘調査にあたっては、校長をはじめ高等学校の方々には様々なご協力を頂き、久留米市をはじめ近隣の市町村教育委員会から現地にて多くのご教示いただいた。また、九州大学理科学院助教 坂井 卓氏には御多忙の中、縞状岩石の分析および玉稿を賜った。ここに記して謝意を表します。

II 位置と環境

1 地理的環境

竹重遺跡の位置するうきは市は、2005年3月に旧浮羽郡吉井町と浮羽町が合併して新たに誕生した市である。福岡県の南東部に位置し、東は久留米市と接し、西は大分県日田市と接する。北には福岡県の三大河川の一つであり、「筑紫次郎」呼ばれ愛される一級河川筑後川が流れ、その度重なる氾濫と支流によって形成された肥沃な沖積平野である筑後平野が広がる。南には屏風にもたとえられる標高700~800mの耳納山連が控え、その北麓には小河川が形成した扇状地が広がる自然豊かな地勢である。竹重遺跡は、その扇状地の先端部、久留米市との市境近くに位置する。うきは市は平野部の水田を中心とする農業と、山麓の扇状地での葡萄や柿などの果樹栽培が盛んである。旧吉井町は江戸時代には天領日田に抜ける豊後街道の宿場町として栄え、現在も旧街道沿いを中心に見事な白壁づくりの町並みが残されている。地元の努力により保存と活用が進められたこの町並みは、平成9年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、その後整備も進んで往時を偲ばせる賑わいを見せている。

2 歴史的環境

歴史的環境についてはこれまで数多く刊行された発掘調査報告書に詳しく記載されている。またうきは市内を中心とした耳納山麓に多数所在する裝飾古墳を初めとする古墳については、「竹重遺跡2」に詳しく記載されているため、ここでは今回報告する縄文時代~古墳時代の集落遺跡について、周辺の調査例を概観する。

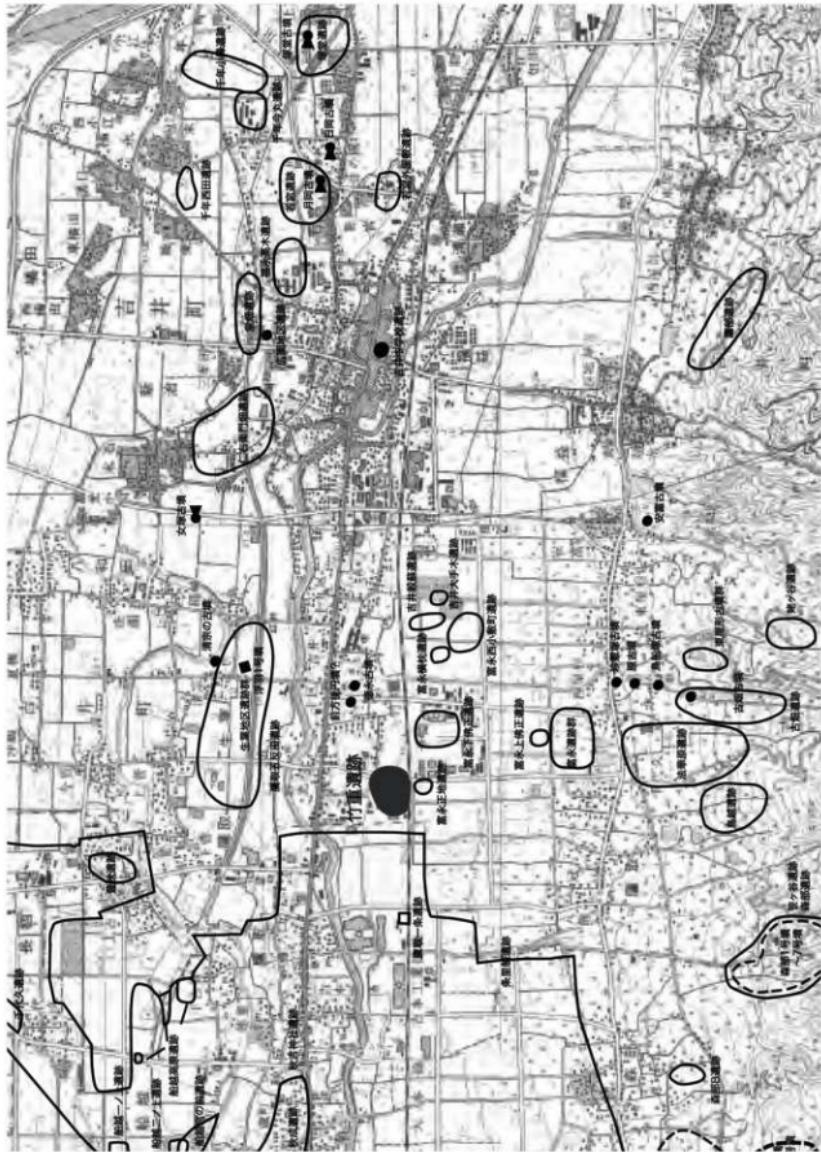
縄文時代の遺跡については、うきは市内を始め周辺地域においても調査事例が多くない。早期~中期については本遺跡の南側、耳納山麓の扇状地所在の旧吉井町法華原遺跡をはじめ、耳納山麓の各所で土器が採集されるのみで、明確な遺構は確認されていない。後期~晩期になると、平野部で複数の遺跡が確認される。三春大碗遺跡、若宮外屋敷遺跡、柳瀬遺跡では後期の住居跡などが調査され、集落の様相の一端が明らかになっている。その他月岡古墳周辺で完形の土器が採集され、国道201号浮羽バイパス建設に伴う発掘調査で筑後川に近い複数の遺跡において縄文土器が採集されている。さらには竹重遺跡の南に近接する富永正地遺跡で縄文時代後期~古墳時代前期の遺構・遺物が確認されており、本遺跡との関連が重視されるところである。

弥生時代前期の集落遺跡としては、大碗遺跡で前期後半~中期初頭の竪穴住居跡14棟をはじめ、貯蔵穴・土坑・溝などが多い数確認されている。特に貯蔵穴や溝からは、比較的まとまった良好な資料が一括出土しており、報告書において詳細な分析が為されている。前期末~中期前半では仁右衛門畠遺跡をはじめ、田島北遺跡、隣接する久留米市水分遺跡等で竪穴住居跡他貯蔵穴などが確認されている。特に水分遺跡ではこれまでトレンチ状の調査での確認であったが、平成21年度に水分小学校の体育館建替工事に伴い、久留米市による発掘調査が実施され、竪穴住居跡や井戸、土坑等が更に確認されており、後の報告が待たれる。弥生時代後期の遺跡としては、浮羽バイパス建設に



第3図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

- | | | | | | | | | |
|------------|------------|-------------|-------------|--------------|-------------|------------|-----------|-------------|
| 1 竹森遺跡 | 2 日木遺跡 | 3 大穴遺跡 | 4 今水原古墳 | 5 桜塚遺跡 | 6 西原上古墳 | 7 重定古墳 | 8 佐原古墳 | 9 雪花原古墳 |
| 10 千年田遺跡 | 11 千年西田遺跡 | 12 千年今木遺跡 | 13 寒室古墳 | 14 寒室古墳 | 15 若宮古墳 | 16 日岡古墳 | 17 月岡古墳 | 18 若宮居敷遺跡 |
| 19 桜塚古水道跡 | 20 宮坂古水道跡 | 21 仁和地区遺跡 | 22 石舟門遺跡 | 23 石舟門遺跡 | 24 女屋古墳 | 25 清宗の古墳 | 26 生ノ里古墳 | 27 生養地区遺跡 |
| 28 鶴丘古田遺跡 | 29 古田遺跡 | 30 宮後円墳? | 31 鹿水遺跡 | 32 富水正丸遺跡 | 33 富水下平正丸遺跡 | 34 富水枕遺跡 | 35 吉井森遺跡 | 36 吉井井手遺跡 |
| 37 富水小野遺跡 | 38 富水長嶺遺跡 | 39 宮後遺跡 | 40 富水上平正丸遺跡 | 41 富水土上平正丸遺跡 | 42 参峯原古墳 | 43 古原古墳 | 44 鳥居原古墳 | 45 吉彌古墳 |
| 46 古谷遺跡 | 47 矢張糸古墳群 | 48 穂越遺跡 | 49 矢張原古墳 | 50 矢張原上平正丸遺跡 | 51 条牧原古墳 | 52 畠林遺跡 | 53 千代久入遺跡 | 54 熊本高原道路 |
| 55 鶴見一色遺跡 | 56 稲荷山遺跡 | 57 小川遺跡 | 58 稲荷山二ノ上遺跡 | 59 稲荷山の前遺跡 | 60 伏見遺跡 | 61 和吉社遺跡 | 62 万字路 | 63 榎本地区遺跡群 |
| 64 仁門遺跡 | 65 仁守寺北遺跡 | 66 常盤遺跡 | 67 木分遺跡 | 68 田主丸中守遺跡 | 69 佐々木遺跡 | 70 有部遺跡 | 71 本部古墳群 | 72 本部古墳群 |
| 73 田主丸大塚古墳 | 74 田主丸大塚古墳 | 75 大塚清長塚古墳群 | 76 平原古墳群 | 77 石舟山遺跡 | 78 快利別遺跡 | 79 石舟山西筋古墳 | 80 石舟山東古墳 | 81 石舟山鳥居越古墳 |
| 82 石川遺跡 | 83 大井古墳群 | 84 大井2号墳 | 85 二井A遺跡 | 86 二井B遺跡 | 87 白安遺跡 | 88 益生古墳群 | 89 益生田古墳群 | 90 美生古墳群 |



第4図 周辺既調査遺跡位置図(1/25,000)

係る発掘調査によって、仁右衛門烟遺跡、日永遺跡、塚堂遺跡、福永高木遺跡等で大規模な調査が実施され、日永遺跡では堅穴住居跡とともに広型銅矛1本、広型銅戈1本を含めた埋納遺構が確認されていることは特筆される。また、大的遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の水田跡が確認されていることも注目される。墓地としては旧浮羽町岩野遺跡で中期前半に続く壺棺墓・箱式石棺、土壙墓が多数確認されている。

古墳時代前期の集落遺跡として特筆されるのは、塚堂遺跡での大規模な集落遺構の調査である。前期～中期に継続する集落で、前期においては外来系の遺物が出土し、中期には地域の中でも先進的に住居群が検出されている。特に前期の住居跡や大溝からは古式土師器の良好な資料がまとまって出土しており、それらからは畿内と地元との関連、また山陰地方など他地域との関連が窺える。土器については報告書内で詳細な編年が行われている。さらに富永正地遺跡においても集落及び古式土師器が竹重遺跡と似通った状況で確認されている。その他仁右衛門烟遺跡、吉井中学校遺跡、堂烟遺跡においても前期の大規模な集落や土器群が調査されており、当地域に築造される首長墓をはじめとする数多くの古墳群とも合わせ、当該期の集落構造や社会構造、また畿内をはじめとする他地域との交流や関連を検討する好資料が増加している。

古代の遺跡としては浮羽バイパス関係調査にて仁右衛門烟遺跡、堂烟遺跡、船越二ノ上遺跡など集落が確認されている。特に船越二ノ上遺跡においては土坑から10世紀初頭の黒色土器をはじめとする良好な一括資料が出土していることが注目される。旧筑後国には奈良時代以降長年筑後国府がおかれて、高良山神籠石や小郡官衙遺跡、下高橋官衙遺跡の存在など、その前後の時代においても筑後地域は重要な位置を占めていたことは明らかである。耳納山麓に広がる条里遺構や耳納山麓の冠地区で採集されている白鳳期の瓦、吉井町堺町遺跡の条里に整合する溝、長柄前畠遺跡でまとまって出土した古代の瓦など、今後のうきは市周辺における新たな古代の遺跡の発見が予想される。

【参考文献】

馬田弘稔編	1983 「塚堂遺跡Ⅰ」	浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第1集
飛野博文・水ノ江和同編	1994 「堺町・大蛇遺跡」	浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第8集
江島尚子編	1997 「富永正地遺跡～遺物編～」	吉井町文化財調査報告書 第9集
水ノ江和同編	1998 「鷹取五反田遺跡Ⅰ」	浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第9集
水ノ江和同編	1999 「鷹取五反田遺跡Ⅱ」	浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第10集
吉田東明編	1999 「船越二ノ上遺跡」	浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第11集
丸林植彦編	1999 「田主丸町遺跡等詳細分布調査報告書」	田主丸町文化財調査報告書 第12集
吉田東明編	2000 「仁右衛門烟遺跡Ⅰ」	浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第12集
吉田東明編	2001 「仁右衛門烟遺跡Ⅱ」	浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第13集
重藤輝行編	2002 「堂烟遺跡Ⅰ」	浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第17集
大庭孝夫編	2004 「堂烟遺跡Ⅱ」	浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第20集
大庭孝夫編	2005 「堂烟遺跡Ⅲ」	浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第23集
森井啓次編	2000 「竹重遺跡」	福岡県文化財調査報告書 第147集
岸本圭編	2008 「竹重遺跡2」	福岡県文化財調査報告書 第217集
寺崎克史編	2004 「柳瀬遺跡（下層編）」	浮羽町文化財調査報告書 第18集
寺崎克史編	2006 「若宮外屋敷遺跡」	うきは市文化財調査報告書 第1集
寺崎克史編	2009 「三春大蛇遺跡1」	うきは市文化財調査報告書 第7集

3 浮羽高等女学校採集資料の紹介

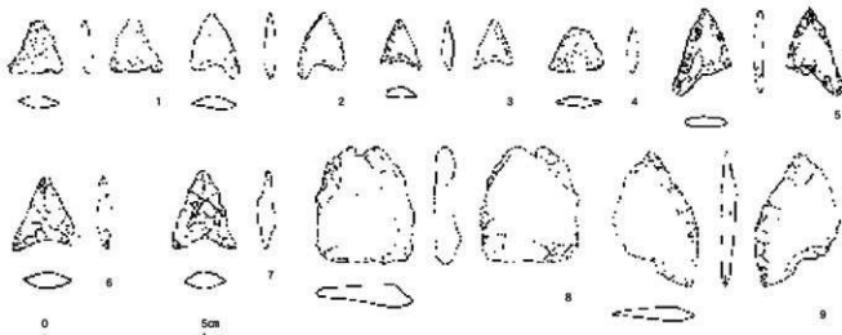
本資料は田中幸夫氏が昭和56年10月に九州歴史資料館に寄贈した資料の一部であり、写真のみ『田中幸夫寄贈品目録』(九州歴史資料館編: 1982)に掲載されている。田中氏は昭和14年5月に福岡県立浮羽高等女学校に赴任され、昭和24年まで同校で教諭として勤められており、本資料はこの時期に採集された可能性が高い。今回竹重遺跡の報告に合わせて本資料を紹介する。

1~7は打製石鎌。1は平基式で、裏面に主要剥離面を残す。先端は欠損するが、現代の折損と考えられる。安山岩製。2は凹基式の剥片鎌で、側縁部および抉り部のみに調整を加える。

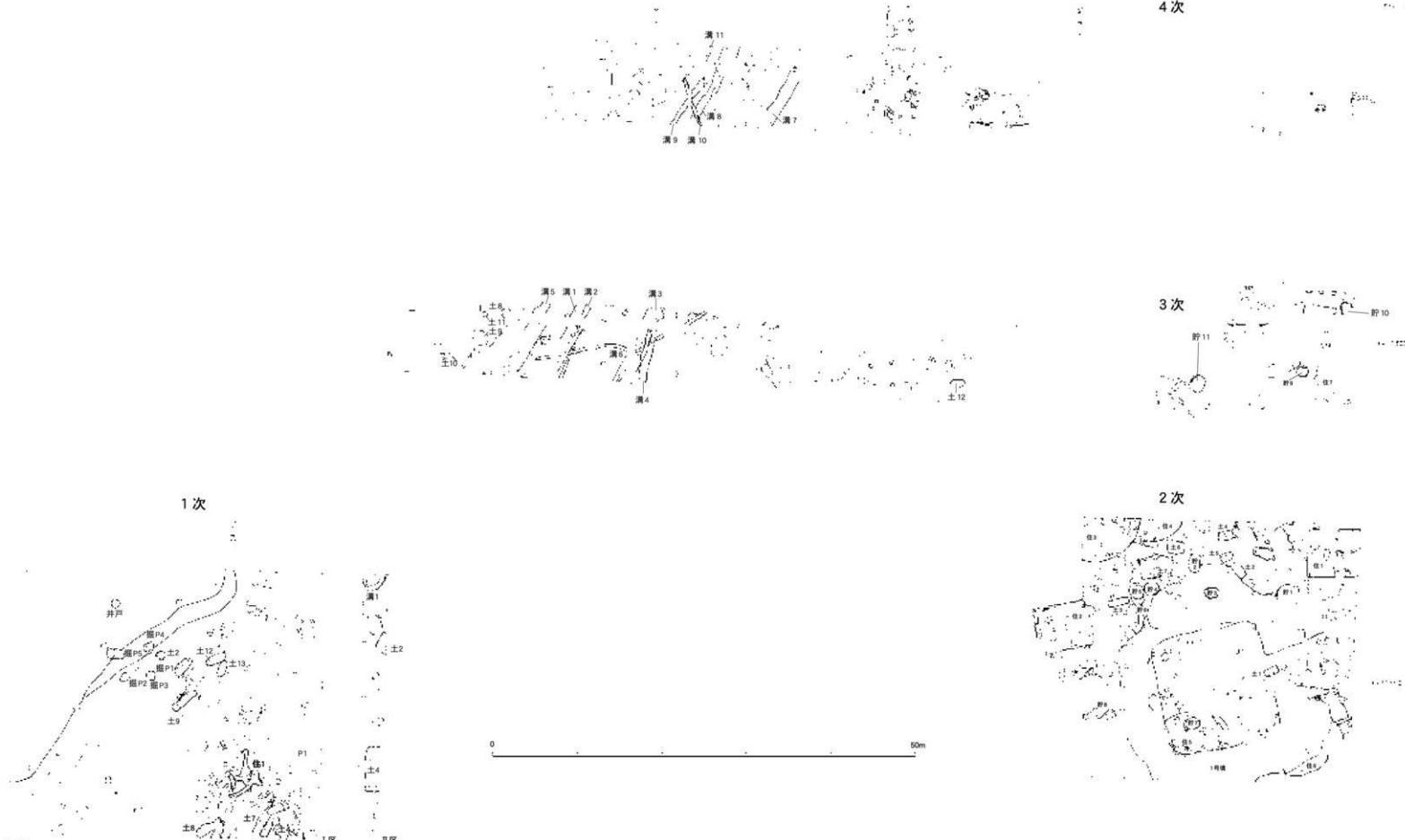
片脚が欠損したように見えるが、剥離痕等なく当時からこの形であったと推測される。安山岩製。3は凹基式で、2と同じく側縁部及び抉り部にのみ調整を加える。安山岩製。4は平基式で全面に粗い調整を施す。先端は欠損しているが、正三角形に近い平面形をしていたと推測される。安山岩製。5は凹基式で、両面に主要剥離面を残す。抉りが深く、側縁の調整も精緻であることから縄文時代の所産であろう。黒曜石製。6は凹基式で、全面に調整を施す。安山岩製。7は凹基式で全面に粗い調整を施す。安山岩製。8、9は打製石鎌の未完成品と考えられる。8は縦長剥片を使用し、粗削り後、左側縁に細かい調整を加えている。ここから石鎌にすることは可能であり、製作途中のものと考えられる。安山岩製。9は横長剥片を使用し、側縁に調整を加えている。抉り部分にも調整が見られるが、左下側が薄かったために脚部を削出できず廃棄したものであろうか。安山岩製。この他、図録の写真には掲載してあるものの、現在は行方不明の打製石鎌が1点ある。写真を見ると安山岩質の凹基式打製石鎌である。



写真2 浮羽高等女学校採集の石器
(第5図と同順)



第5図 浮羽高等女学校採集資料実測図 (2/3)



第6図 竹重遺跡 遺構配置図 (1/400)

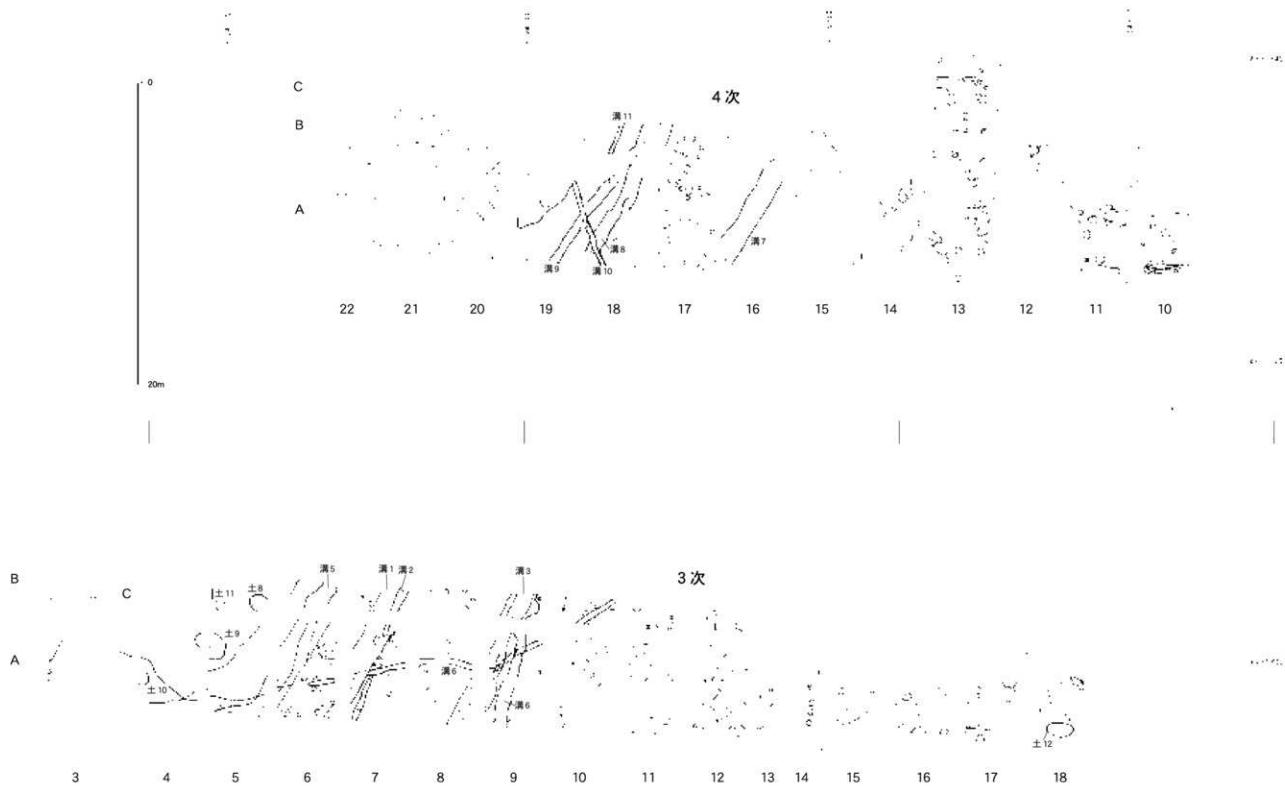
3次

23 24 25 26 27 28

2次



第7図 第2・3次調査区 集落部構造配置図 (1/250)



III 調査の記録

1 遺跡の概要

竹重遺跡については、福岡県立浮羽究真館高等学校関連の発掘調査により遺跡全体の概要が判明しつつある。遺跡全体を概観すると、地理的に大きく二分される。つまり南東側を中心とする台地状の平坦部と、北西側に向かって傾斜する緩やかな谷部である。前者には弥生時代前期および後期の集落が営まれ、その後古墳時代になって前方後方墳が築かれる。後者には遺物包含層が形成されており、上層から古代・古墳時代前期・縄文時代前期という堆積が確認されている。

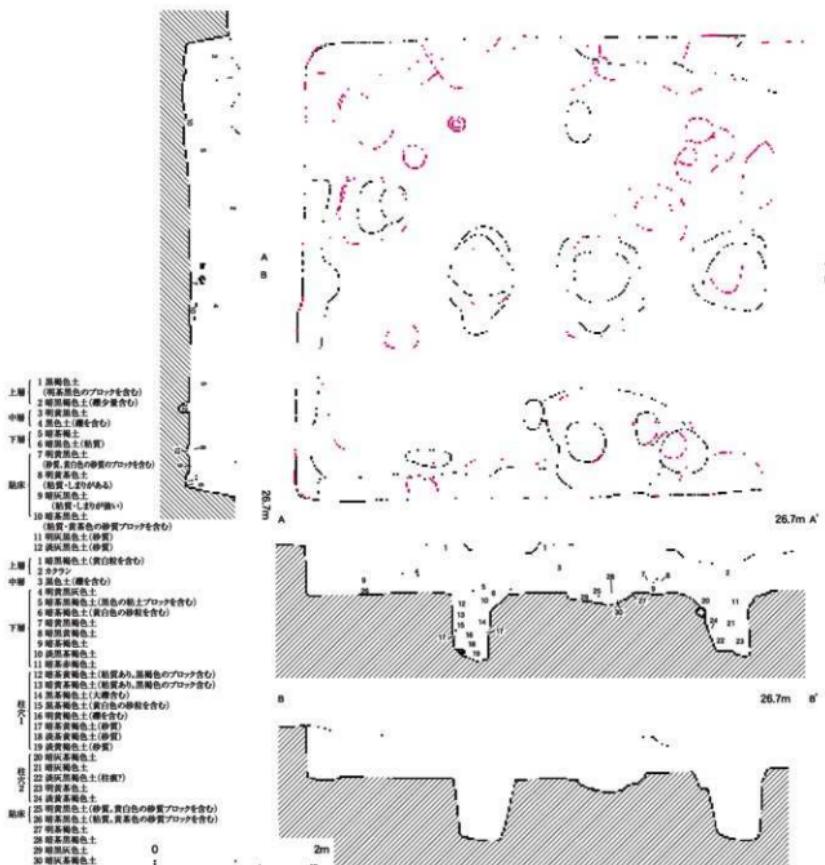
調査次数との関係でいうと、第1次調査は上記地形の変換線付近の調査であり、古墳時代前期の掘立柱建物と井戸が検出されている。また縄文時代前期の土坑が検出され、包含層からも縄文時代前期の土器が出土している。第2次調査は台地状平坦部の調査を主とするもので、西に広がる包含層については試掘調査で文化財が確認できず調査対象から外している。前方後方墳が検出された点は特筆されるが、その他弥生時代前期の堅穴住居や貯蔵穴、弥生時代後期の堅穴住居が検出される等内容は充実している。第3次調査では、東部は第2次調査の延長で台地状平坦部があり弥生時代前期の貯蔵穴等が検出された。西部については谷地形に包含層が形成され、その上面に弥生時代前中期の溝が確認された。第4次調査でも東部は高い位置に地山面があることが確認されたが遺構密度は低く、住居跡や貯蔵穴などは検出されなかった。西部には第3次調査から続く谷地形に包含層が形成され、その上面に弥生時代前期及び後期と考えられる溝状遺構が検出されている。第8図は谷部の遺構配置図であるが、第1次調査も含め、各調査で検出された包含層は一連のものであり、溝状遺構も同一のものが検出されたと判断される。

先述のとおり竹重遺跡は浮羽究真館高校敷地を中心とするものであるが、周辺で旧吉井町教育委員会が農業基盤整備事業に関連して調査した遺跡とも連続するものの可能性が高い。特に浮羽究真館高校の南側には富永正地遺跡があり、同一時期の集落が確認されていることは注目される。これについてはまとめで後述したい。

なお竹重遺跡は、1977年に福岡県教育委員会が刊行した『福岡県遺跡等分布地図（浮羽郡編）』によると、今回の調査地点より500m東の竹重集落内に記されている。しかし1995年に旧吉井町が刊行した『吉井町遺跡等詳細分布調査報告書』によると、今回発掘調査を実施した浮羽究真館高等学校敷地に記されている。つまり、1995年の作成時点で誤記されてしまった可能性が高く、その情報を基として第1次調査に取り組んでしまったものと考えられる。なお、1977年段階では浮羽究真館高等学校敷地は埋蔵文化財包蔵地外であり、また1995年の吉井町作成時段階での旧図で竹重遺跡とされている地点も埋蔵文化財包蔵地外となってしまっている。したがってこれまで報告してきたものも含め、本来的には竹重遺跡ではなく、別遺跡とすべきかと思われるが、今回の発掘調査・報告書作成までは混乱を避けるために竹重遺跡として扱うこととし、今後うきは市教育委員会と協議しながら誤解を生まないよう整理したい。

(1)住居跡

竪穴住居跡は第2次調査で6棟（1～6号）、第3次調査で1棟（7号）検出されている。弥生時代前期に属する円形住居と弥生時代後期に属する方形住居からなる。ただし住居跡の残存状況は概ね不良で、壁高が数cm程度に留まるものが多く、既に削平された住居が存在した可能性は残す。例えば、1号竪穴住居跡と6号竪穴住居跡のはば中間に位置する地点にて検出された円形に巡るピット群や円弧の落ち込みの一部は円形住居になる可能性を示すものであるが、遺物等から確証が得られず今回の報告からは除外している。そうした中で、1号竪穴住居跡がかなり深いものとして検出されたが、本来他の住居とは異なる深さを有していたものとみられ注目される。



第9図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)

1号堅穴住居跡（第9図、図版5）

第2次調査区の北東角で検出された。東辺が調査区外となるが、柱穴の位置から考えて東西7.0m、南北5.6mの規模をなすとみられる。主柱穴はほぼ東西に配される2穴と考えられ、床面での径は80cm、床面からの深さは80~90cmを測る。堆積状況をみると、最上層に黒褐色土の層があり、平面的には住居跡を斜めに横切るように走る溝状をなすものである。その下層は黒色土が厚く堆積し、検出面から50cm下げた時点で茶褐色の締まった面が検出され、貼床と判断された。この面で検出された遺構を第9図にて赤で示している。中央部にある窓みは炉の可能性があるが、焼土や炭化物のひろがりは検出されなかった。また貼床面にて住居跡壁に沿って溝が検出されたが、壁溝と考えられる。貼床面から8cm下げると黄褐色の地山が検出されたが、この面まで検出面から60cm強を測るものであり、非常に深いのが特徴である。

出土遺物（第10・11図、図版19、図版27）

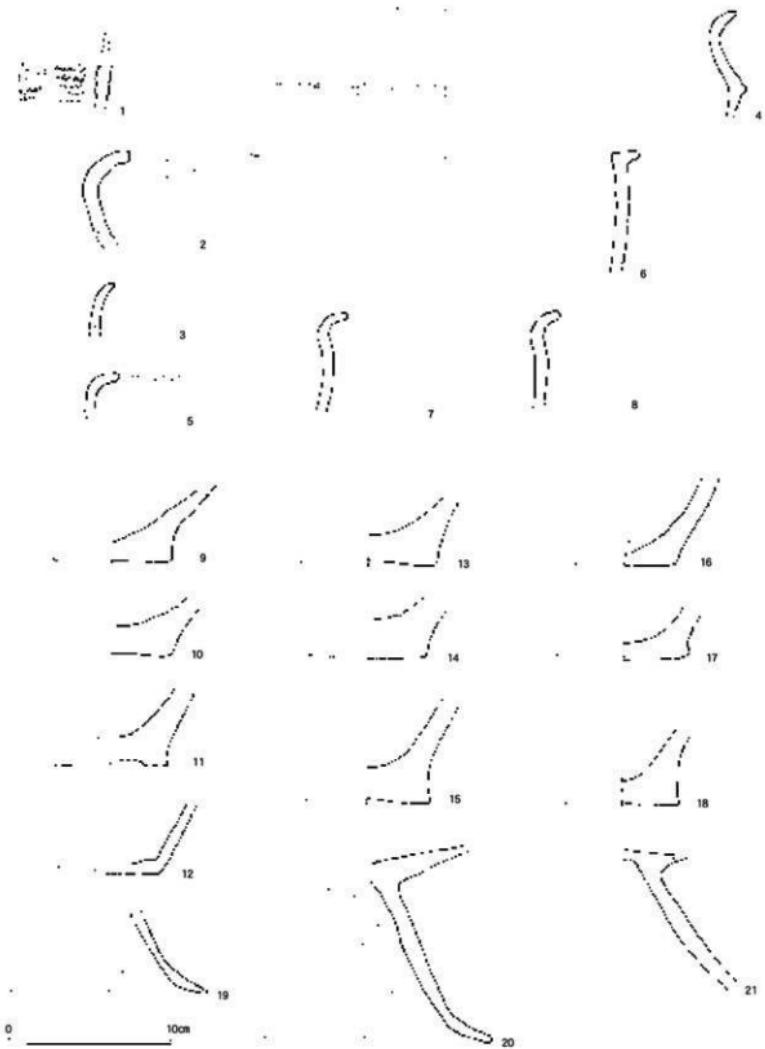
住居跡からは比較的多くの土器が出土しているものの、細片となるものが大半を占め、かつ元位置を保つような状況のものはない。また上述したように上層に時期の異なる堆積があることもあり、出土遺物には時期幅がある。住居の形態や下層で出土した遺物の時期から考えて弥生時代後期に属するものと考えたが、第10図に示した遺物はそれ以外の時期のもので、第11図に示したもののがこの住居に伴うものと考える。

1は縄文土器の口縁部小片。内外面及び上面に刺突文を櫛齒状に連続させる。内外面に同様な文様を施すため、どちらかが外面かは不明瞭。2・3は弥生時代前期の壺口縁部。小片のため径は出し得ないものの、2は大形、3は小形のものである。2は弧を描きながら強く外反させるもので、端部は若干窪ませる。3は短く外反させるもので、端部は丸い。いずれもミガキによる調整で、器面上に光沢が生じる。4・5は弥生時代前期の壺口縁部。4はく字形に屈曲する口縁部で、口縁端部及び屈曲部に小刻みなキザミを施す。焼成良好で硬く焼き締まり、横方向のミガキにより器面上に光沢が生じる。5も如意形に屈曲する口縁部の端部に細かくキザミを施す。内外面ともに横方向のミガキを施すが、色調が淡いこともあり光沢は強くない。6は直線的に立ち上がる口縁部で端部をL字形に短く屈曲させる壺。横ナデが弱く、口縁部下面は形状が安定しない。内面にもわずかに突出させる。口縁下4cmの外面に沈線を巡らせる。7・8は弧を描きながら強く屈曲させる口縁部を有するもの。小片のため傾きが求めににくいが、もう少し胴部が張り、後述する弥生時代後期の一群众に属するものかもしれない。

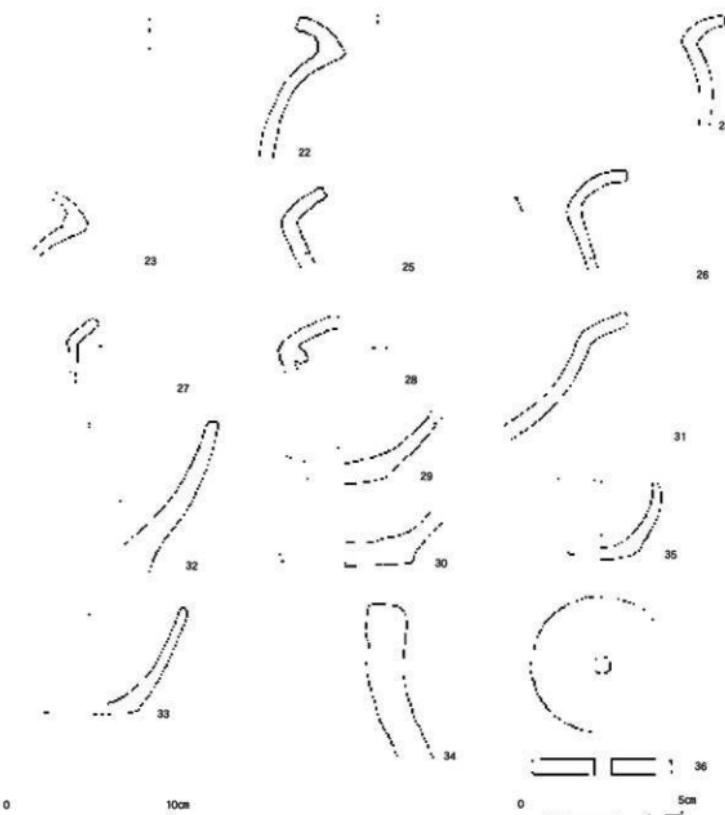
9~18は弥生時代前期から中期にかけての壺ないし壺の底部。底面は平底あるいはわずかに上げ底となるもの。外面調整は9・13が縦ハケのち縦方向ミガキ、10・15~17がナデ、11・12・18が縦ハケである。14にみられる工具痕は横方向の条痕であろうか。15の底面には一部にミガキ状の調整がみられる。

19~21は土師器高坏の脚部。端部はラッパ状に大きく開き、脚柱部内面を横方向に削ることにより内面には稜が生じる。脚部外面はタテ・ナナメハケメによる調整。脚部と坏部との接合は、穿孔した坏部に脚部を差し込み、脚部中央を充填する手法。充填部は欠落している。胎土は精良で焼成も良い。いずれも住居上層もしくは遺構面で出土しており、上層の埋没時期は当該期と判断される。

22・23は袋状口縁壺。大きく弧を描きながら外反する頸部に内湾する口縁部を付け、その境に

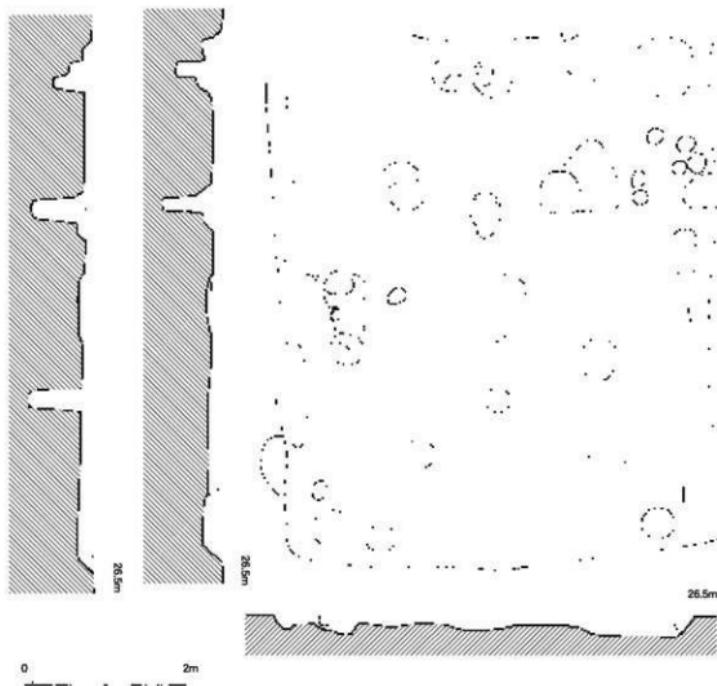


第10図 1号竪穴住跡出土遺物実測図① (1/3)



第11図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図② (1/3、36は2/3)

は丸みを有しつつも明瞭な稜線をつくりだす。24は丸みを有する胴部をもつ壺。口縁部は丸みをもちながら強く外反し、胴部との境の内面には明瞭な稜線をつくる。口縁端部はヨコナデにより沈線状に窪む。25-26はく字形に屈曲する口縁部を有する壺。諸特徴から同一個体の可能性がある。小片であり径は出し難いが、口径32cm程度の大形品である。胴部はやや張る形状で、外面には使用に伴うススが付着する。27も同様の形態を示す壺小片であり、口径は20cm程度。胴部は鉢に近い形態になるかもしれない。28はく字形の口縁部の屈曲部外面に高い突帯を巡らせるもの。突帯の貼り付け後はヨコナデ調整を行わず、指によるオサエを明瞭に連続させ、上下の接合痕を消さない。29・30は底部で、29は丸底に近く、30は稜は明瞭であるが底面は凸レンズ状を呈する。29はタタキによる調整であり、外面には粗い當て具痕を残す。31は内湾する体部にく字形に屈曲する



第12図 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)

口縁部が続くもの。口縁端部がわずかにせり上がるようヨコナデ調整する。体部内外面はナデによる調整であり、高坏となろうか。32・33は鉢。大小の違いはあるが、緩やかに内済する形状は共通する。33の底部は稜が明瞭で凸レンズ状の底面となる。34は支脚で口縁部は直立し下部に向かって広がる形状。器壁は厚く外面は粗いナデないし指オサエによる調整で、粗雑な印象を与える。35は手づくねの椀で、完形品。粗いナデないし指オサエにより整形し、底部は凸レンズ状。遺構面で出土しているため住居に伴うものとは確実にはいえない。36は緑色片岩製の紡錘車。径4.24cm、孔径5mmを測る。厚さは中心部5mm、周縁部4.1mmでほぼ平坦な形状。住居下層から出土した。

2号竪穴住居跡（第12図、図版5）

第2次調査区の西辺ほぼ中央に位置する。当初調査区がより狭く設定されていたが、表土除去の結果住居跡と思われる一辺が調査区際に検出されたため、調査区を拡張し全容把握に努めた。北西角及び南西角を別遺構および搅乱により切られるが、東西6.5m、南北5.4mの方形竪穴住居跡で、

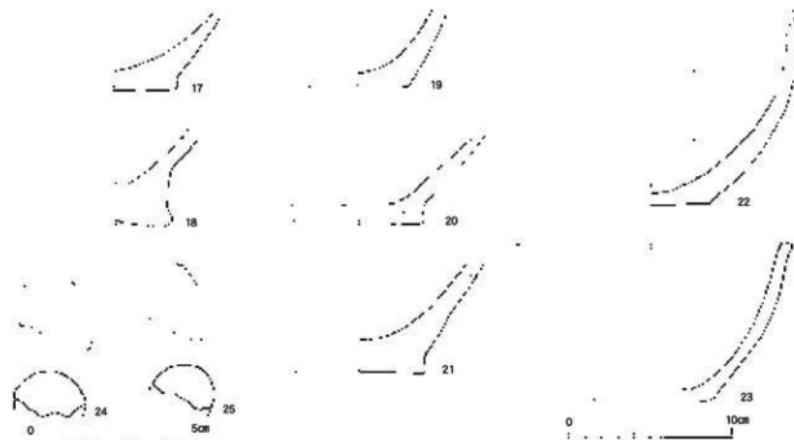


第13図 2号竪穴住居跡出土遺物実測図① (1/3)

主軸は北に向かって75°東に振る。主柱穴は2本で径は20cm程度で比較的細いが、深さは60cmを測る。検出面から10cmで貼床面に達するが、部分的にしか確認できず、その厚さは4cm程度を測る。住居のほぼ中央に70cm×90cmの円形ピットがあり、炉に伴うもの可能性があるが、焼土や炭化物はみられない。壁溝が東西辺にみられる。

出土遺物（第13・14図、図版19）

1・2はく字形口縁の甕で、比較的薄手のつくりや胎土・色調から同一個体の可能性が高いと思



第14図 2号竖穴住居跡出土遺物実測図② (1/3, 23・24は2/3)

われるが、径復元ではうまく合成できずに並べて提示した。口縁端部は角をつくりだすシャープなつくりである。胴部最大径には断面方形の突帯を巡らせる。3は外反する口縁端部片。端部は断面方形であるが、丸みを有する。厚手で大型の器種である。奈良時代の甕口縁部の印象を受けるが、当該期の資料はみられず、器種は不明といわざるをえない。4は袋状口縁壺の口縁端部小片。敢えて径復元すると口径23cm程度となる大形品。強く内湾し、端部は大きく窪ませるシャープなつくり。外面は化粧土により赤褐色を呈する。

5は大形壺の口縁部。大きく外反する口縁部の内面に断面三角形の突帯を貼り付け、口縁上面を強調する。6は薄手のつくりの如意形甕口縁の小片。7は直立に使い口縁部に貼り付けにより断面L字形の口縁端部をつくるもの。口縁下約2cmの位置に細くて高い突帯を巡らせる。口縁端部および突帯側面にキザミをいれる。8は緩やかに外反する口縁部で、端部を若干突帯状に肥厚させ、側面に小刻みにキザミをいれるもの。5～8は弥生時代前期の範疇かとみられる。9は内傾する体部に口縁上面が水平となるよう銳角に端部を張り出させるもの。10は大形の甕胴部片で断面長方形の突帯を巡らせる。いわゆる成人甕棺程度の大きさとなろう。11は大形の壺肩部。口縁部が欠損し、頸部に断面山形の緩やかな三角突帯を巡らせる。12も大形の甕胴部片で断面三角形の突帯を2条巡らせる。13は湾曲する胴部形態から、壺の最大径部かとみられ、断面山形の突帯を巡らせる。14・15は胴部に巡らせる突帯をもつもので、突帯側面にキザミを施す。14はキザミの粗さから弥生時代後期以降の可能性があるが、15は弥生時代前期のものに類する。16は深い沈線で文様を描く繩文土器。17～21は壺ないし甕の底部。17の内面は幅広いミガキ状の調整。18は厚みのある底面である。20の外調整はイタナデのちナデ。21は摩滅のため調整は不明である。22は丸みを有する甕胴部。胴部最大径よりやや下位に製作の単位があり、それを境として外調整の工具が異なり、上位はハケメが細かく、下位は粗い。内面はイタナデもしくはケズリ調整である。底部はほぼ平底。23は鉢で緩やかに内湾する形状。底部の残存は良くないが、平底であろう。外面はイタナデ調

整が主であり、口縁部周辺にイタナデ調整前のタテハケ調整がみられる。内面はナデ調整。24・25は紡錘形の投弾。焼成はやや悪く、残りも悪い。

3号竪穴住居跡（第15図、図版6）

第2次調査区の北西角に位置する。円形住居で全体の約1/4が検出されていると思われる。東に隣接する4号竪穴住居跡を切るものとして検出したが、後述するように切り合いを誤認した可能性を残す。住居の残存は悪く、検出面からの深さは10cm程度である。ただし、現況G Lからを踏まえた土層図をみれば、検出面はやや上層であり、いくらか表土除去の際に下げすぎたかもしれない。地山面直上に厚さ4cmの締まった黄色を帯びる黒色土があり、貼床と判断できる。壁の円弧に沿って柱穴が配置されており、床面からの深さは45cm程度を測る。壁に近い柱穴の深さは25cm程度。柱痕を検出できたものもあり、その径は15cmを測る。調査区の北西角が丁度住居の中央に該当するとみられ、長梢円形のピットとその両端に柱穴があり、松菊里型住居の形態を示す。ただし炉とみられる位置に炭化物等のひろがりはみられなかった。炉とみられるピットや円弧から算出し、径9.4mの円形住居に復元できる。

出土遺物（第16図、図版19）

当住居に伴う遺物として取り上げることができた資料はごく少なく、4号竪穴住居跡との切り合を確認する作業の中で出土したものが多い。したがって、第16図に示した土器は4号竪穴住居出土遺物と厳密に分けることが困難なものが大半である。ただし、概ね弥生時代前期に属するものと弥生時代後期に属するものの二者があり、4号竪穴住居跡が後期の方形住居と考えるならば、前期に位置付けられる資料は3号竪穴住居に帰属する可能性が高いものといえよう。

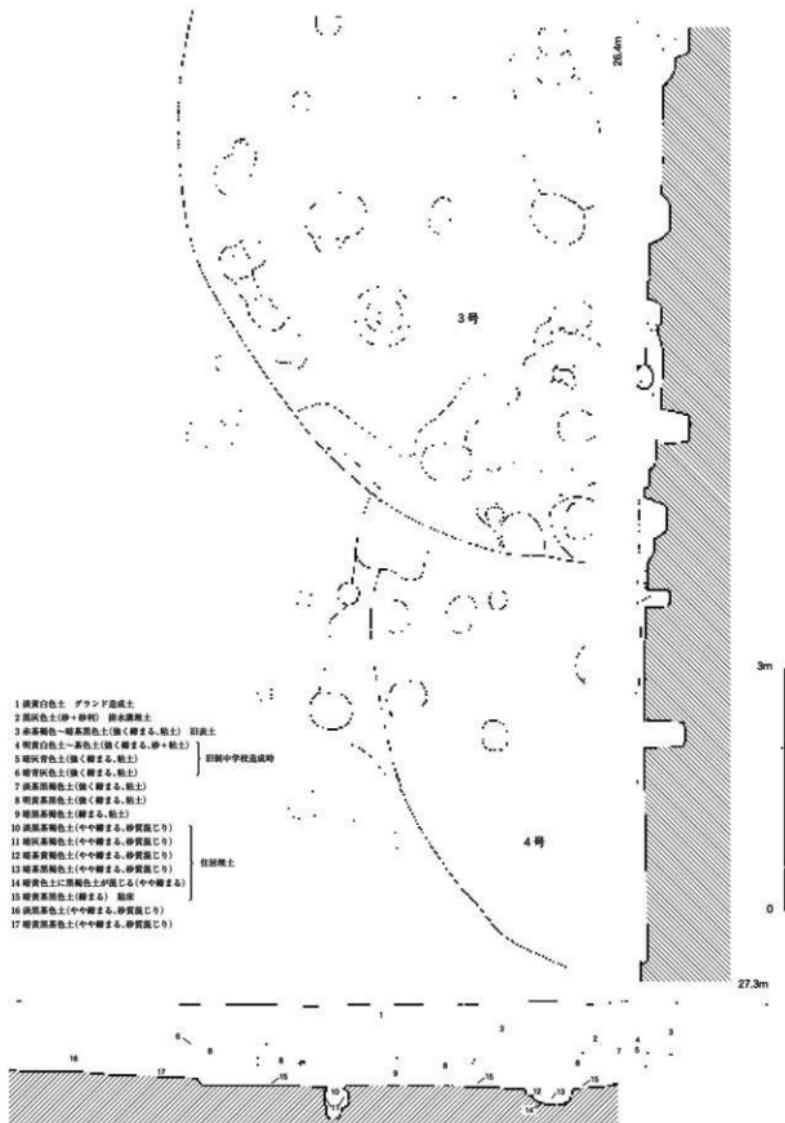
4はわずかに内湾する脛部に低い断面三角形の突帯をもつもの。弥生時代前期ないし中期の口縁下の突帯であろうか。外面にはススが厚く付着する。5は平底の底部小片。6は裾がやや台形状に広がる底部。底面は中央がわずかに上底になる形状。底面にはイタナデの調整痕が残る。7は厚底の底部。外面調整は縦方向に幅の広いミガキによる。底面は何らかの凹凸のある台上で整形したためか、クレーター状の凹凸が全面にみられ、ナデ調整はなされていない。

4号竪穴住居跡（第15図、図版6）

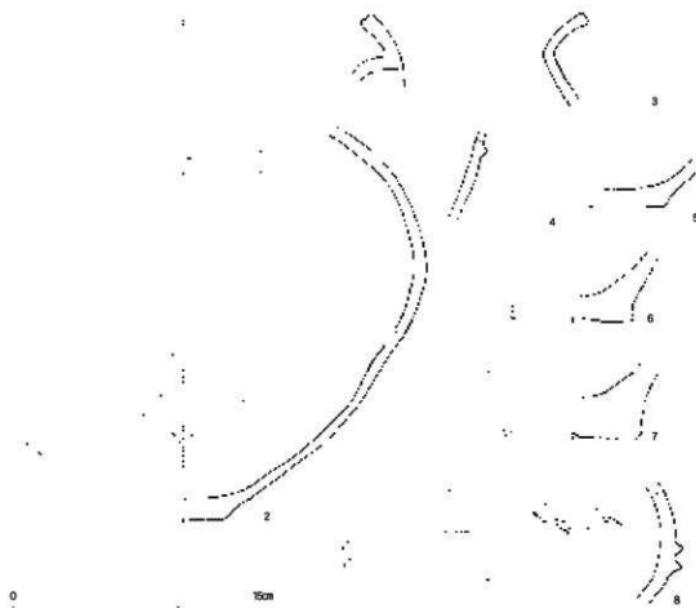
3号竪穴住居跡の東側に位置するもので、3号竪穴住居跡に切られる円形住居跡と考えて調査をすすめた。埋土が3号・4号の間で極めて類する黒色土であったことからも、判断は困難であった。出土遺物の検討結果から考えて、4号竪穴住居跡は3号竪穴住居跡を切るもので、平面プランは円形ではなく、東辺にみられる歪な形状から方形の可能性が高いと思われる。床面までの深さは8cm程度と浅い。また主柱穴は判然としないが、全体の1/3程度の検出であるため、調査区外に存在するものと考えられる。3号竪穴住居跡と同程度の規模の住居と考えたが、方形住居とするならば、一辺5.5m程度の規模となろう。

出土遺物（第16図、図版19）

3号竪穴住居跡で記したとおり、資料の混在が想定されるため、弥生時代後期以降の資料について4号竪穴住居跡に属する可能性が高いものとして説明を行う。1は袋状口縁壺の口縁部小片。端部は窪みをもち、シャープに仕上げられる。口縁部と口縁部の境の稜は非常に明瞭。2は口縁部を



第15図 3・4号竪穴住居跡実測図 (1/60)



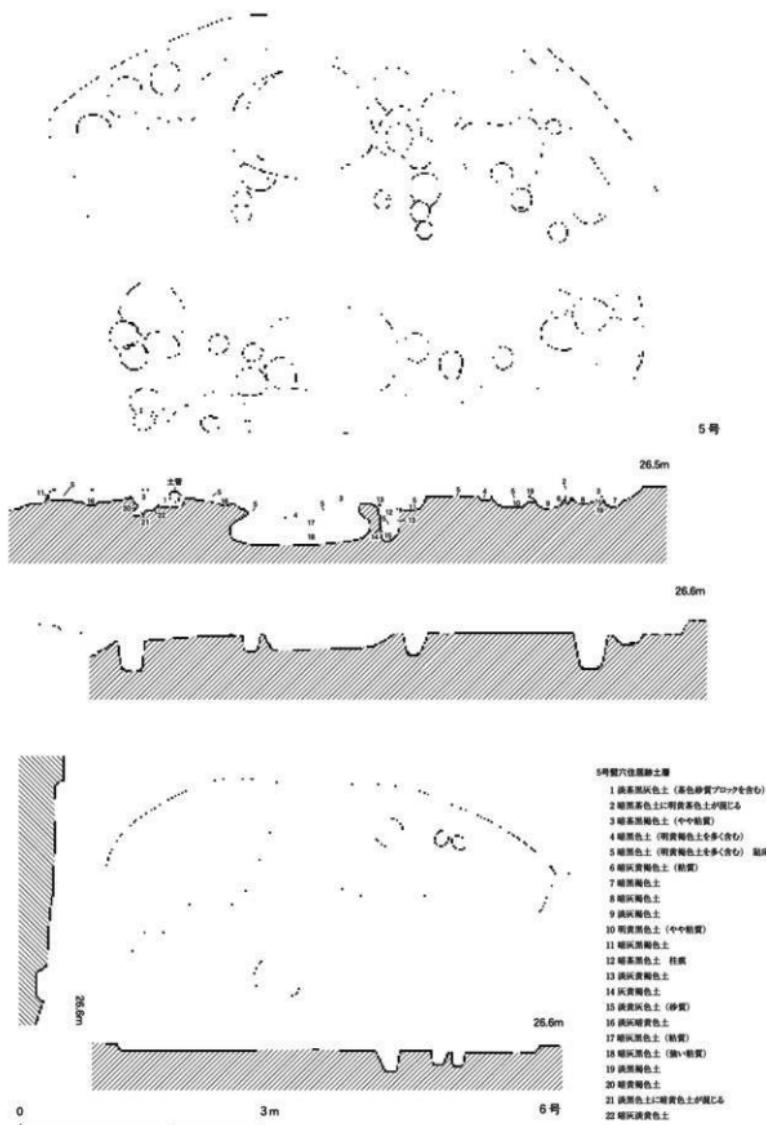
第16図 3・4号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

欠損するが、胴部以下の残存は良好。ちょうど3号竪穴住居跡と4号竪穴住居跡が切り合う場所にて、遺構検出面よりやや上面から確認できた資料。球形に近い胴部に径5cm程度の小振りな底部が伴う。底部はハソ状に突出し、底部角は緩やかな稜線を描く。内外面ともにナナメ方向のハケメで調整し、内面には隨所に接合痕を残す。

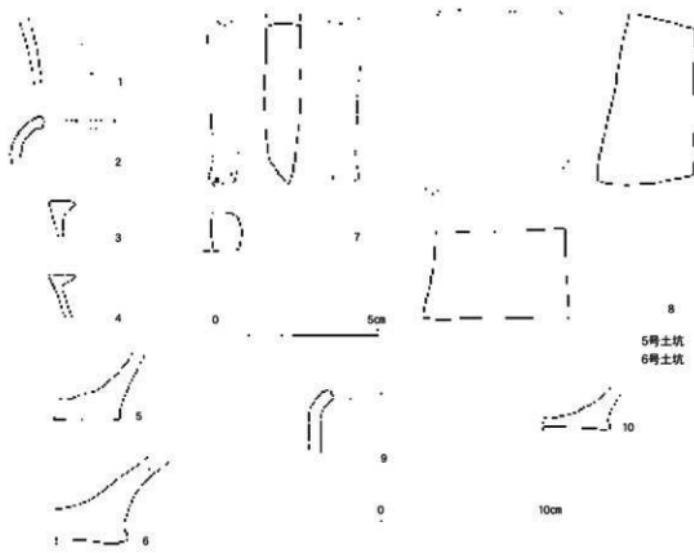
3号はく字形口縁の壺口縁部小片。端部は側面を若干窪ませるようにして四角く収める。小片であるが敢えて口径を求めるとき23cm程度となる。8号は胴部最大径よりやや下位に2条の突帯を巡らせる壺。焼成は良好。突帯貼り付け後のヨコナデの上からさらに細かいハケメで調整され、丁寧なつくりの印象を受ける。

5号竪穴住居跡 (第17図、図版6)

第2次調査区の南中央、前方後方墳である竹重1号墳の後方部南西角に重複する。円形住居であり、東から北西部にかけて断片的に円弧が確認できるが、近代の戦争関連遺跡の基礎に切られる部分が多く、それ以外については周溝の掘削により残存しない。住居内北側に7号貯蔵穴が存在するが、土層の観察により住居跡が貯蔵穴を切る関係にある。検出面から貼床面まで10cmを測り、貼床の厚さは5cmを測る。壁に沿って配置されるピットが柱穴になるとみられ、深さは40cm程度のものが多くを占める。住居の中央とみられる位置に瓢箪形の土坑があり、炉に伴うものかとみられるが、炭化物等の散布はみられない。またその両端にあるピットが柱穴となる可能性があるが、いずれも



第17図 5・6号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第18図 5・6号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3, 7・8は2/3)

小規模である。炉跡とみられる土坑の位置等から検討して、径9m程度の円形住居に復元できる。

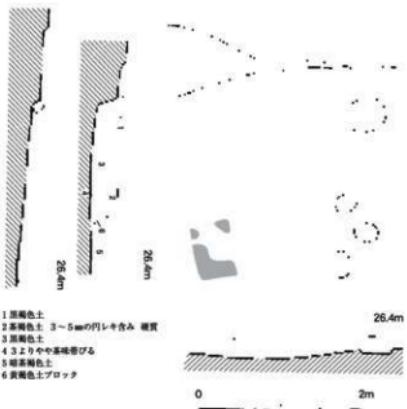
出土遺物 (第18図、図版9、図版27、28)

土器はいずれも小片で、良好な資料とは言い難い。1は壺肩部の文様帶。円弧による文様が連続すると見られる。2は緩やかに外反する甕口縁部。端部を若干肥厚させ、側面に縦長の刻みを施す。全体にススが付着。3は短くL字形に口縁部をつくりだすもの。口縁部の断面形は三角形に近い。4も断面三角形の口縁部をつくりだすもので、胴部は張る形状となろう。器壁は薄く、堅敏に焼成される。5は平底の底部。外面はナデによる調整であるが、一部にミガキが観察される。6は厚手のつくりの底部。やや開き気味に立ち上がった後に張る胴部へ続く形態。縱方向に幅広い単位のミガキ調整をいい、光沢が生じる。内面は粗いナデ調整である。

7は扁平片刃石斧。欠損しているがノミ形石斧となるであろう。全面に丁寧な研磨を施す。白色頁岩製。8は頁岩製の砥石。上面及び下面は研磨による面取りを行い、他は砥面とする。大きさから手持ち砥、石質から仕上げ砥と考えられる。

6号竪穴住居跡 (第17図)

第2次調査区の南東角で検出したもの。大半を1号墳周溝に切られるため、円形住居の円弧の一部を残すのみであり、検出したピットもごく小規模であった。円弧の形状もやや歪であり、径復元も困難な残存状況であった。



第19図 7号竖穴住居跡実測図 (1/60)

円形竖穴住居ではないかと考えられる。深さは30cmを測り、地山面上に厚さ5cm程度のやや茶味を帯びる面があり、貼床と判断した。また検出内の南東角の床面に灰白色粘土の広がりが存在し、周辺には炭化物が散在する。

出土遺物 (第20図)

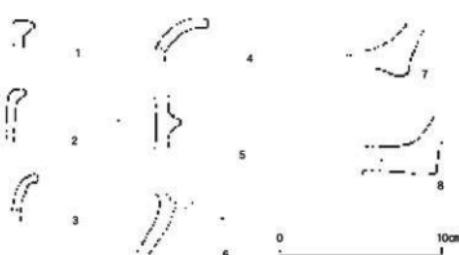
いずれも弥生土器甕と思われる。1~4は口縁部。1は突出度の低い断面三角形の口縁部をつくる。2・3は如意形口縁で、ごく小さく屈曲させる。4は弧を描き大きく屈曲させるもの。径は出し得ないが、1~3に比べ大形の器形となろう。5は口縁部下の突堤か。色調等から4と同一個体の可能性がある。6は胴部屈曲部に施されるキザミ。キザミ部は突堤状を呈するが、ごく低い。7・8は底部。7は上げ底で、床に接する部分は未調整で凹凸が多い。8は平底。胴部との接合面が明瞭に観察される。ごく小片からなり、摩滅も著しい資料が多いが、弥生時代前半と判断される。

(2)貯蔵穴

貯蔵穴は第2次調査で8基 (1~8号)、第3次調査区で3基 (9~12号) 検出されている。平面プランが円形を呈するものと方形を呈するものの二者があるが、前者が多くを占める。いずれも弥生時代前期に属するものと判断される。4号~6号貯蔵穴が隣接して存在するほかは散在的である。

1号貯蔵穴 (第21図、図版7)

第2次調査区の北東部に位置するもので、南側上面を搅乱により



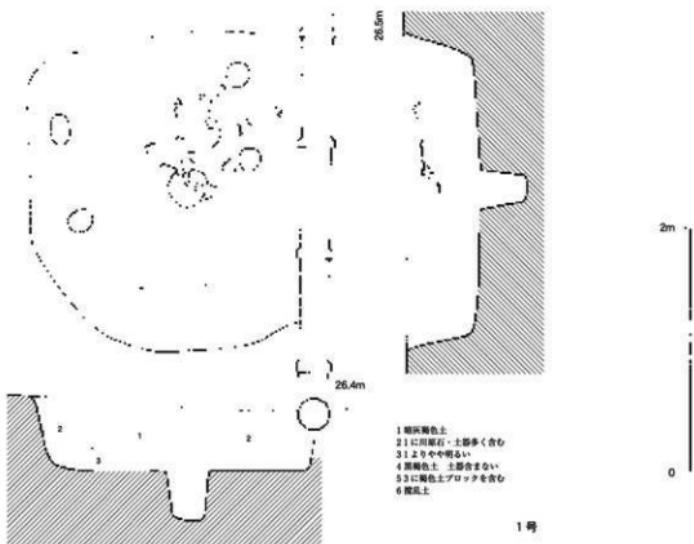
第20図 7号竖穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第18図9・10)

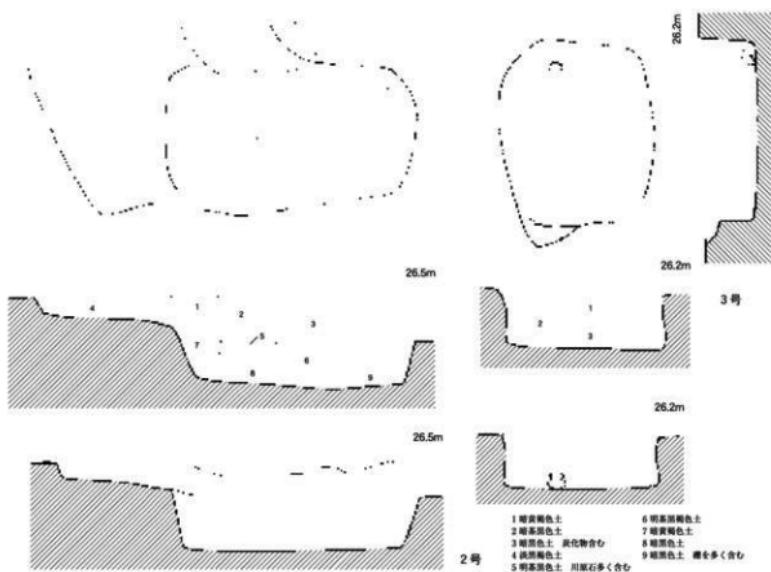
9は如意形の口縁部小片で、端部に継長のキザミを施す。胴部は直立する形態であろう。10はやや上底となる底部。底面にはケズリかとみられる調整がみられる。内面は指圧痕が著しい。

7号竖穴住居跡 (第19図)

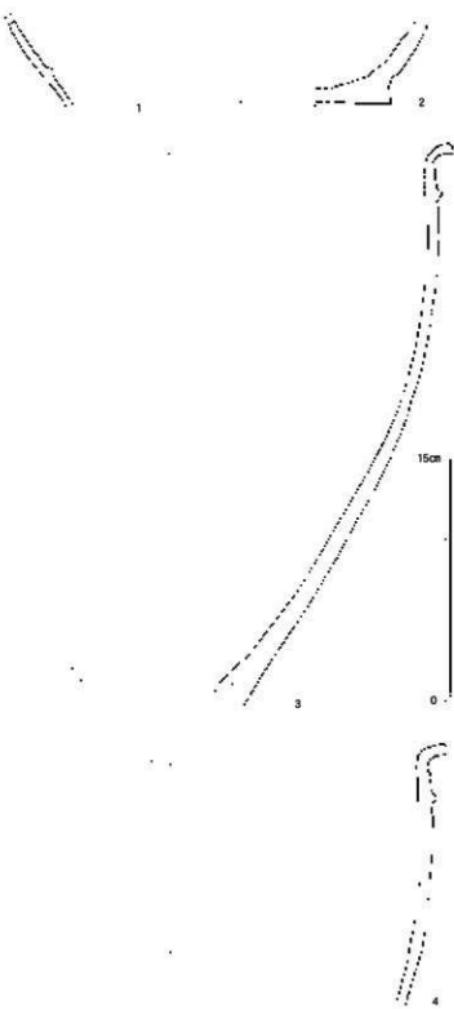
第3次調査区の27B区で検出したもの。隣接する区においては、搅乱を受けていることもあり、続기가検出されなかった。平面プランは一辺が検出されているのみであるため判然としないが、緩い円弧を描くものであり、また出土遺物から弥生時代前半かとみられることから



1号



第21図 1～3号貯蔵穴実測図 (1/40)



第22図 1号貯蔵穴出土遺物実測図 (1/3)

は接合せず、同様の壺が複数個体存在するものと判断した。ほぼ直立に近い口縁部であり、端部は如意形に強く屈曲させる。口縁下約2.5cmの位置に断面三角形の突帯を巡らせる。外面調整はナナメハケにより、内部は全面ナデ調整。

失う。径2.6mを測る円形プランを呈し、壁は直立に近い。検出面から床面まで約60cmを測る。床面は平坦で、ほぼ中央に深さ40cmの比較的深いピットを伴う。検出面付近を中心に上層の埋土には壺片が比較的多く出土したが、下層からはほとんど遺物は出土しない。出土遺物から弥生時代前期とみられる。

出土遺物(第22図、図版19)

1は直線的に内傾する壺肩部。低い断面三角形の突帯をもつが、頸部と胴部を画する部分に巡らされるものであろう。2は壺底部。厚手の安定感のあるもので、丸みを有する胴部が続くものと考えられる。やや摩滅気味であるが、全体ナデ調整とみられる。3・4は壺。類似する特徴を有し、同一個体の可能性を残すが、部品が揃う割に



第23図 2・3号貯藏穴出土遺物実測図① (1/3)



第24図 2号貯蔵穴出土遺物実測図② (1/2)

のミガキ調整を施す。3は小形の壺。口縁部は上面が平坦な断面三角形の突帯を貼り付けることによりつくりだし、側面には継長のキザミを巡らせる。口縁部に若干の歪みはあるが、やや端部をせり上がらせる形態となる。外面調整は器壁が剥離するために観察できない部分が多いが、継方向のイタナデがみられる。内面はナナメ方向のナデ・イタナデで、口縁部付近は指圧痕が連続する。4～6は口縁端部にキザミを有する壺口縁部で、いずれも小片。4は断面三角形の突帯を貼り付けて口縁とし、5・6は短く外反させる。5は使用に伴うとみられる摩滅が著しく、6の外面にはススが厚く付着する。7～13は底部。外面調整はナデもしくはミガキ調整が多く、ミガキ調整前のタテハケが観察できるものもある。12はタテハケ調整で、厚手の上底の底部から考えて他よりも若干新しい様相を示すものとみられる。9はやや幅の広いミガキを丁寧に施し、光沢が生じる。底部裾が広がり端部は丸みをもつ。底面にもケズリ調整が確認できる。この底面の調整は10にもみられる。

17は乳棒状の石斧で、全面に研磨を施す。特に上面から右面には研磨による面取りを施している。頁岩質砂岩製。

3号貯蔵穴 (第21図、図版8)

2号貯蔵穴の南東約4m離れた地点に位置する。方形プランを呈し、南北1.3m、東西1.5mを測る。1号墳の周溝の底面にあたる位置で検出されたものであり、上部は周溝により大きく削平されるとみられるが、検出面から床面まで45cmを測る。壁はほぼ直立し、一部にオーバーハングする面がある。底面にて壺底部が出土した以外は、遺物の出土量はごくわずかである。

出土遺物 (第23図)

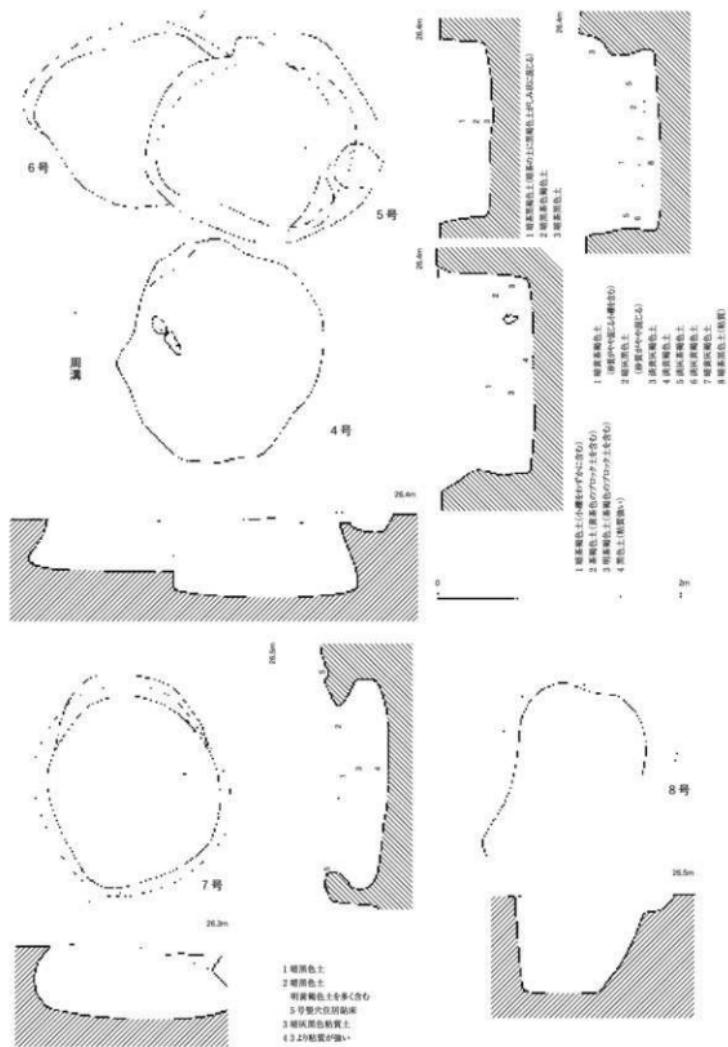
14は縄文土器口縁部小片で、轟B式の隆帶部。15は底面近くで出土した壺。胴部は丸く張った形状となろう。内外面ともにやや幅の広いミガキを丁寧にいれる。16は底部小片で、外面はナデもし

2号貯蔵穴 (第21図、図版7)

第2次調査区の北中央に位置するもので、上層からは遺構が切り込む。南北2.1m、東西1.1mの長方形を呈する。壁は直立に近く、検出面からの深さは70cmを測る。床面は平坦。

出土遺物 (第23・24図、図版20・28)

1は深い斜線文を刻む小片。壺肩部としては施文が深く、縄文土器の可能性も残す。2は大形の壺で、胴部最大径51cmを測る。淡褐色の胎土で、化粧土を施すことにより赤褐色を呈する。頸部と胴部との境に比較的明瞭な段をつくり、1条の沈線を巡らせる。ただし内面に関しては外面ほどの明瞭な違いを観察できない。外面全体に横方向



第25図 4～8号貯蔵穴実測図 (1/40)

くはミガキ調整。底面にもミガキが施される。

4号貯蔵穴（第25図、図版8）

第2次調査区の北西部に位置する。円形の平面プランをなすもので、検出面での径は1.7mを測る。フラスコ状にオーバーハンプする形態で、検出面から床面まで80cmを測る。

出土遺物（第26図）

1・2は如意形口縁の端部にキザミをもつ壺。1は屈曲度が強くL字形に近い。薄いつくりで堅敏に焼成される。内外面ともイタナデ調整。2は焼成が甘い。3は底径10.4cmを測る大形の壺底部。外面は横方向のミガキにより、内面はナデである。なお、奇岩が1点出土しており、これについてIII-1-(8)で詳しく述べる。

5号貯蔵穴（第25図、図版8）

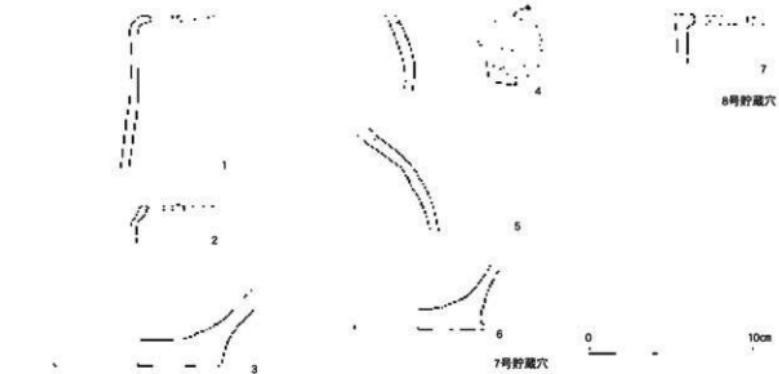
4号貯蔵穴の西に隣接して位置し、南側で6号貯蔵穴を切る。円形の平面プランをなすもので、検出面での径は1.6mを測る。壁面はフラスコ状にオーバーハンプする。深さは60cm。実測に耐えうる遺物は出土しなかった。

6号貯蔵穴（第25図、図版8）

5号貯蔵穴により北側を切られる位置にある。円形の平面プランをなし、検出面での径は1.6mを測る。フラスコ状に壁面はオーバーハンプする。深さは40cm。実測に耐えうる遺物は出土しなかった。

7号貯蔵穴（第25図、図版8）

5号竪穴住居内に位置するもので、住居に切られる関係にある。平面プランは円形で径は1.6m。断面はフラスコ状にオーバーハンプする形状である。検出面から床面までの深さは60cmを測る。



第26図 4・7・8号貯蔵穴出土遺物実測図(1/3)

出土遺物（第26図、図版28）

4は壺の肩部で3本沈線からなる円弧文を描く。内外面とも横方向を中心とするミガキ調整で、明褐色で光沢が生じる。5もまた壺肩部であるが、文様は描かれない。破片上端にわずかに屈曲部が観察されるが、頸部との境の稜線とみられる。外面は横方向のミガキ調整で、暗褐色で光沢が生じる。内面はナデ調整である。6はわずかに上底となる壺底部で、外面はイタナデ、内面はナデによる調整である。

8号貯蔵穴（第25図）

第2次調査区の南西部にあり、北側が近代の戦跡基礎により破壊を受ける。やや歪な形状であるが、規模と壁面の立ち上がりの形状から貯蔵穴として扱った。復元径で1.1mを測り、深さは検出面から計測して75cmを測る。

出土遺物（第26図）

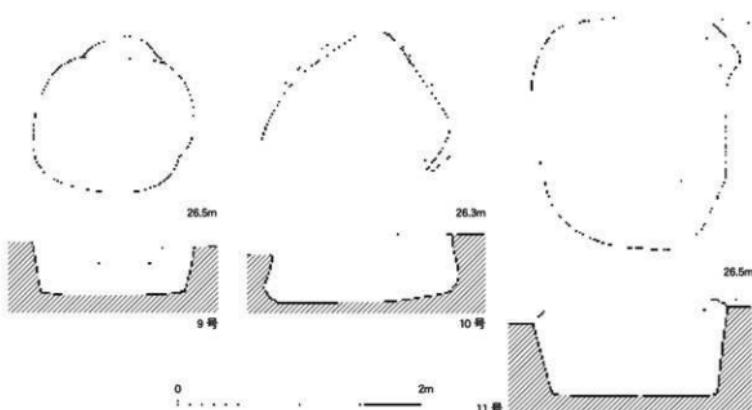
7は直立する体部に断面蒲鉾形の突帯を貼り付けて口縁部をつくる壺小片。突带上には縦長のキザミを巡らせる。口縁部上面には突帶整形時かとみられる指圧痕が連続する。

9号貯蔵穴（第27図、図版9）

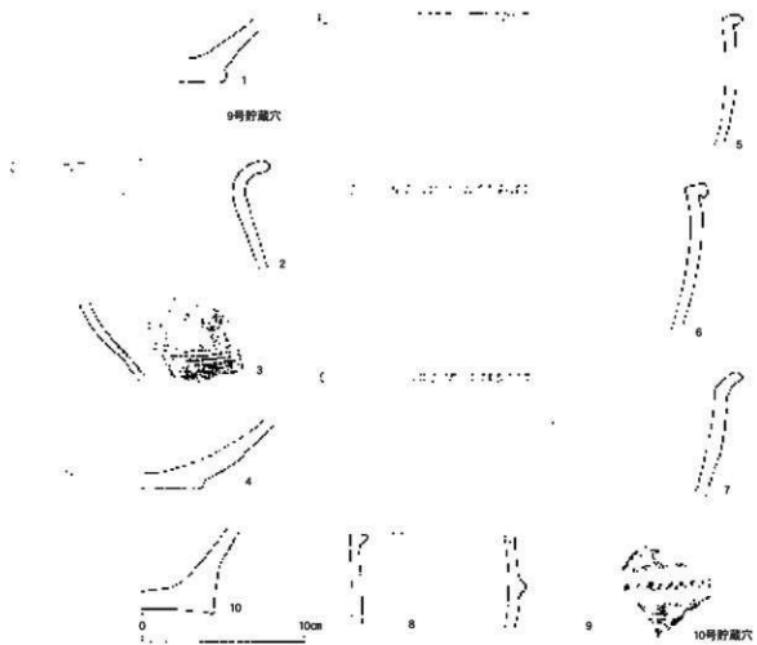
第3次調査区27B区にて検出されたもの。円形プランを呈するもので、径1.3m、深さ45cmを測る。壁の傾斜は直立に近い。北側に小テラスをもつ。

出土遺物（第28図）

1は弥生時代前期の壺底部で、円盤状の底部に球形の胴部が続くものとみられる。外面は底面も含めミガキによる調整、内面は粗いナデである。



第27図 9～11号貯蔵穴実測図 (1/40)



第28図 9・10号貯蔵穴出土遺物実測図 (1/3)

10号貯蔵穴 (第27図)

第3次調査区27D区にて検出されたもの。校舎基礎により南東角を破壊される。径1.4mの円形を呈するが、隅丸方形に近いようにも思える。検出面からの深さは55cmを測り、壁面はフラスコ状にオーバーハンプする。

出土遺物 (第28図、図版28)

遺憾ながら10号貯蔵穴と11号貯蔵穴の遺物ラベルに混乱が生じてしまい、第28図に示した遺物は両者が混在していると思われる。2～4は弥生時代前期の壺。2は弧を描きながら強く外反する口縁部。内外面ともに横方向のミガキによる調整で、光沢が生じる。3は壺の肩部小片。内外面ともに横方向のミガキによる調整。頸部と胴部との境に4条の沈線を巡らせ、その下位に貝殻により円弧文を描く。4は底部。低い円盤状の底部に、球形の胴部が続く。

5～10は弥生時代前期の壺。外面調整はいずれもハケメが観察されず、イタナデもしくはナデであることが特徴的。5は口縁端部を短く直角に屈曲させ、端部に深いキザミを施すもの。6は5と同様の形態を示すものの、端部は屈曲ではなく貼り付けによることが接合痕の状況から判断できる。キザミは5よりはやや浅く、櫛歯状の圧痕がキザミ内に観察される。7は如意形口縁のもので、端部にキザミを施す。8は短く逆し字形に口縁部をつくるもので、おそらく貼り付けによるものであろう。端部には浅いキザミを施す。9は胴部に巡らせる突帯部でナナメ方向にキザミをいれる。

内面は横方向のケズリ状に調整される。10は底部で底面にミガキが観察される。

11号貯蔵穴（第27図、図版9）

第3次調査区23区にて検出されたもの。周辺には弥生時代前期および終末期の浅い遺構が連続し、また校舎の搅乱によって検出面の形状が不安定であるが、1.9m×1.6mの円形土坑と判断される。深さは70cmを測る。出土遺物は上記の通り第28図に含まれるが、時期幅は少ないとみられ、両貯蔵穴とともに近い時期と判断される。

(3)土坑

貯蔵穴以外で、ある程度の規模をもつ遺構を土坑として扱ったが、具体的な機能は不明と言わざるを得ない。2次調査区において7基（1～7号）、第3次調査においては6基（8～13号）をなお、調査時に2次調査区でS-3・S-4として扱った土坑は1号墳の周溝埋土の一部、S-5・S-6は風倒木痕、S-17は近代の搅乱と判断されたため報告を行わない。

1号土坑（第29図、図版10）

1号墳くびれ部付近の墳丘下に位置するもので、平面プランは1.6m×0.9mの隅丸方形。長軸を北に対して60度東へ振る。中央南壁寄りに径60cmのピットを伴い、その深さは検出面から25cmを測る。検出面はほぼ中央にて壺が出土した。

出土遺物（第31図、図版20）

1は壺となろうがやや異形。丸みを有する胴部下半をもち、胴部最大径のやや上位に丸みを帯びた三角形を断面形状とする突帶を巡らせる。突帶より上位は直線的にわずかに内傾して立ち上がる。底部はわずかな上底。調整は外面全体をミガキによるが、突帶より下位は横ないし斜め方向、突帶より上位はそれらに加え縱方向も観察される。内面に関しては突帶にあたる高さより上位は横方向のミガキであり、それより下位はナデである。また、底面もミガキによる調整である。

2はスクレーパーと考えられる。下縁に両面から調整を施し、刃部を形成する。安山岩製。上側にも一部剥離が施される。側面に原石面を残す。

2号土坑（第29図、図版10）

1号墳くびれ部周溝の肩に位置するもので、平面プランは2.0m×1.0mの方形。長軸を北に対して40度西に振る。床面は平坦で、検出面からの深さは10cmと浅い。

出土遺物（第31図3）

3は平底の甕底部であり、内外面ともにナデによる器面調整である。弥生時代前期の範疇で捉えられよう。

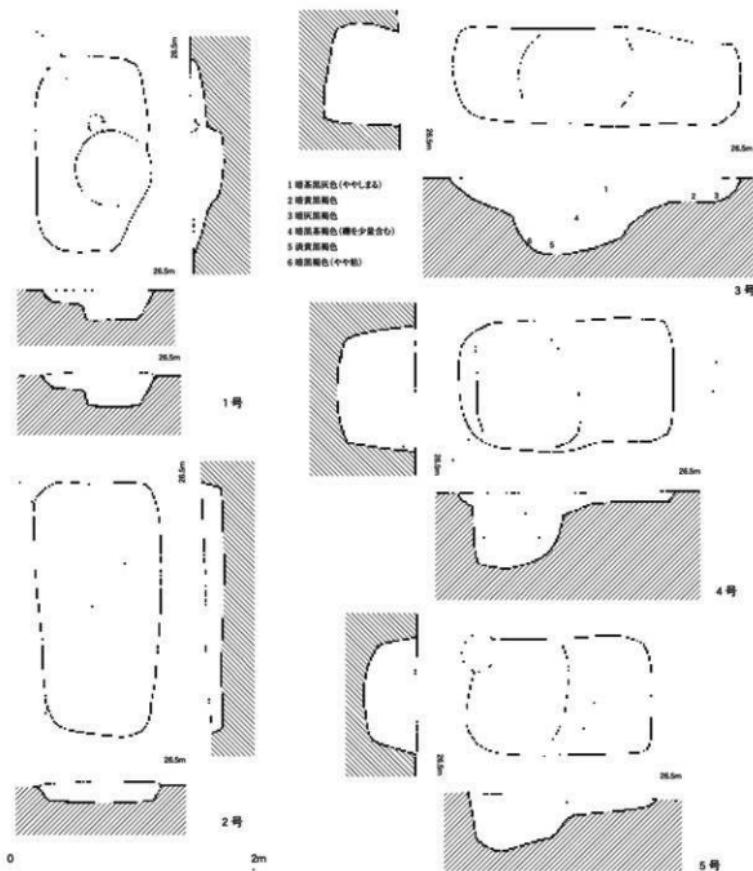
3号土坑（第29図、図版10）

4～6号貯蔵穴の西に位置するもので、平面プランは2.4m×0.8mの方形を呈する。中央に短軸と径を同じくする円形土坑を伴い、北側の側壁はオーバーハングすることから貯蔵穴の可能性がある。長軸をほぼ東西に向け、その断面観察から西側から埋められたと判断される。

出土遺物（第31図、図版27）

10は壺の口類部で、大きく円弧を描きながら外反する。口縁端部は四角く收め、側面は強く窪ませる。内面にはヨコハケによる調整が観察されるが、外面は摩滅のため不鮮明。11は如意形口縁をもつ壺小片。直立に近い形態で、口縁下約2.5cmの位置に断面三角形の突帯を巡らせる。12も如意形口縁をもつもので、やや丸みを帯びた口縁端部の下辺にキザミを連続させる。13は比較的厚底の壺底部。平底である。外面は縱方向のハケメ、内面はナデである。

14は棒状石製品。断面は隅丸方形を呈する。全面に研磨を施し、右面に擦痕がみられる。花崗岩製。



第29図 1~5号土坑実測図 (1/40)

4号土坑（第29図、図版11）

調査区北側中央に位置するもの。平面プランは $1.8m \times 1.1m$ の方形を呈し、西側は検出面からの深さが10cmの平坦な床面となり、東側は検出面からの深さ60cmと深くなる。

出土遺物（第31図）

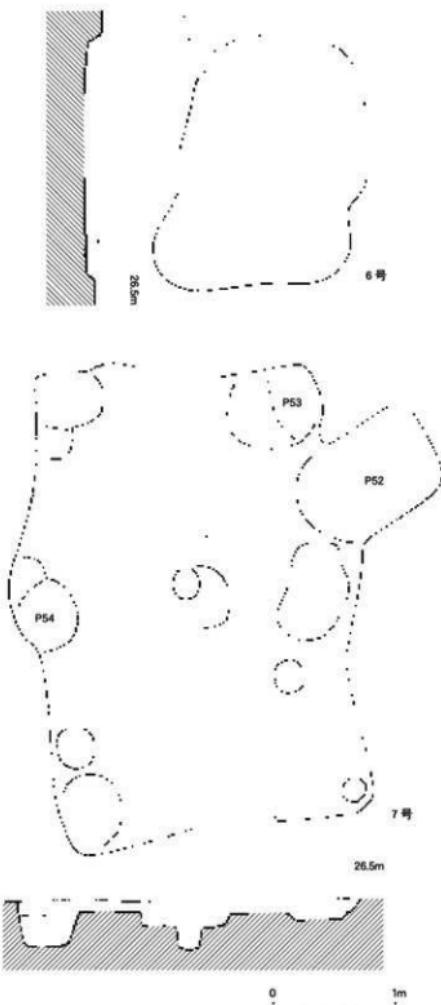
4は壺口縁部小片。口縁部は強く折り曲げて突帯状につくりだし、縦長のキザミを連続させる。突帯整形はヨコナデによらないためか凹凸が著しい。5・6は壺ないし壺の底部。外面はイタナデ調整がみられ、内面はナデによるとみられるが風化が著しい。5の底面の一部にはミガキが、6の底面にはケズリがみられる。7は器台脚部。外面ハケメ調整の方向から考えて底部として固化したが、口縁部である可能性も捨てきれない。厚手のつくりで端部は強く外反させる。8は支脚の底部。中実の形態となろうか。底面は上底となり、床に接する面にはスサ状の圧痕が多く残る。外面は粗く指圧痕を残す。

5号土坑（第29図、図版11）

4号土坑の南に位置するもので、平面プランは $1.5m \times 1.0m$ の方形を呈し、西側は検出面からの深さが15cm、東側は深くなり、検出面から45cmを測る。4号土坑とは1.5mの距離を置くが、軸はややずれるものの形態は類似し、関連する遺構である可能性がある。

出土遺物（第31図）

9は球形の胴部に円弧を描きながら外反する口縁部が続く壺。胴部は内外面ともにハケメ調整。口縁端部は丸く収める。シンプルな器形ゆえに時期を絞り込みにくいが、古墳時代中期の土師器壺であろうか。



第30図 6・7号土坑実測図 (1/40)

1号土坑



2号土坑

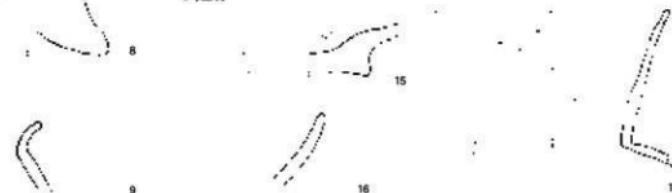


3号土坑

6号土坑

4号土坑

5号土坑



第31図 1～6号土坑出土遺物実測図 (1/3, 2・14は2/3)

6号土坑（第30図）

2号貯蔵穴の北西に位置するもので、平面プランはややいびつな方形。長軸は2.0m、短軸は最大で1.6mを測る。底面は平坦であり、深さは10数cmと浅い。

出土遺物（第31図、図版20）

15は壺底部。丸みを有する胴部に円盤状の底部がつく形態。内面は指圧痕が顕著である。

内外面および底面にミガキ調整を施し、光沢が生じている。16は鉢口縁部小片。内面はナナメハケにより、外面は磨滅により器面の観察ができない。17は土師器直口壺。直線的に延びる口縁部は端部でゆるやかに外反する。胴部は球形となろう。胎土が精良で、つくりも薄く丁寧な印象を受ける。口縁部外面は細かいミガキ調整、内面は暗文を縱方向に密にいれる。内面は粘土紐接合痕を残すナデ。

7号土坑（第30図）

6号土坑の南西に位置するもので、平面プランは長軸3.8m、短軸2.5mの方形を呈する。底面は平坦で検出面からの深さは10cmと浅い。土坑内には複数のピットが検出されたが、四隅及び長軸の各中央にあるため、竪穴住居跡とそれに伴う柱穴の可能性も捨てきれないが、ピットはいずれも床面からの深さは10cm前後でごく浅い。時期の判断できる遺物は出土しなかった。

8号土坑（第32図、図版11）

第3次調査区5A区北東部の校舎基礎に切られる形で検出され、層位的には古墳時代包含層の下層であるが、出土遺物は包含層と同時期である。谷に向かう落ちからはかなり下がった位置にある。遺構の東半分を校舎に破壊されており、北側から西側にかけて緩やかなテラスを一段設ける。規模は、長軸1.25m以上、短軸1.14m、深さ0.23mを測る。時期は、古墳時代前期前半である。

出土遺物（第34図）

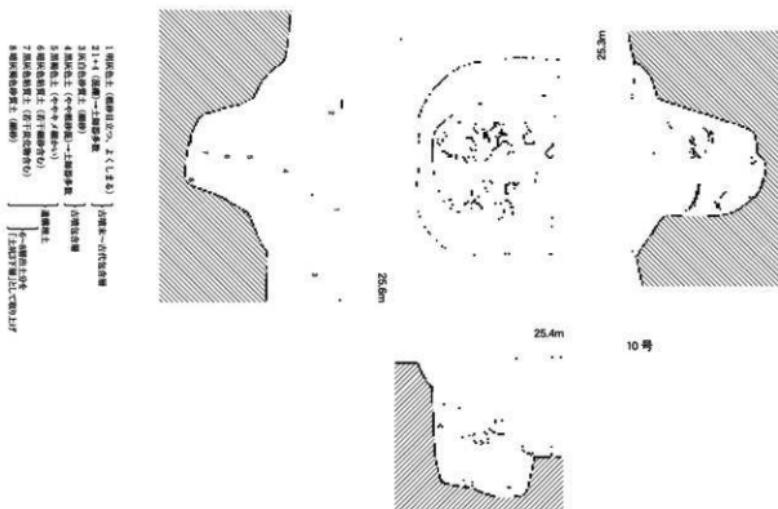
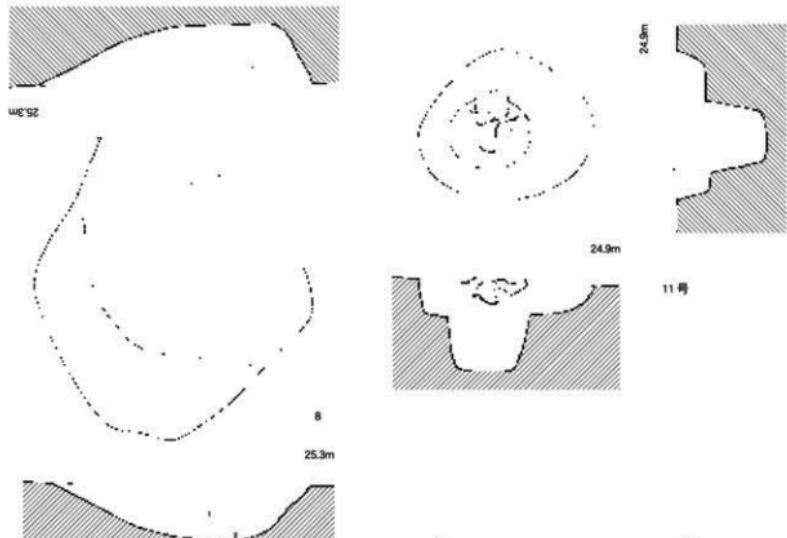
1は椀形高杯の脚部片。低平に大きく広がる脚部が特徴的で、円孔を四方に穿つ。脚部は内外ともハケ調整後に縱方向にミガキを施し、杯部にも細かなミガキが認められる。外面には部分的に媒がみられる。2は有段器台の脚裾部片で、端部に黒斑を有する。円孔を穿つが数は不明である。内外とも磨滅するが、ハケ調整を行っている。

9号土坑（第33図、図版12）

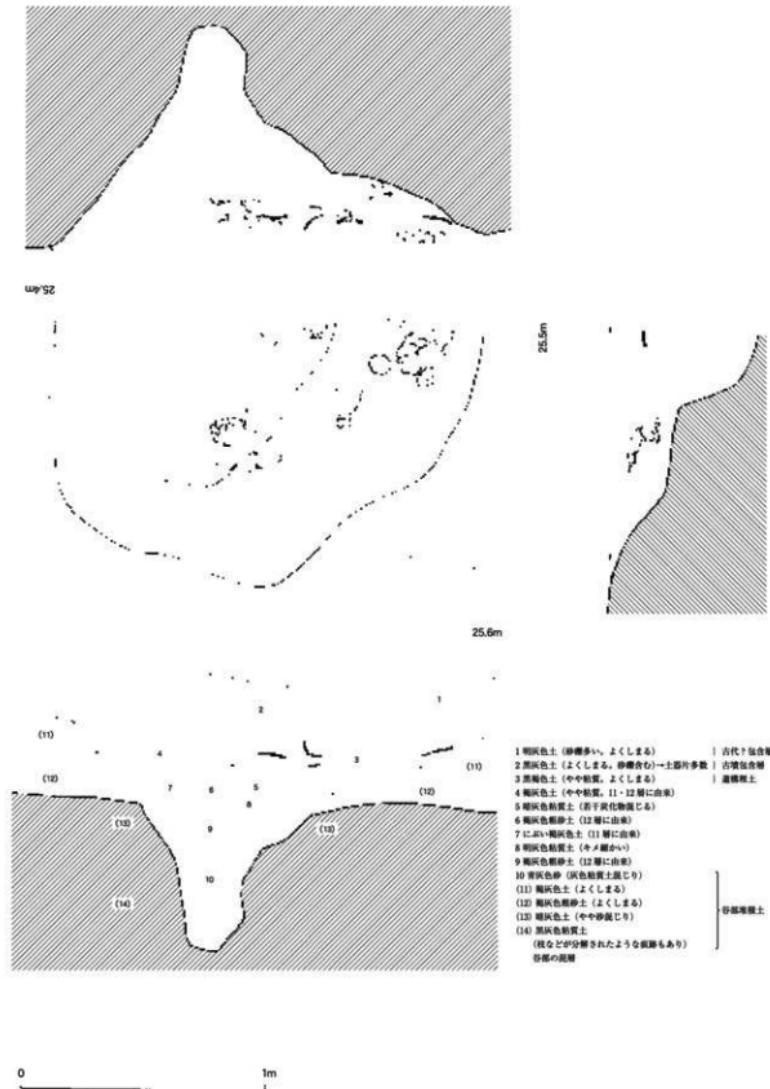
遺構の一部が第3次調査区4A区と5A区の境にある校舎基礎下に及ぶため全貌は知り得ないが、不整円形を呈する。柱穴の可能性も考えられたが、周辺に対応する遺構がなく、土層の堆積状況も柱の存在を積極的に示す状況ではないことから、土坑とした。古墳時代前期の包含層を掘り下げた面で検出され、土層観察からも下層遺構と判断できるが、遺物を見る限り同時期である。最大長は1.76mを測り、幅も遺存部分の状況から概ね同程度の規模と推定される。中心部からやや南寄りが柱穴状に深くなり、遺構面から最深部までの深さは約91cmである。遺構の上半部から土器片が多く出土し、中央の柱穴状の部分からの出土点数はわずかである。

出土遺物（第34図、図版20）

3は短頸壺。あまり広がらず直線的にのびる口縁部に、わずかに縱長梢円の体部が続く。



第32図 8・10・11号土坑実測図 (1/20)



第33図 9号土坑実測図 (1/20)

口縁部の外外面及び体部外面はハケ調整、体部内面は工具によるナデ調整で仕上げる。4は壺。口縁端部を内側につまむ特徴を有し、口縁部は強いヨコナデにより屈曲気味である。外面はタテハケで調整し、内面は頸部からやや下がった位置までヘラケズリする。5はおおよそ完形の小型器台で、坏口縁部は素口縁である。坏部は外面をナデ、内面をヘラケズリ後にヨコハケで調整し、脚部は外面を継方向のミガキ、内面をヨコハケで仕上げる。

6～8は高坏。6は脚部片で、坏部との接合部付近で欠損する。外面はタテハケ、内面は据部をヨコハケで調整する以外はヘラケズリを行う。7は概ね完形で、坏部は少し曖昧な段をもち、口縁部が緩やかに外反する。脚部は据部が強く屈曲する。内外とも磨滅が激しく、坏部は外面にタテハケの痕跡を残すものの、内面は調整不明である。脚部は外面にタテハケらしき痕跡があり、内面は工具による調整を行う。8は脚基部片で基部上面は坏部との接合面で剥離している。内外とも工具による調整痕を残す。

10号土坑（第32図、図版12）

第3次調査区4A区の南西部、谷部への落ちからやや下がった位置にある。古墳時代前期の包含層の下層で確認したが、出土土器からは包含層と同じ時期と判断される。半ば校舎基礎下に及び、南北0.8m、東西0.55m以上、深さ0.58mを測る。3段のテラスを設けて、遺構の中心部分が最も深くなる。遺構の上半部で比較的まとまって土器片が出土した。

出土遺物（第34図）

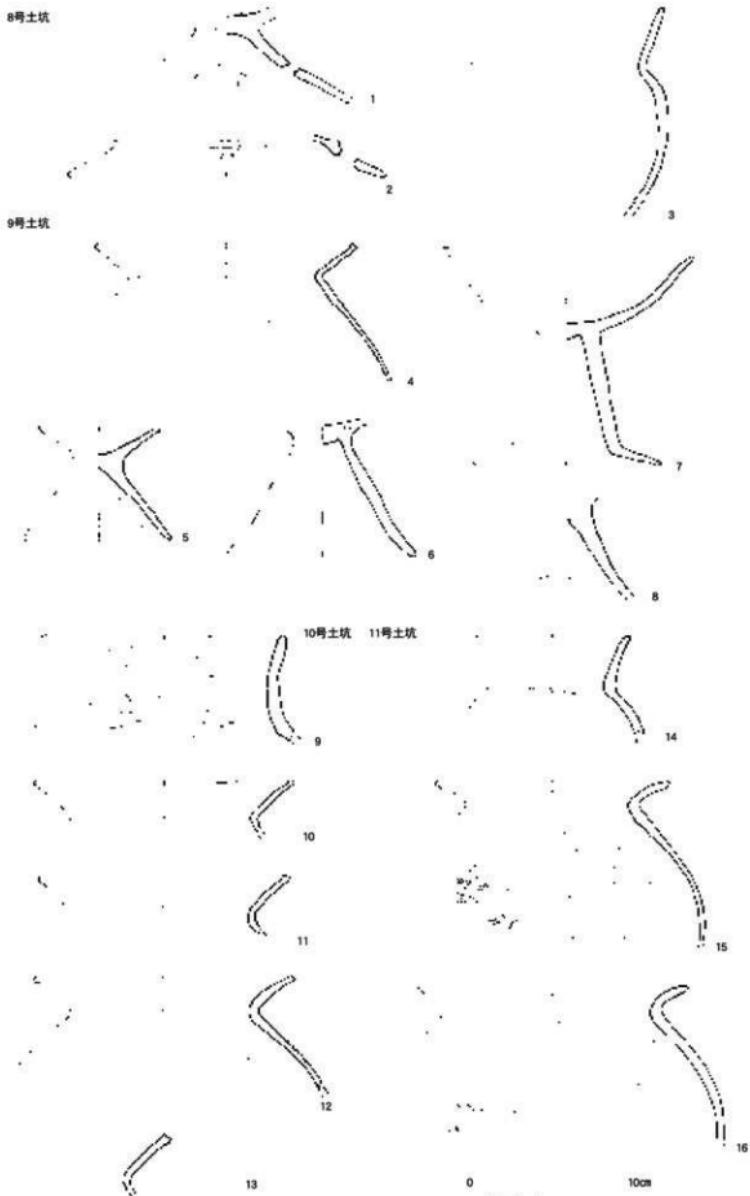
9は広口壺の口縁部片である。全体にやや厚手で、口縁部は頸部から直立気味に外反し、端部は丸くおさめる。内外とも横方向のミガキを施し、体部内面は頸部までヘラケズリを行う。10～13は布留系壺の口縁部である。10は頸部で「く」の字に折れ、端部を内側につまみあげる。内外とも磨滅するが、口縁部内面はヨコハケを行う。11は体部内面のヘラケズリを頸部から少し下がった位置までしか行わないためか、頸部が短く立ち上がる形態をなす。口縁端部は内側につまむ。外面はタテハケ、内面は体部にヘラケズリを行う。外面の一部に煤がみられる。12は少し外反気味にのびる口縁部で、端部形態も10・11とは異なる。とくに外面は磨滅するが、肩部付近には櫛状工具による横方向の条線と波状文が施される。13は口縁部の小片で、形態的には11に近い様相を示す。

11号土坑（第32図、図版13）

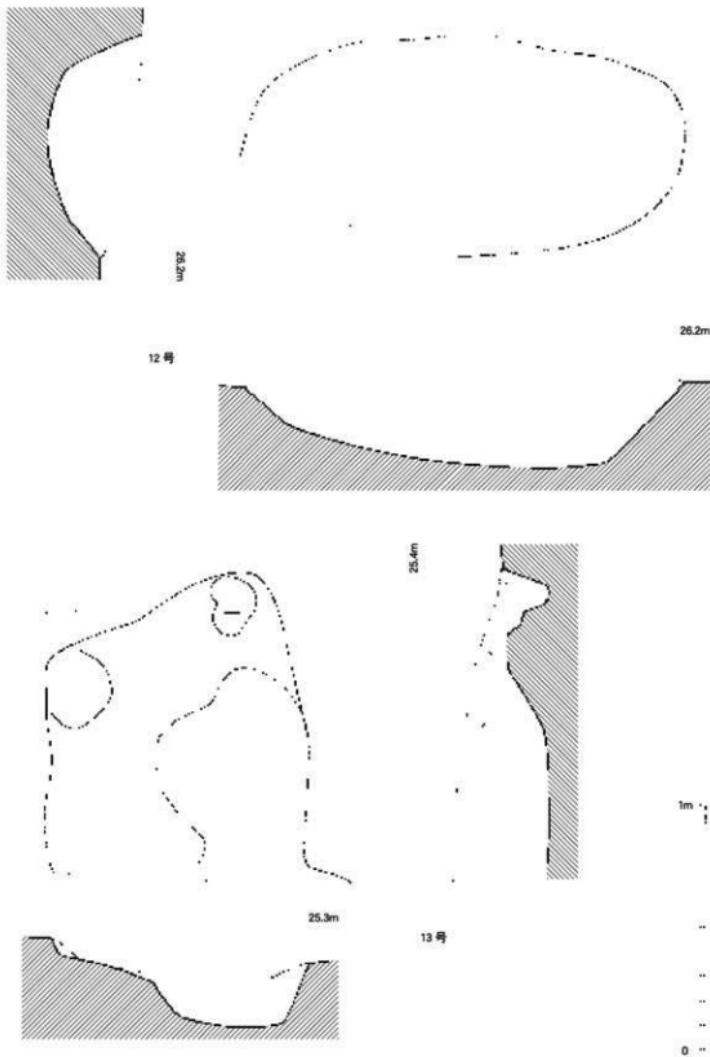
第3次調査区5A区の北西部に位置し、8号土坑の西側にある。谷の落ち際からはかなり下がった位置にある。層位的には古墳時代前期の包含層を掘り下げた段階で検出しているが、遺物は包含層と同じ時期である。二段掘りの楕円形土坑で、上部は長軸0.72m、短軸0.6m、下部は長軸0.34m、短軸0.29mを測る。土師器の壺片が中央部の上層から出土している。

出土遺物（第34図）

14は小型丸底壺片で、体部下半を欠損する。内外ともハケ調整し、頸部内面には工具痕が残る。肩部外面に若干煤が付着する。15・16は壺。15は短く外反する口縁をなす。外面はタテハケ後に頸部にヨコハケを粗く施し、内面は頸部付近までヘラケズリを行う。肩部外面に煤が付着する。16も15と同様の形態的特徴を有し、外面はタテハケ後に肩部に粗くヨコハケを行い、内面は頸部付近までヘラケズリする。外面の一部に煤がみられる。



第34図 8~11号土坑出土遺物実測図 (1/3)



第35図 12・13号土坑実測図 (1/20)

12号土坑（第35図）

18A区の南側にあり、校舎基礎設置時に一部破壊を受けているが、遺構そのものの残りは良い。東西1.81m、南北0.9m、深さ40cmを測る長楕円形の土坑である。土器と石器がわずかに出土しただけであるが、弥生時代前期に属する遺構であろう。

出土遺物（第36図、図版28）

1・2はともに壺片。1は壺の口縁部片で、わずかに外側に折れる口縁部から内側にすぼまる形態の胴部が続く。内外とも調整は鮮明でなく、ナデで仕上げている。

2はやや上底になる底部片で、内面に煤が付着する。底部付近はナデで調整し、外面はタテハケを行い、内面はナデ調整である。

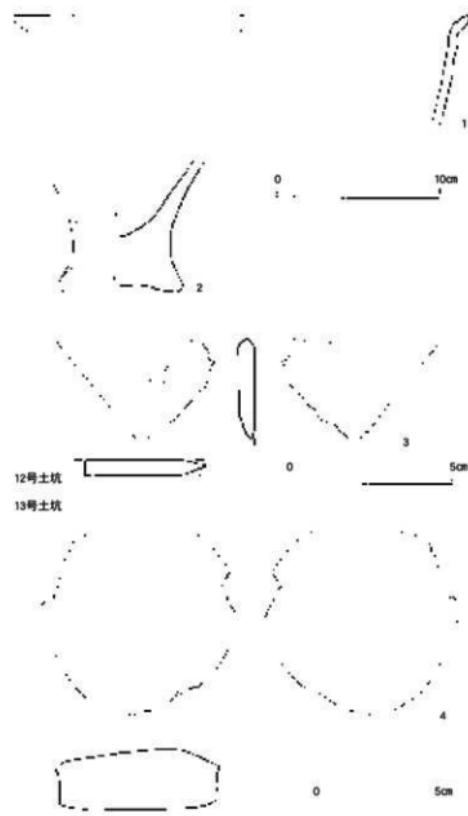
3は泥岩製の石包丁片で、表裏とも丁寧な研磨を施す。孔等は破損しており、残っていない。

13号土坑（第35図）

6 A区の西側、谷の落ち際で検出された。1/4程度が校舎基礎により切られる。平面形は不整形な隅丸長方形を呈し、西側に寄って一段深く掘り下げられている。残存する部分の長軸1.26m、短軸1.16m、深さ40cmを測る。明確な時期を示す遺物に乏しいが、縄文時代の包含層下で検出された遺構であり、後述する石錘から考えても縄文時代に所属するとみてよいだろう。

出土遺物（第36図、図版28）

4は石錘。扁平な凝灰岩を使用し、両側に打ち欠きにより切り込みを入れる。使用痕はさほど見られず、左側の打ち欠きに失敗したため廃棄された可能性もある。



第36図 12・13号土坑出土遺物実測図
(1・2は1/3、3は2/3、4は1/2)

(4)溝

溝は第3次調査で6条（1～6号）、第4次調査区で5条（7～11号）が検出されている。概ね南から北に流れるもので、方向や規模、形状、出土遺物から同一の遺構になるものもあると思われる。ただし、6号溝以外は方向・埋土等に大きく差異がなく、また西側に密集してやや蛇行していることから同一の確定が難しい。このため各遺構を次数ごとに番号を付して報告し、文中で同一の可能性を記す。

1号溝（第37図、図版13・14）

第3次調査区7A・7B区を南西から北東に向けて抜ける溝で、他の溝よりも幅と深さがある。土層観察では2段階ないし3段階程度の埋没過程が復元できるが、埋土の大半は砂層で、あまり時期差がなく埋没した可能性が考えられる。幅は約1.6～1.7mで、深さは30～50cmである。7A区の北端と7B区で2号溝との切り合いがあり、先後関係は「1号溝→2号溝」である。出土遺物は1袋ほど出土しているが、小片が多くほとんど図化に耐えない。土器自体は弥生時代前期と後期の二者があり、下層に近い位置で第38図2の複合口縁壺が出土していることから、遺構の所属時期は弥生時代後期ということになろうか。

出土遺物（第38図、図版28）

土器はいずれも内外面がかなりローリングを受けている。

1・2は壺口縁部。1は強く外反する口縁部で、頸部に小さな突帯をめぐらせる。外面には僅かにタテハケがみられ、内外ともヨコナデで仕上げる。2は複合口縁壺で、体部を失う。口縁部は大きく外反した後に内側へ「く」の字に折れ、端部は方形におさめる。磨滅が激しいものの、外面はタテハケ後粗いヨコハケ、内面はナデによる調整をみることができる。

3～6は壺口縁部片。3は緩やかに外反する口縁部で、内面はナデ、外面はタテハケによる調整である。外面の一部に煤がみられる。4はやや水平気味に外方へおれる口縁部で、端部が少し肥厚する。内外とも磨滅により調整は不明瞭である。5は断面三角形に近い形状の口縁部である。内外ともヨコナデによる調整で、内面に指圧痕がみられる。6はやや外方へのびる口縁部で、上面は水平に復元できる。内外とも磨滅が激しいが、指圧痕が残る。

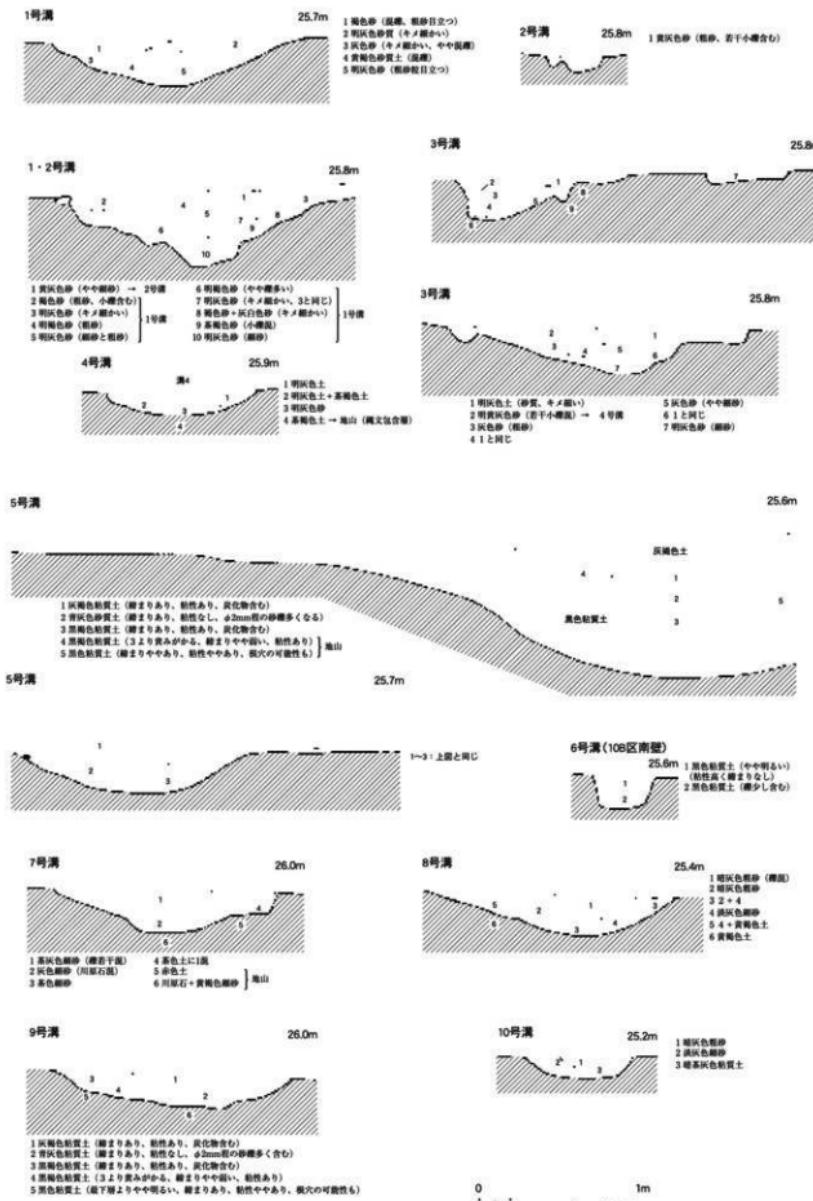
7は花崗岩製の凹石で、完形品。平面形は楕円形を呈し、上面中央部に摺り痕や叩きの痕跡がみられる。

2号溝（第37図、図版13・14）

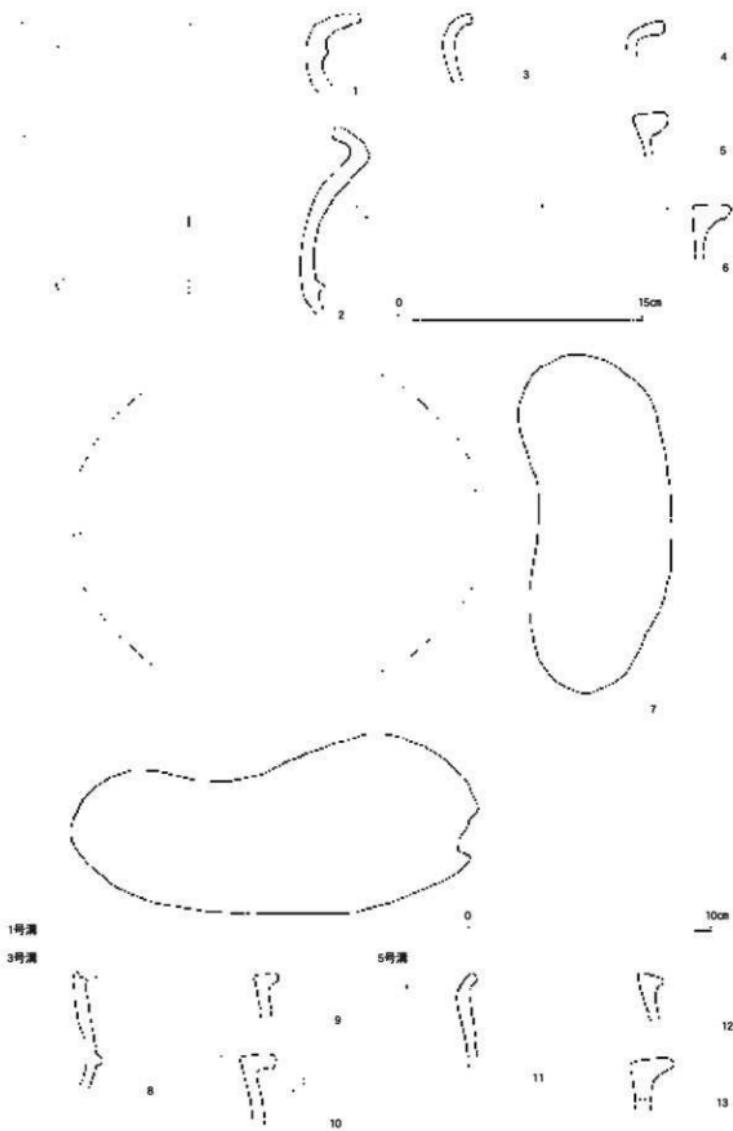
第3次調査区7A区で1号溝と隣接し、平行して掘り込まれているが、深さ9cmと非常に浅く、7A区の中程で一度途切れて、北端部で再び確認できる。幅は0.35mである。先述のように1号溝との切り合いから、「1号溝→2号溝」の順に形成されている。埋土は砂が主体である。遺物は土器の細片が数点出土したが、図化に耐えないため掲載していない。

3号溝（第37図）

第3次調査区8A区南東端から9B区に向けて、南西から北東方向に抜ける溝である。9B区で溝4と切り合い、新古関係は「3号溝→4号溝」となる。なお、土層観察からは大きく2段階ない



第37図 1～11号溝土壟断面実測図 (1/30)



第38図 1・3・5号溝出土遺物実測図 (1/3、7は1/2)

し3段階の埋没過程が復元できるが、類似する砂層の連続であり、時期差はあまりないと考えられる。幅は約2~3m、深さ約30cm弱で、確認された溝のなかでは1号溝と方位が一致し、関連する可能性がある。遺物が少量出土しているが、ほとんど図化に耐えない。出土土器からは弥生時代前期の年代が導けるが、1号溝の状況を考えると少し躊躇する。

出土遺物（第38図）

いずれも壺小片である。8は刻目突帯をもつ壺片で、口縁端部を欠損する。内外とも横方向のナデで調整し、内外に煤が付着する。9は小さく外方に折れる口縁部で、外面はタテハケ、内面はナデによる調整である。外面の一部に黒斑を有する。10は水平に折れる口縁部で、外面はタテハケ、内面はナデ、口縁部上面はヨコナデ後ヨコハケにより調整する。

4号溝（第37図、図版14）

第3次調査区9A区と9B区をやや東に振りながら横断する溝である。3号溝と概ね平行するが、むしろ浅く途切れているものの2号溝の方が流れる方向が一致している。先述のように3号溝との切り合いがあり、3号溝の方が先行する。幅は約0.5~0.9m、深さは7~16cmで、狭く浅いという特徴も2号溝に類似し、何らかの相関がある可能性も捨てきれない。

遺物は土器細片が出土したが、図化に耐えないため省略した。弥生時代の壺片などがみられる。

5号溝（第37図、図版15）

第3次調査区5A区・6A区・6B区にかけて検出された溝で、概ね南西から北東に向けて抜けていくが、南西部にあたる5A区では西に折れる。他の溝が直線的であるのに対して、一部角度を変える点に関しては、ちょうど調査区の西側にある谷へと下がっていく落ち際に掘り込まれていることから、落ち際の形状に沿って掘られた溝であると考えられる。以上のように一部曲線を描くが、6A区や6B区で確認できる直線部の方位は1号溝や3号溝と一致する。また、幅約1.7m、深さ約45cmと、規模の面でも1号溝・3号溝と近い。

なお、5A区と6A区には谷部の堆積状況を確認するためトレンチを設定しており、そのトレンチの土層観察から古墳時代の包含層の直下に位置することが確認できた。また、さらに下層には縄文時代の包含層が確認できる。出土遺物からは弥生時代前期の年代が導けるが、やはり点数が少なく、1号溝との関係を考えると年代決定資料としてよいか判断に苦しむ。

出土遺物（第38図）

いずれも壺小片である。11はわずかに外反する口縁部で、外面はタテハケ後に1条の沈線をめぐらし、内面は口縁部付近をヨコハケにより調整する。外面に若干煤がみられる。12は小さな断面三角形を呈する口縁部で、全体が少し内傾する。調整は外面にわずかにタテハケの痕跡が見える程度である。13は外方へ折れる口縁部で、やや厚手である。内外とも剥離や磨滅が激しく、調整は不鮮明である。

6号溝（第37図）

第3次調査区6A区~9A区、10B区にかけて縄文包含層の下部から検出した。6~8A区まではほぼ東西方向に延びるが、9A区の西側で45°北にカーブする。検出した総延長は19.4mある

が、幅は0.35m、深さは10~19cmほどしかない。埋土は黒色粘質土であり、縄文時代に属するものと考えられるが、遺物は出土していない。なお第4次調査においては統計が検出されなかった。

7号溝（第37図、図版15）

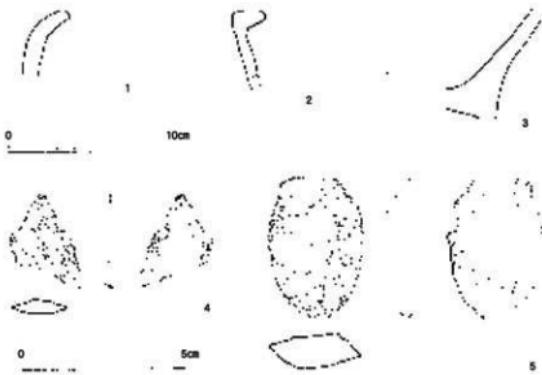
第4次調査区15~17区にかけて古代の包含層の下部から検出した。南西から北東に抜ける溝で、他の溝よりも幅と深さがあるが北側では削平されて消滅していた。土層観察では2段階ないし3段階程度の埋没過程が復元できるが、埋土の大半は砂層で、数回の大きな流れによりあまり時期差がなく埋没したと思われる。ただ、最下層にやや粘性のある茶色土が堆積していることから、緩やかに流れた時期があったことも考えられる。幅は約1.5~1.8m、深さは27~40cmである。出土遺物は1袋ほど出土しているが、ローリングを受けた小片が多く図化に耐える資料が少ない。出土遺物から、所属時期は弥生時代中期と捉えられるが、形状や規模、層位や出土遺物から、第3次調査の1号溝との関連が考えられるため、判断が難しい。

出土遺物（第37図、図版27）

いずれも甕片である。1・2は口縁部小片。1は緩やかに外反する口縁で、端部はやや摩滅する。内面はナデ、外面はタテハケによる調整で、頸部に指圧痕が連続して認められる。2は口縁が短く多くの字に折れるもので、内面はナデ、外面はタテハケで調整し、頸部下はヨコナデする。3は厚底で上底となる甕底部片で端部を欠く。内面はナデ、外面はタテハケ調整し、外底部は凹凸が全面にみられ、ナデ調整されていない。3mm前後の石英を多量に含み、縦方向に粘土の接合痕が認められる。4は安山岩製の打製石器で基部を欠損している。裏面に主要剥離面を残す。右縁先端よりに抉りを施す。5は安山岩製のラウンドスクレイパーではほぼ完形である。縦長剥片を使用し、側縁に表面から細かい調整を加える。裏面はさほど調整を施さず、主要剥離面を残す。

8号溝（第37図、図版15）

第4次調査区18A・B区で検出した南西から北東に向けて抜ける溝である。南側で交錯する10号溝に切られる。土層観察では3段階程度の埋没過程が想定できるが、埋土各層は同系の砂層であることから、数回の大きな流れによりあまり時期差がなく埋没したと考えられる。幅は約1.0~1.4m、深さは20~35cm



第39図 7号溝出土遺物実測図（1~3は1/2、4・5は2/3）

である。規模・埋土から1～3号溝等との関連が考えられる。出土遺物は小片が多く図化に耐えない。

9号溝（第37図、図版15）

第4次調査区18～19区で検出した南西から北東に向かって抜ける溝で、8号溝とほぼ平行して走る。北に向かって浅くなり、かつ試掘時に削平したことによって北側は消滅している。8号溝同様南側で交錯する10号溝に切られる。土層観察では砂層と粘質層の2段階程度の埋没過程が確認できるが、他の溝同様あまり時期差がなく埋没したと考えられる。幅は約0.45～0.75m、深さは12～20cmである。出土遺物は少量、小片であり図化に耐えない。埋土の状況から7号溝と同時期か。

10号溝（第37図）

第4次調査区18～19区で検出した南東から北西に向かって抜ける溝で、南側で8・9号溝を切る。埋土は単層でやや粘性のある茶色土であり、7号溝の最下層と酷似する。幅は約0.23～0.4m、深さは0.03～0.18mと小規模な溝である。出土遺物は少数、小片であり図化に耐えないため掲載していない。出土遺物から時期を決定するのは難しく、切り合い関係から、8・9号溝より後出すると考えられる。

11号溝（第37図）

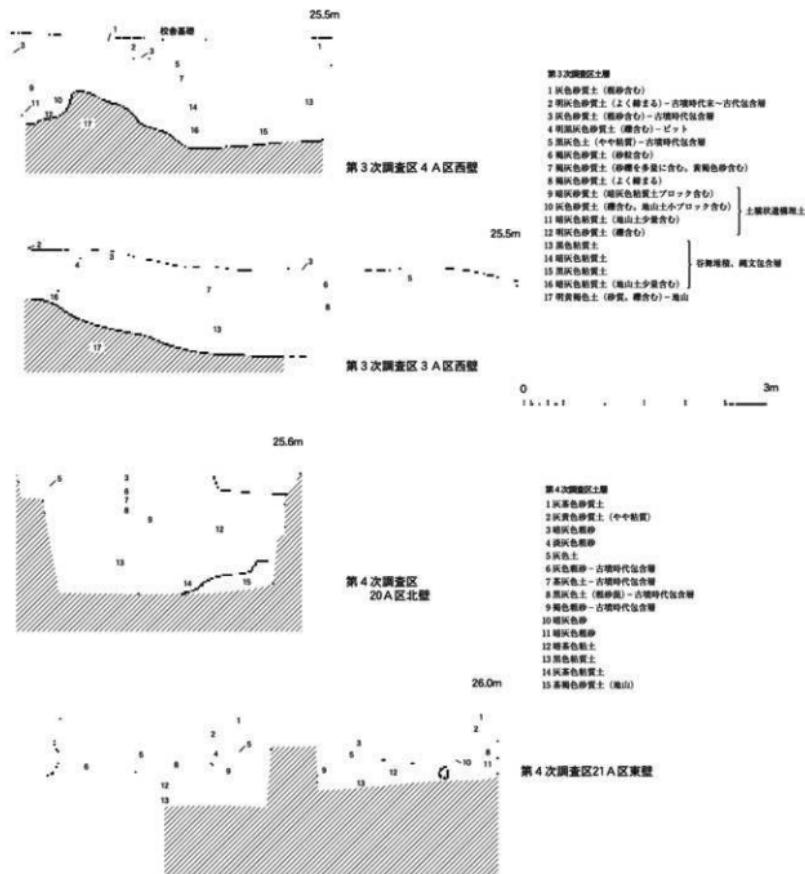
第4次調査区18B区で検出した南西から北東に向かって抜ける溝であるが、南側18区Bでは検出されなかった。埋土は粗砂層の単層で、幅は約0.2～0.3m、深さは0.05～0.2mほどである。出土遺物は少量・小片で、切り合い関係もないことから時期の決定は難しいが、10号溝と同時期の可能性が高い。

(5)谷部と包含層（第14・40図、図版16～18）

第3次調査及び4次調査で縄文時代、古墳時代初頭～前期、古代の包含層を確認している。特に縄文時代と古墳時代前期の包含層では遺物がまとまって出土している。その堆積状況について第3次調査3A・4A区の土層と第4次調査20A・21A区の土層から各層について説明する。

第40図1は第3次調査の3A区、2は4A区の西壁土層図である。1・2層は古墳時代末～古代の包含層で当該区以外では校舎基礎に切られているため残っていない。3・5～8層は古墳時代初頭の包含層である。3A区～6A・B区にかけて認められる。出土遺物は一部弥生時代終末と古墳時代前期を含むが、大半が古墳時代初頭に属しており、当該時期の単純層に近いと考えられる。13～16層は縄文時代前期の包含層、谷部堆積である。谷部は第1次調査でも確認されており、その続きと考えられる。3A区～6B区にかけて谷部の落ちのラインを確認した。また、13層の黒色粘質土は18A区まで確認されている。出土遺物から縄文時代前期、轟B式～曾畠式の包含層と考えられる。19A区からは全面が攪乱を受けており不明であるが、東側でも縄文土器が散見されるため、もともとは包含層が存在していたと考えられる。地山は疊合みの明黄褐色砂質土である（17層）。4・9～12層は遺構埋土である。

3・4は第4次調査区20A区北壁の土層図で、大きくは第3次調査と共通する堆積状況である。4・5層は古墳時代末～古代の包含層で、残存状態に幅はあるが1～20区まで認められた。6・7層は



第40図 第3次・4次調査区包含層土層図 (1/60)

古墳時代初頭の包含層で、19~22区にかけて認められる。第3次調査の包含層と繋がるものと考えられる。出土遺物は弥生時代後期及び古墳時代前期を含むが、大半が古墳時代初頭に属しており、当該時期の単純層に近いと考えられる。8・9層は縄文時代前期の包含層、谷部堆積である。谷部は1次調査・第3次調査から統くと考えられ、層の減少はあるもののほぼ同じ堆積土と思われる。20区から22区以西まで確認できるが、第4次調査区では出土遺物は全く確認されなかった。また最下層の黒色粘土については22B区調査区で厚さ約1mと厚くなっている、谷の深部に近づくようである。その下は明灰色砂質で自然木が若干認められ、最下層には明灰色細砂層が認められた。

以下、縄文時代前期の包含層、古墳時代の包含層、及び古代の包含層出土遺物を中心に報告を行う。

縄文時代の包含層

黒色粘質土から出土した遺物並びに他の遺構から出土していても縄文時代に属すると考えられ、流れ込みと判断できるものについて報告する。出土位置を別途記載しているものを除き全て黒色粘質土出土である。

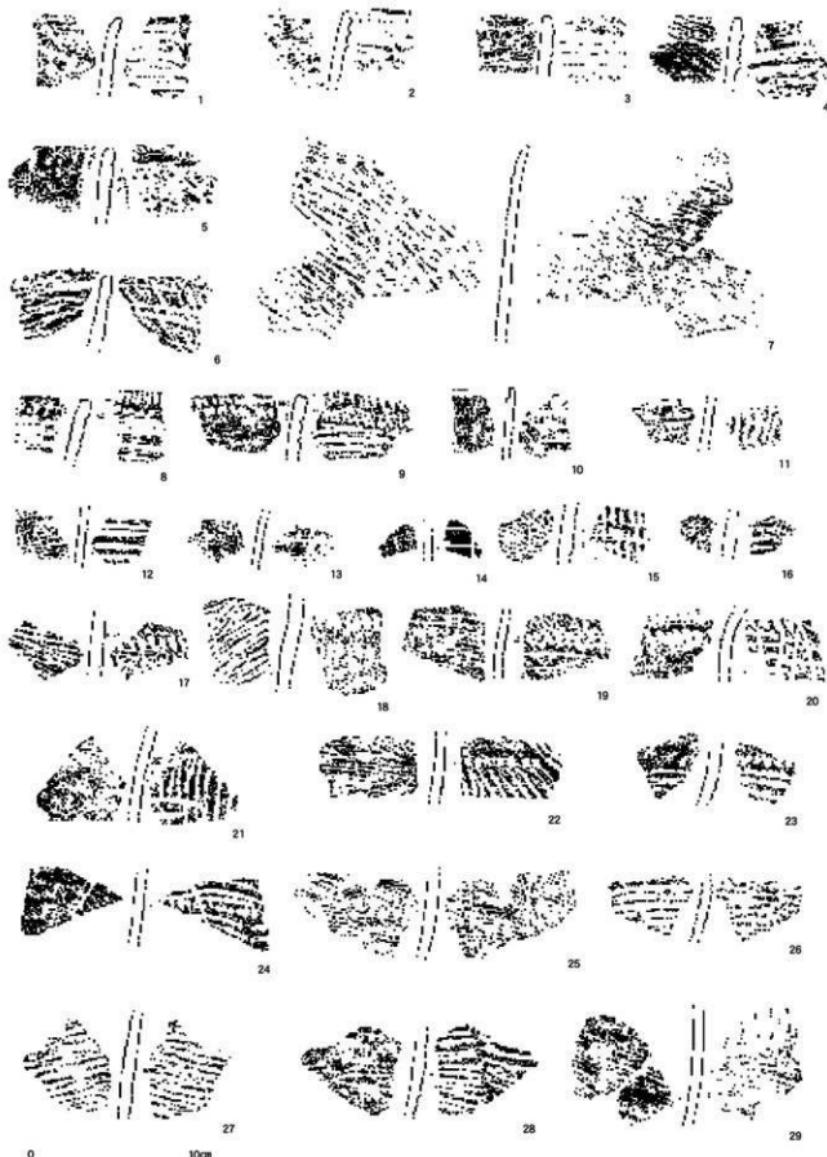
出土遺物

縄文土器（第41・42図、図版21・22）

1～4は森B式土器の口縁破片。1は外面にぶい黄褐色で、断面三角形に近い隆帯を口唇部付近まで付け、5条が残存している。内面は黄褐色で板状工具によるナデを施すか。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。2は外面褐灰色で、断面蒲鉾形に近い隆帯を口唇部付近まで3条施す。内面は褐色でナデを施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。3は外面褐灰色～黒褐色で、断面三角形に近い隆帯を口唇部付近まで付け、5条が残存している。内面は褐灰色で条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。4は外面にぶい黄褐色で、断面三角形に近い隆帯を口唇部付近まで3条施す。内面はにぶい黄褐色で条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。

5～10は曾畠式土器の口縁破片。10は滑石を含む。5は内外面黒褐色で、外面には口唇部下に1条の沈線を施し、下部に谷形および縱方向の連続刺突文を配置している。口唇部の一部には点状の刺突文を施す。内面は摩滅のため不明瞭。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。6は外面にぶい褐色で、外面には口唇部直下から横方向の条痕に斜め方向の短沈線を施す。内面は条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂を多少含む。7は内外面ともに褐灰色で条痕を施す。口唇部付近がわずかに欠損している。径1mm以下の白色粗砂・赤色粒子を少量含む。8は、外面灰褐色で四角形の連続刺突文、その下に横方向の沈線を施す。口唇部には口縁に直行する短沈線状の刺突文を施す。内面はにぶい黄橙色で、蒲鉾形の連続刺突文、その下に横方向の沈線と外面と類似した文様を施す。胎土は精良で径1mm以下の白色粗砂・角閃石を少量含む。9は外面にぶい黄褐色で、斜め方向の連続刺突文、その下に短沈線を施し、4条が残る。口唇部には口縁に直行する刺突文を施す。内面はにぶい橙色で口唇部下から2列の刺突文を施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。10は外面灰褐色で、横方向の沈線の後、X字形に沈線を施す。内面はにぶい赤褐色で口唇部下に1条の沈線を施す。径1mm以下の滑石を含む。1号墳周溝出土。

11～29は曾畠式土器の胴部破片。11～14は滑石を含む。11は外面にぶい黄橙色で、縱方向の短沈線、その上に連続刺突文が1列残る。内面は浅黄橙色で、条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂・滑石を少量含む。12は外面にぶい赤褐色で、外面は横方向の浅い沈線、内面は条痕を施す。胎土は精良で径1mm以下の滑石を含む。13・14は内外面にぶい赤褐色で、外面は横方向の浅い沈線の後縱方向の沈線を施す。内面は条痕を施す。径1mm以下の滑石を含む。13・14は同一個体の可能性もある。1号墳周溝出土。15は外面褐色で、縱長の連続刺突文が3列残る。内面は淡黄色で条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。2号土坑出土。16は外面にぶい黄橙色で、1列の連続刺突文、その下に条痕を施す。内面は浅黄橙色で条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。3A区褐灰色砂質土出土。17は外面にぶい褐色で、条痕の後斜め方向の深い連続刺突文を施し、2列残る。内面はにぶい橙色で条痕を施す。径1mmほどの白色粗砂を少量含む。18は外面にぶい



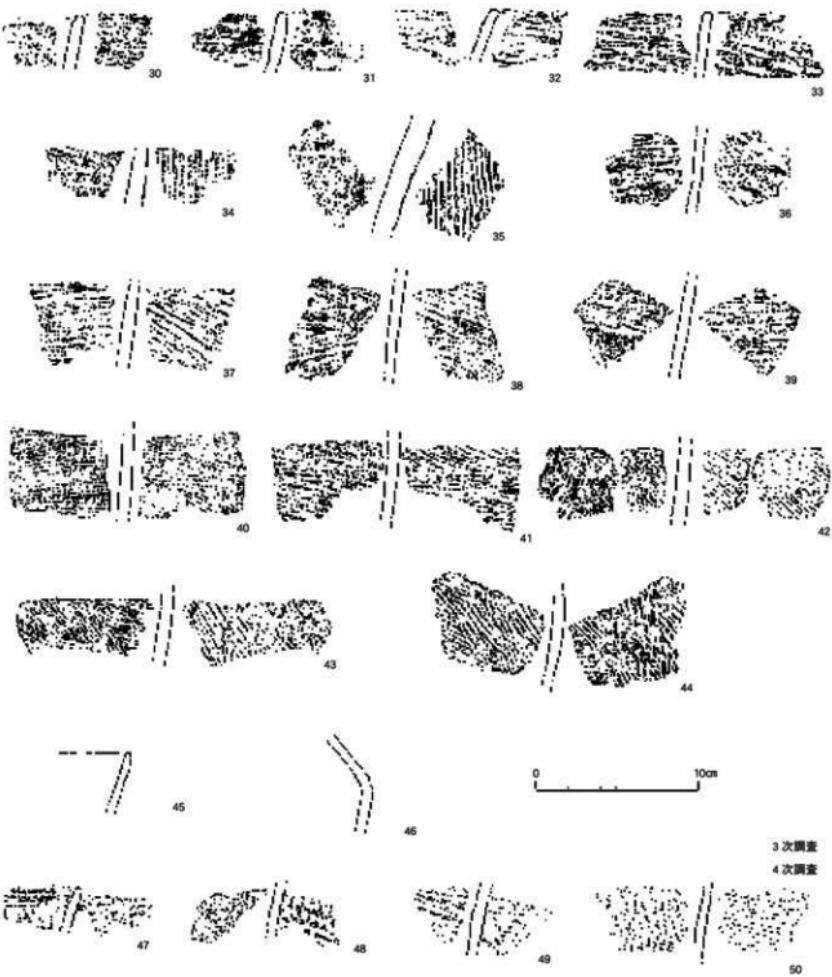
第41図 縄文時代包含層縄文土器実測図① (1/3)

黄橙色で、条痕の後深い連続刺突文を施し、2列残る。内面は橙色で条痕を施す。径1mmほどの白色粗砂少量含む。19は外面黒褐色で、条痕の後2列の連続刺突文を施す。内面は灰黄褐色で条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂・角閃石を多少含む。20は外面灰褐色で、横方向の沈線の後縱方向の沈線を施し、その上に斜めの連続刺突文を施す。内面はにぶい黄橙色で丁寧なナデの後、連続刺突文を施し、2列残る。径1mm以下の白色粗砂少量含む。21は外面にぶい黄橙色で、縱横方向の沈線、1列の斜め方向の連続刺突文を施す。内面は浅黄橙色で条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂・角閃石を多少含む。22は外面にぶい橙色で、斜め方向の沈線、1列の連続刺突文を施す。内面はにぶい黄橙色で条痕を施す。胎土は精良で、径1mm以下の白色粗砂を少量含む。23は外面黄橙色で、横方向の沈線、1列の連続刺突文を施す。内面は灰黄褐色で条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。24は外面褐灰色～灰黄褐色で、横方向の短沈線、1列の連続刺突文を施す。内面はにぶい黄橙色で条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂・赤色粒子を多少含む。25は外面橙色で、横方向の条痕後縱方向の短沈線を施す。内面は灰褐色で条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。26は外面にぶい橙色で横方向主体の条痕を施す。内面は灰黄褐色で横方向の深い条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。27は外面褐灰色で横方向の条痕を施す。内面はにぶい褐色で、横方向の条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。28は外面にぶい黄橙色・灰黄褐色で横方向の短沈線を施す。内面はにぶい黄橙色で条痕後ナデを施す。径1mmほどの白色粗砂を少量含む。29は外面褐灰色・灰白色で、条痕の後爪形文を施し、2列残る。内面は淡黄色で条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。

30～33は条痕文土器の口縁破片。30は内外面灰黄褐色で、外面は条痕を施す。内面は口唇部直下から横方向の沈線、その下部に条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。31は内外面黒褐色で、外面は条痕を施す。内面は条痕を施し、内傾接合の際の接合面が沈線状に残る。径1mmほどの白色粗砂・角閃石を含む。32は外面黒褐色で条痕を施す。口唇部には斜め方向の刺突文を施す。内面は褐色で条痕を施す。内傾接合の痕跡が見られる。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。33は外面褐灰色で条痕を施す。口唇部は幅広で深い刺突文を施し、そのため口縁がやや波状を呈する。内面はにぶい黄褐色で条痕を施す。径1mmほどの白色粗砂を少量含む。

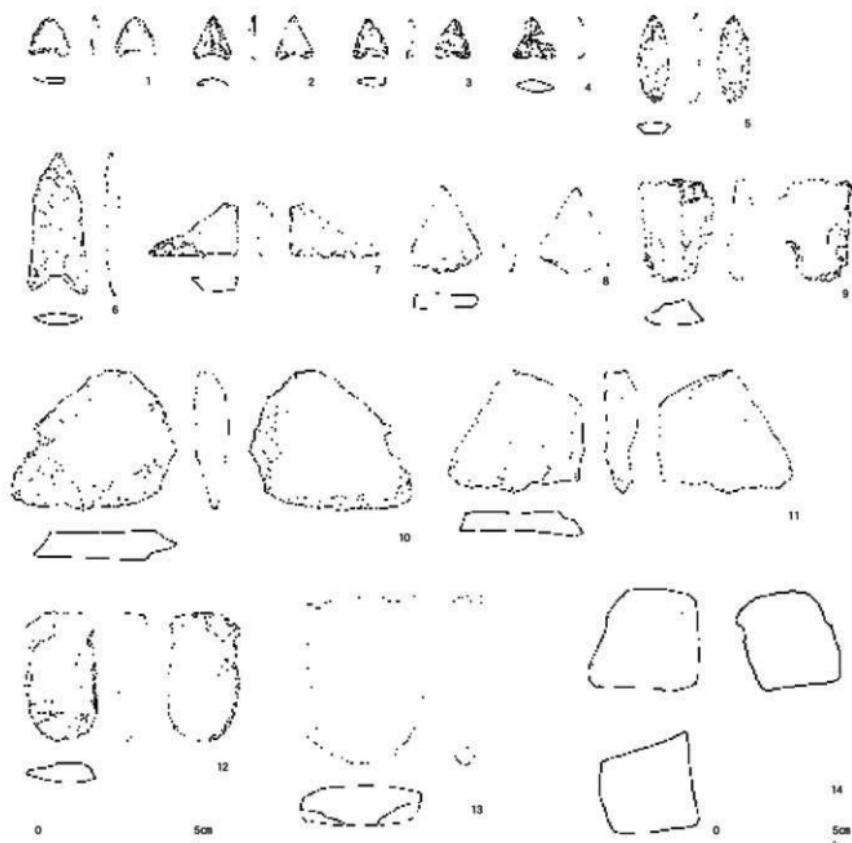
34・35は撚糸文土器。ともに小片のため確実ではないが、早期の範疇に入るものか。34は外面にぶい黄橙色で、外面は縱方向の撚糸文を施す。内面は摩滅のため不明瞭だが、砂粒の動きから横方向の調整が行われている事がわかる。上面は接合面で剥がれており、内傾接合と考えられる。径1mmほどの白色粗砂を多少含む。35は外面にぶい黄橙色・明黄褐色で縱方向の撚糸文を施す。内面はにぶい黄橙色で、摩滅のため不明瞭だが、砂粒の動きから横方向の調整が行われている事がわかる。器面が厚く底部に近いか。径1mmほどの白色粗砂を多く含む。

36～44は条痕文土器の胴部破片。36は外面灰黄褐色で条痕を施す。内面は褐灰色で条痕を施す。内外面ともに内傾接合の際の接合面が沈線状に残る。径1mm以下の白色粗砂・角閃石を多少含む。37は外面にぶい褐色で斜め方向の条痕を施す。内面はにぶい黄橙色で横方向の条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。38は外面灰褐色で斜め方向の条痕を施す。内面は褐灰色で斜め方向の条痕を施す。径1mmほどの白色粗砂を多く含む。39は外面灰褐色で横方向の条痕を施す。内面は褐色で外面と同じく横方向の条痕を施す。40は外面褐色で条痕を施す。内面はにぶい褐色で横方向の条痕を施す。条痕の幅が他の土器に比べて細く、異なる工具を使用



第42図 繩文時代包含層縄文土器実測図② (1/3)

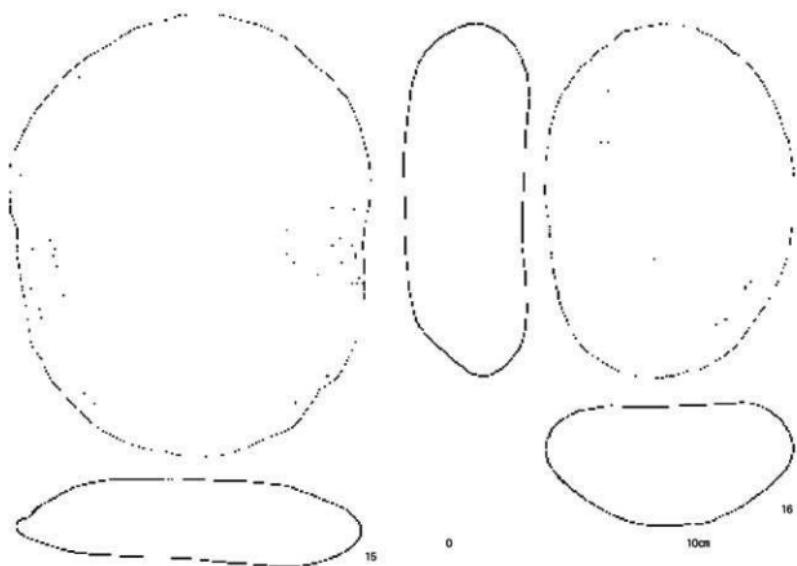
したものと考えられる。径1mmほどの白色粗砂を少量含む。41は外面黒褐色で横方向の条痕を施す。内傾接合の際の接合面が沈線状に残る。内面は褐色で横方向の条痕を施す。径1mmほどの白色粗砂を多少含む。42は外面褐灰色で斜め方向の条痕を施す。内面は灰褐色で斜め方向の条痕を施す。40と同じく条痕の幅が細い。径1mm以下の白色粗砂・角閃石を含む。



第43図 縄文時代包含層出土石器実測図① (2/3、14は1/2)

43は外面褐色で斜め方向の条痕を施す。内面はぶい褐色で横および斜め方向の条痕を施す。内外面ともに一部内傾接合の痕跡が見られる。径1mm以下の白色粗砂・角閃石を多少含む。44は外面にぶい橙色で条痕を施す。内面は橙色・にぶい黄橙色で斜め方向の条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂・角閃石を少量含む。

45・46は縄文時代後期末頃の土器で、4A区の黒灰色土から出土している。縄文後晩期の土器片は他調査区でも混入しており、これらも混入であろう。45は口縁破片である。焼成は非常によく、内外面にぶい黄橙色でナデ調整を施す。外面の口唇部直下に凹線を施す。径1mm以下の白色粗



第44図 縄文時代包含層出土石器実測図② (1/2)

砂を少量含む。46は胸部破片である。焼成は非常によく、内外面にぶい黄橙色でナデ調整を施す。外面胸部最大径の直上に1条の凹線を施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。

47～50は4次調査出土の縄文土器。47は曾畠式土器の口縁破片で、外面にぶい黄褐色で口唇部直下に刺突文を施し、その下に3列の押引文を施す。内面は灰黄褐色で、口唇部直下に刺突文を施し、その下に2列の押引文を施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。暗茶褐色粘質土出土。48は曾畠式土器の胸部破片。外面灰黄褐色で2列の連続刺突文を施し、その下に沈線を施す。内面は橙色でナデ調整を施す。径1mm以下の白色粗砂・角閃石を少量含む。灰色砂出土。49は縄文後期土器と考えられる胸部破片。外面灰黄褐色で、条痕を施した後、刺突文・沈線文を施す。内面は、にぶい黄橙色で条痕を施す。径1mmほどの白色粗砂を少量含む。20A区南側疊層出土。50は条痕土器の胸部破片。外面橙色で縱方向の短沈線を綾杉状に施し、3段残る。内面はにぶい褐～明褐色で条痕を施す。径1mm以下の白色粗砂を少量含む。4A区搅乱出土。

石器 (第43・44図、図版27・28)

1～6は打製石鋤。1は凹基式で両面に主要剥離面を残し、側縁のみ調整を施す。安山岩製。2は凹基式で裏面に主要剥離面を残す。橙色のチャートないしは質の悪い瑪瑙製。3は凹基式で両面に主要剥離面を残す。黒曜石製。4は凹基式で両面に細かな調整を施す。両側縁が最初の剥離により内湾している。黒曜石製。5は尖基式で裏面に主要剥離面を残す。剥離は粗く、縱長剥片を使用している。安山岩製。6は凹基式で他のものと比べて大型である。表面は風化が激しく一部剥離が不明確である。安山岩製。7・8・10・11はスクレイバーと考えられる。9・12は2次加工剥片。

7は横長剥片を使用し、下部に剥離を施す。左側上部にも剥離を施しており、石錐の可能性もある。安山岩製。8は横長剥片を使用し、下部に剥離を施す。表面のみに粗い剥離を施しており、裏面は主要剥離面を残したままである。安山岩製。9は縦長剥片を使用し、上面に刃漬しのような細かい剥離、左縁から下部にかけて裏面にのみ調整を施す。黒曜石製。10は横長剥片を使用したと考えられ、下部に両面から調整を施す。両面に主要剥離面を残す。安山岩製。11は下部に表面のみから調整を施し刃部としている。右面に自然面を残す。安山岩製。12は縦長剥片を使用し、両側から下部にかけて調整を施す。裏面は右縁にのみ調整を施す。安山岩製。13は磨製石斧。扁平で全面に研磨を施す。刃部面には刃こぼれが見られる。蛇紋岩製。14は砥石。上面及び右面を砥面として使用しており、他の面は研磨により成形されている。完形であることから手持ち砥と考えられ、片岩製であることから仕上げ砥と考えられる。

15は石錐か。両側にたたきにより若干のくぼみを作り出しており、わずかに擦痕も見られる。ただし、裏面には加工の痕跡は認められない。凝灰岩製。16はすり石。上面のみを磨り石として使用しており、一部叩きの痕跡も見られる。安山質凝灰岩製。

古墳時代の包含層

谷部には幾つかの時代にまたがって形成された包含層が認められるが、このうち黒灰色ないし黒褐色を呈する層は古墳時代前期前半を中心とする時期の土器が多数出土し、これより下層の灰褐色系の色調を呈する粗砂層からも同時期の遺物が出土している。したがって、これらの層は多少埋没の過程に時間差を認めうるもの、概ね同時期の包含層として理解することが可能である。

この古墳時代前期前半ごろの包含層の上層には、灰白色粗砂層があり、須恵器片が数点出土した。土層としては極めて薄いものの、ほとんど他の時期の遺物を包含せず、古墳時代後期ごろの一時期の堆積を示すものとして理解できる。

以下、古墳時代前期前半ごろの包含層および古墳時代後期の包含層から出土した遺物について各々報告する。なお、弥生時代の土器や石器など明らかな混入品も認められるが、便宜上それらについても古墳時代の遺物と併せて報告する。

出土遺物（第45～54図、図版23～27）

古墳時代の包含層は第3次調査及び第4次調査で確認され同時期の遺物が出土したので、両調査区の出土遺物を併せて報告する。

1～25は壺。1は弥生時代後期の在地系複合口縁壺で、混入品である。内外ともハケ調整を行い、口縁部付近はナデで仕上げ、屈曲部はゆるやかな稜を有する。胎土はやや粗く、色調は褐灰色を呈する。2は広口の壺で、口縁部が大きく外反する。磨滅により調整が不鮮明であるが、内面にはハケメが残る。内面の一部に煤がみられ、胎土はやや粗く、色調は淡橙褐色を呈する。弥生時代の混入品か。

3～5は小型の壺であるが、それぞれ様相を異にする。3は口縁端部を強くヨコナデし、外面をハケメ幅の広いハケで調整する。口縁端部には黒斑を有する。口縁端部に黒斑を有し、色調は外面が淡灰褐色～暗灰褐色、内面が淡褐色～明橙褐色を呈する。4はやや厚手の器壁で、端部に向かってゆるやかに外反する。磨滅が激しいものの、外面にタテハケの跡がわずかに残る。胎土はやや粗く、色調は外面が淡橙褐色、内面が淡黄灰色を呈する。5はやや長めに上方へのび、外面は縦方向に、

内面は横方向に粗くミガキを施す。胎土はやや粗く、色調は褐色～灰褐色を呈する。

6～10は中型の壺である。6は短く外方へのびる口縁で、端部は丸くおさめる。外面はタテハケ後に横方向のミガキを施し、内面は体部をヘラケズリ、口縁部を横方向のミガキで仕上げる。色調は明褐色を呈する。7は口縁部が外反し、頸部に接合痕が残る。外面はハケ調整、内面は体部をナデ、口縁部をハケ調整で仕上げる。色調は外面が淡黄橙色、内面が淡灰褐色～灰褐色を呈する。8はやや高く概ね直線的にのびる口縁部を持つ。内外とも磨滅が激しいものの、外面はハケ調整の痕跡が確認でき、体部内面はヘラケズリを行っており、頸部に指圧痕が残る。色調は淡灰黄色～暗灰褐色を呈する。9はゆるやかに外反する口縁で、他の個体と比べると肩部はあまり張らないで肩である。外面調整は磨滅で不鮮明であるが、内面は口縁部に横方向のミガキを施す。胎土はやや粗く、色調は橙色～黄橙色を呈する。10は全体的に器壁が厚めで、わずかに外反する口縁部で、肩部は9と同様なで肩である。調整は外面を横方向のミガキで仕上げ、内面は体部をヘラケズリ、口縁部を横方向のミガキで仕上げる。外面に若干煤がみられ、胎土はやや粗く、色調は橙褐色を呈する。

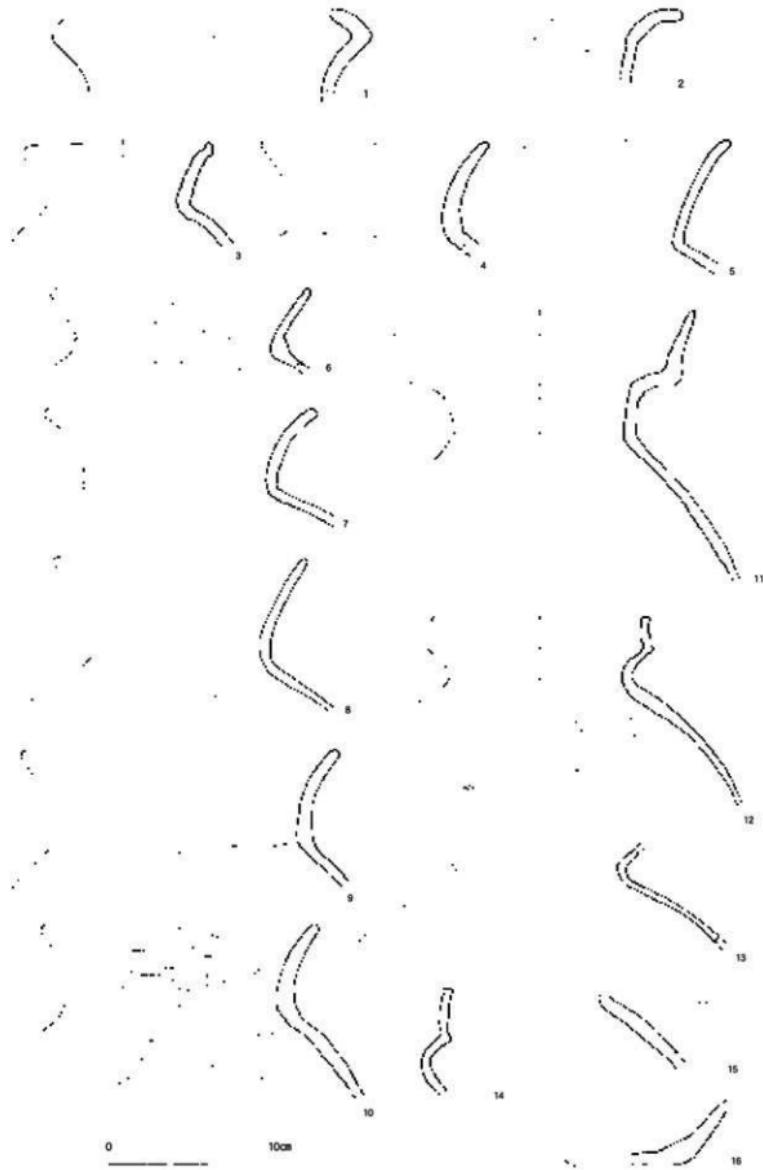
11～14は山陰系の二重口縁壺。11は全体に厚手で、大きく強く屈曲する口縁部からなで肩の体部へと連なる。内外とも磨滅が著しいが、体部内面はハケ調整で、外面も同様とみられる。胎土はやや粗く、色調は淡橙褐色～淡赤褐色を呈する。12は11と異なり体部に比して小さめの口縁部を有する。頸部の屈曲は緩く、より山陰的である。外面は磨滅するもののハケ目調整を施し、内面は体部をヘラケズリし、頸部にはヨコハケの痕跡が残る。色調は黄褐色～灰黄褐色を呈する。13は口縁部を欠くが、頸部から肩部付近にかけての破片である。体部内面は12と同様にヘラケズリを行い、頸部付近には指圧痕がみられる。色調は外面が黄灰褐色、内面が黒色～灰灰褐色を呈する。14は口縁部の小片で、口縁部の立ち上がりは概ね垂直である。体部内面にはわずかにヘラケズリの痕跡が認められる。色調は外面が淡黄褐色、内面が褐色を呈する。

15は壺肩部付近の破片。内外ともハケ調整を行う。在地の広口壺とみられる。色調は褐色を呈する。

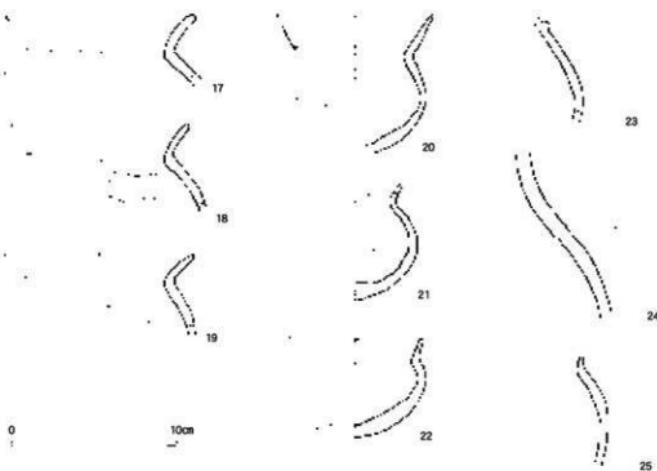
16は底部の破片で、内外とも磨滅するが内底面に指圧痕が残る。外面に黒斑を有し、胎土はやや粗く、色調は外面が黄橙灰色～黒色、内面が黄橙灰色を呈する。

17～19はいずれも少し小振りの壺で、底部を失っているが丸底と推定される。17はやや外反する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる。内面はヨコハケ、外面はタテハケで調整を行い、体部内面には工具による調整痕が残る。色調は橙茶色を呈する。18もやや外反する口縁部で、少しなで肩の体部を呈する。外面はタテハケで調整し、内面は口縁部をヨコハケで仕上げる。体部内面は指ナデの痕跡が残り、粘土の接合痕が明瞭に残る。胎土は精良で、色調は外面が淡黄橙色、内面が黒色～淡橙褐色を呈する。19はやや薄手の口縁部で、体部最大径は口縁部径よりわずかに大きい程度である。外面には横方向のミガキの痕跡が残り、内面は体部をヘラケズリ、口縁部付近をヨコナデで仕上げる。胎土はやや精良で、色調は褐色を呈する。

20～22は小型の丸底壺である。20は概ね球形の体部に、直線的に開く口縁部を有し、口縁部径は体部最大径より若干広い。外面はハケ調整後に体部下半をヘラケズリする。内面は体部をナデ、口縁部をヨコハケで仕上げる。外面底部付近に黒斑を有し、胎土はやや精良で、色調は茶褐色～褐色を呈する。21は口縁部を欠くが、概ね球形の体部で20よりも頸部は縮まる。外面はハケ調整、内面は体部をナデ調整、口縁部をヨコハケで仕上げる。胎土中には赤褐色砂粒が目立つが精



第45図 古墳時代包含層出土遺物実測図① (1/3)



第46図 古墳時代包含層出土遺物実測図② (1/3)

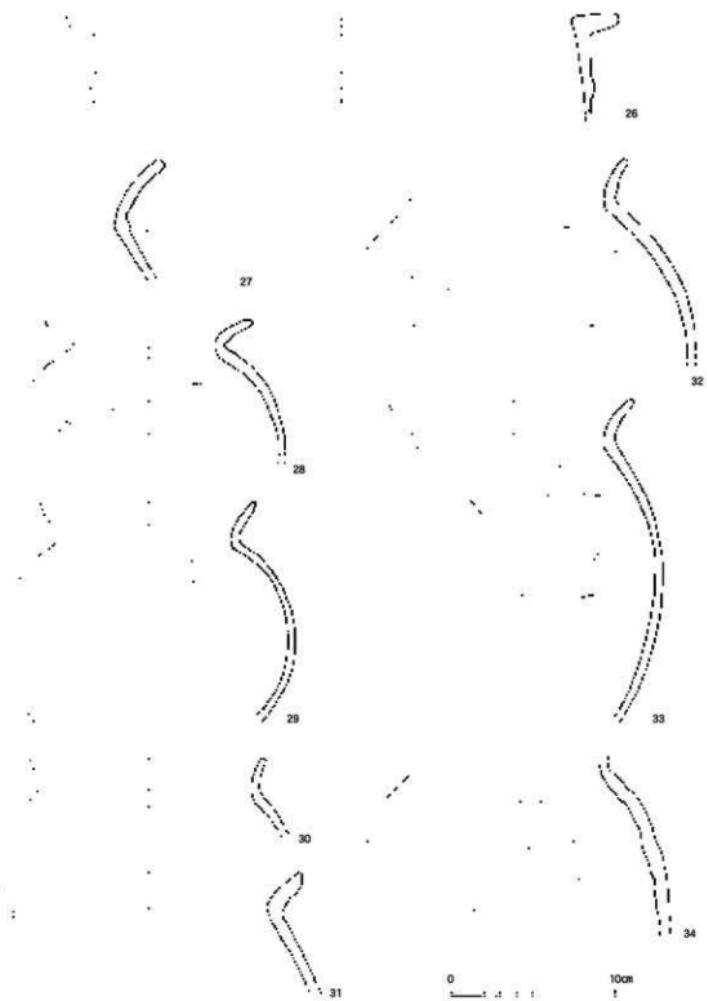
良で、色調は淡灰色～淡褐色を呈する。22は小型の鉢とすべきかもしれないが、後述する鉢類よりも頸部が締まる形態であることから壺として報告する。やや扁平な体部に短く少し外傾する口縁部がつく。内外ともナデ仕上げで、外面体部にはわずかにヘラケズリの痕跡を見ることができる。胎土はやや粗く、色調は褐色を呈する。

23～25は弥生時代の壺の破片とみられる。23は頸部に細い突帯をめぐらせ、内外とも磨滅により調整は不明である。胎土は精良で、色調は灰色～淡赤橙色を呈する。24は弥生時代前期の壺の頸部から肩部付近の破片であろうか。頸部に浅い沈線がみられるほかは、磨滅のため調整は不鮮明である。胎土はやや粗く、色調は灰褐色を呈する。25は無形壺の口縁部片で、磨滅が激しく内面にナデの痕跡が窺える程度である。胎土は精良で、色調は明茶褐色を呈する。

26～77は壺。26は弥生時代の壺口縁部片で、明らかな混入品である。かなり磨滅しており、口縁部下に1条の低い突帯をめぐらせる。胎土はやや粗く、色調は黄橙色を呈する。

27は在地系の壺、28・31～34は畿内第V様式系の影響下にある一群である。29・30は壺として報告するが、丸底の壺とすべきか。

27は大きく「く」の字に折れる口縁部で、典型的な在地系の壺である。外面は体部にタタキを行い、口縁部はタテハケで仕上げ、内面はハケ調整で仕上げる。胎土はやや粗く、色調は橙褐色を呈する。28はやや器壁が厚く、胎土もやや粗い。体部上半部だけの資料であるが、球形胴と推定される。内外とも体部はハケ調整で、口縁部付近はヨコナデで仕上げる。なお、体部には内外とも部分的にヘラケズリを行った痕跡が認められる。色調は褐灰色～橙褐色を呈する。29はやや薄手で、球形の体部である。外面はタテハケで調整し、内面は体部をヨコハケ、口縁部をヨコナデで調整する。とくに口縁端部は強くななるため、外面がわずかにへこんでいる。色調は暗灰色～淡橙灰色を呈する。30はやや垂直気味に近く立ち上がる口縁部で頸部の締まりがあまりない。内外とも磨滅する



第47図 古墳時代包含層出土遺物実測図③ (1/3)

が、口縁部付近はヨコナデで仕上げる。さきの28・29と同様に球形胴であろう。胎土はやや精良で、色調は淡黄橙色を呈する。31は厚手の器壁で、体部と同じ厚さのまま「く」の字に折れる口縁部が特徴で、長胴壺と考えられる。今回の調査では同様の特徴をもつ個体はみられない。内外と

も磨滅が激しいが、口縁部はヨコナデで仕上げる。色調は淡黄褐色を呈する。32は口縁部から体部中位までが残り、全体に厚手で、やや長胴である。外面は体部中位にヨコハケ、上位にタテハケで調整を行い、内面はヨコハケで調整する。体部の内面には粘土の接合痕が残る。外面の一部に黒斑を有し、色調は茶褐色～褐色を呈する。33は長胴の壺で、直線的に外上方へのびる口縁を有する。内外ともタテハケないしナナメハケで調整を行い、体部内面には粘土の接合痕を残す。なお、外面には二次被熱による赤変が一部に認められる。体部下半に黒斑を有し、色調は外面が橙褐色～黒色、内面が褐色～黒色を呈する。34はやや粗製の壺体部片で、かなり厚手で、肩部外面に黒斑を有する。外面はタテハケ、内面はヘラケズリと指圧痕が残る。色調は外面が褐色、内面が灰褐色を呈する。

35は小型の壺で、体部の最大径よりも口縁部径の方がわずかに大きい。外面はタテハケで調整し、内面は体部をヘラケズリ、口縁部をヨコナデし、底部に黒斑があり、肩部にはわずかに煤がみられる。色調は明灰褐色を呈する。

36も小型壺で、外反する口縁部で、端部は上方へつまみあげる。外面は体部をヨコハケ、口縁部をタテハケで調整し、内面は体部をヘラケズリ、口縁部をヨコハケで調整する。やや器壁が厚めである。色調は明褐色を呈する。

37は庄内系壺で、器壁が非常に薄く、口縁端部は内側をわずかにつまむ。外面は非常に細かいタキ目で、口縁部はヨコハケの痕跡を残す。内面は体部をヘラケズリし、口縁部はヨコナデで仕上げる。外面に一部黒斑がある。色調は褐色を呈する。

38～75は、庄内系の66を除くといずれも布留系壺で、在地系の壺と比べ全体に器壁が薄めである。38は磨滅が激しいが、体部内面は頸部からやや下がった位置までヘラケズリである。色調は淡黄橙色を呈する。39は全体に磨滅しているが、体部の外面はハケ調整で、内面はヘラケズリを行う。頸部内側の稜とヘラケズリとの間隔がやや広めである。色調は淡黄褐色を呈する。40は口縁端部を丸くおさめるが、わずかに内側をつまむ意識がみられるか。磨滅が激しい。色調は淡黄橙色を呈する。41は頸部で単純に「く」の字に折れるのではなく、一度体部から立ち上がるのが特徴である。口縁端部は外面を少しつまむ。色調は淡褐色を呈する。42は体部内面をやや広めのヘラで削る。口縁端部は内側につまむ。外面に一部黒斑があり、色調は淡橙褐色～黒色を呈する。43は体部内面のヘラケズリが頸部にまで達する。外面はハケ調整である。色調は淡赤褐色を呈する。44は口縁端部を丸くおさめる。内外とも磨滅が激しいが、体部内面のヘラケズリは頸部の稜よりやや下がった位置までである。色調は黄橙色を呈する。45は全体に薄手で、41ほどではないが頸部付近で若干立ち上がる傾向がみられる。また、口縁端部は内側に強くつまみあげる。外面はヨコハケ、内面は体部をヘラケズリ、口縁部をヨコハケで調整する。色調は黄褐色を呈する。46は磨滅のため調整が不鮮明であるが、内面のヘラケズリは少し細かく行うようである。色調は外面が黄褐色、内面が褐色を呈する。47は口縁部が頸部で強く折れて、低く広がる。外面はタテハケ、内面はヘラケズリを行うが、ヘラケズリの方向や単位はやや不明瞭である。色調は黄褐色～褐色を呈する。48は内外ともかなり磨滅する。口縁部は高く、斜め上方にむかって直線的にのびる。胎土はやや精良で、色調は淡黄褐色を呈する。49は比較的器壁が薄く、体部内面のヘラケズリは頸部稜線付近まで及ぶ。口縁端部を強く内側につまむ特徴は45と共通する。色調は明褐色を呈する。50は口縁端部を内側につまむが、やや丸みを帯び、49ほどの鋭さに欠ける。体部外面はタテハケ後に粗くヨコハケを行い、内面のヘラケズリは頸部稜線との間隔が広く指圧痕が1～2段は



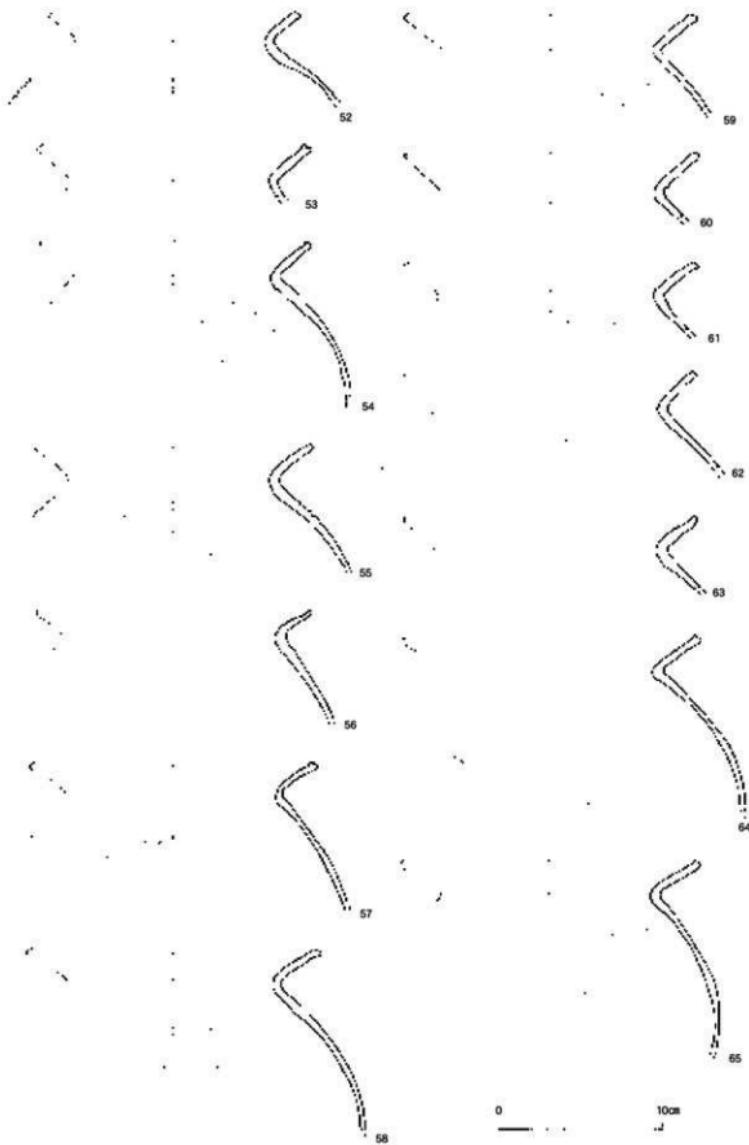
第48図 古墳時代包含層出土遺物実測図④ (1/3)

ど残る。一部に黒斑がみられ、色調は外面が淡黄褐色、内面が暗灰褐色～黒褐色を呈する。51は口縁部の小片で、胎土は精良で、色調は淡褐色を呈する。他の個体と比較して口縁部の立ち上がりが短く、内面のヘラケズリもやや細かい。外面は磨滅する。小片ではあるが、復元してもさほど大きな口径にはならない。胎土は精良で、色調は淡灰褐色を呈する。

52は他の個体よりも少し肩が張る形態を呈し、外面にはタテハケの後に、肩部に凹線文に似た圓線をハケで施す。外面の一部に黒斑を有し、色調は外面が橙褐色～黒色、内面は灰褐色を呈する。53は体部を失うが、遺存する形態から体部上半はなで肩になるだろう。外面はナナメハケ、内面はナデによる調整で、口縁部は内外ともヨコナデで仕上げ、端部は内側につまむ。若干煤が付着し、色調は淡灰褐色～灰褐色を呈する。54は体部中位までが遺存し、外面はタテハケ後に1条のヨコハケをめぐらせ、内面はヘラケズリを行うが、頸部後線までは間隔がある。口縁端部はわずかに内側につまむ。一部に煤が付着する。色調は橙褐色～褐色を呈する。55は磨滅により調整が不鮮明であるが、外面には52と同様にハケで凹線文に似た圓線をめぐらせ、同じ工具で粗雑な波状文を施す。内面は頸部付近までケズリを行う。口縁部は磨滅も影響して顕著な形態をなさない。胎土はやや粗く、色調は明褐色を呈する。56は口径の割には口縁部の立ち上がりが短い。磨滅が激しいが、外面は口縁部をヨコハケで調整し、肩部に櫛で2条の波状文を施し、その下端に1条の浅い沈線をめぐらせる。内面は口縁部をヨコハケ、体部を頸部付近までヘラケズリする。焼成はやや不良であるが、胎土は精良である。色調は黄褐色を呈する。57はかなり器壁が薄い。外面はタテハケ後に一部ヨコハケを行い、その後櫛描きによる波状文を施す。内面はヘラケズリを頸部付近まで行い、口縁端部は内側につまむ。胎土はやや精良で、色調は灰黄褐色を呈する。58は、外面はタテハケ後にヨコハケを行い、内面はヘラケズリを行う。ヘラケズリの範囲は頸部よりやや下がった位置までである。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は外側をつまむ。外面の一部に煤がみられる。色調は外面が褐色、内面が灰褐色を呈する。59は外面をヨコハケ、内面をヘラケズリする。ヘラケズリが及ばない範囲には指圧痕が目立つ。色調は黄褐色を呈する。60は口縁部が長く立ち上がり、端部を丸くおさめる。内面はヘラケズリを行う。色調は淡黄褐色を呈する。61は内外とも磨滅するが、内面はヘラケズリの痕跡が覗える。口縁端部は外側をつまむ。色調は外面が淡黄灰色～褐色、内面が淡黄灰色を呈する。62は口径復元にやや不安を残す。外面は磨滅により調整不明であるが、内面はヘラケズリを頸部付近まで行う。色調は淡灰黄褐色を呈する。63は外面をタテハケ、内面をヘラケズリする。口縁部はわずかに内湾させ、端部は丸くおさめる。色調は淡褐色～淡灰褐色を呈する。64は体部中位まで残る。外面はタテハケ後に肩部にヨコハケを行い、内面は頸部後線近くまでヘラケズリを行う。口縁端部は内側につまむ。胎土はやや精良で、色調は橙褐色を呈する。65は他の個体に比べて、口径の割に体部の径が小さい。外面は磨滅するがタテハケ後に頸部から少し下がった位置に波状文を施す。内面はヘラケズリを行う。胎土はやや精良で、色調は淡黄褐色を呈する。

66は庄内系甕で、全体的に器壁が非常に薄い。外面は右下がりのタタキの後にタテハケを施す。内面はヘラケズリを頸部後線付近まで行う。色調は淡黄灰色を呈する。

67是比较的外面に指圧痕が残る。外面はタテハケ、内面は頸部後線までヘラケズリを行う。口縁端部は内側につまむ。外面に黒斑を有し、色調は黒色～暗黄灰色を呈する。68は全体的に磨滅するが、外面にはわずかにタテハケの痕跡が残り、内面はヘラケズリを行う。口縁端部は内側につまむが、丸みを帯びる。色調は淡褐色を呈する。69も全体的に磨滅するが、外面にヨコハケの



第49図 古墳時代包含層出土遺物実測図⑤ (1/3)



第50図 古墳時代包含層出土遺物実測図⑥ (1/3)

一部が残り、タテハケ後に上半部の一部にヨコハケを施したものと考えられる。内面はヘラケズリを行うがその単位はあまり明瞭ではない。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。色調は外面が淡黄灰色、内面が淡褐灰色を呈する。70は外面が磨滅するが、頸部より少し下がった位置に2条の浅い沈線がめぐる。口径の割には口縁部の立ち上がりは短く直線的で、端部は丸くおさめる。色調は黄橙色～灰色を呈する。71は口縁部の立ち上がりが高く、端部はわずかに外側につまむ。外面の調整は不鮮明であるが、内面はヘラケズリの一部を確認できる。色調は黄灰色を呈する。72は外面をタテハケ後にヨコハケで調整し、内面は頸部よりやや下がった位置までヘラケズリする。口縁部は直線的に開き、端部は内側につまむ。色調は褐灰色を呈する。73は口縁部の径が大きい割には頸部の締まりが強い。口縁部は強いヨコナデにより凹凸が激しい。外面はタテハケ、内面は頸部接線付近までヘラケズリを行う。色調は淡黄橙色を呈する。74は薄手の甕小片で、外面は磨減しているが、内面は頸部よりやや下がった位置までヘラケズリする。口縁部は均一

の厚さのまま端部に達し、端部は丸くおさめる。色調は外面が灰黒色～橙褐色、内面が灰黒色を呈する。75は頸部から肩部にかけての破片で、器壁が薄い。外面はタテハケ後に肩部にヨコハケを施し、内面はヘラ削りを行う。黒斑を有し、色調は外面が黒色～橙褐色、内面が黒色～黄灰色を呈する。

76は弥生時代の壺底部片である。内外とも磨滅するが、ナデによる調整がみられる。混入品である。色調は橙褐色を呈する。77も弥生土器の壺底部片で混入品である。外面には指圧痕がみられ、内面は工具調整の痕跡が認められる。色調は茶灰色を呈する。

78～106は高坏である。78～99は有稜高坏である。78はおおよそ完形で、坏部の稜は他の個体よりも緩い。外面はハケ調整、内面は坏部をハケ後に粗いミガキ、脚部は筒状部を工具調整、裾部をハケ調整する。坏部内面には黒斑があり、脚裾部には煤が付着する。色調は外面が明褐色、内面が淡灰褐色を呈する。79は口縁部片で、内外とも磨滅するが、ハケ調整の痕跡が残る。色調は明褐色を呈する。80は坏部のみおおよそ完形で、坏部の稜ははっきりしている。内外ともハケ調整であるが、一見するとミガキのような雰囲気がある。色調は外面が茶色、内面が褐色～黒褐色を呈する。81は他の個体にくらべて少し厚手であるが、坏底部と立ち上がりとの接合部は明瞭である。外面坏底部にハケ調整がみられる。色調は淡褐色を呈する。

82・83は坏部底部の破片である。82は坏部立ち上がりと脚部の双方が接合面で剥離している。内外とも淡褐色を呈する。83も接合面で剥離しているが、脚部との接合の方法は82と異なる。器壁が磨滅しており、調整は不明で、色調は明赤橙色を呈する。

84～86は坏部片である。84は口縁部のみ遺存するが、上記の個体よりも口縁部が長くのび、坏部もやや深めである。内外とも磨滅するが、ハケ調整の痕跡が認められる。色調は黄褐色を呈する。85も口縁部が直線的に長くのび、坏部が深い。内外とも磨滅が激しく調整は不明であるが、外面の段は比較的明瞭といえよう。色調は茶褐色～黒灰色を呈する。86は坏部が屈曲する。内外ともハケ調整で、内面底部はわずかにミガキの痕跡が覗える。色調は淡褐色を呈する。

87～89は概ね脚部のうち筒状部の資料である。87は円孔透かしを2か所に穿つ。内面はしほり痕が目立ち、外面は剥離により不明である。色調は淡黄橙色を呈する。88は磨滅が激しく、外面にハケ調整の痕跡が認められる。胎土はやや精良で、色調は淡灰褐色を呈する。89は内外とも磨滅が激しく調整が不鮮明であるが、内面にはしほり痕を確認できる。胎土はやや精良で、色調は淡灰褐色を呈する。

90～98は、98を除き脚裾部まで遺存する資料。90は全体的に磨滅するが、外面裾部にはヨコハケ、内面筒状部には工具による削り気味の調整痕がみられる。脚裾部に黒斑を有し、色調は明褐色を呈する。91は脚部と坏部との境で剥離しており、接合面にはしほり痕が認められる。外面は指オサエ後継方向のナデを行い、ハケで調整する。内面は工具調整である。90にくらべると裾部の開きが短い。色調は淡褐色～明褐色を呈する。92は磨滅により外面の調整が不鮮明であるが、内面は筒状部を工具によるナデ、裾部はヨコハケを施す。色調は淡灰褐色～淡褐色を呈する。93も磨滅が激しいが、筒状部の内面を工具調整する以外はおおよそハケで調整する。色調は明黄褐色を呈する。94は筒状部がやや厚みがある。外面はハケ調整、内面は筒状部を工具調整し、裾部をハケで調整する。裾部の一部に黒斑を有し、色調は淡黄褐色を呈する。

95・96・99は裾部を大きく開く形態である。95は裾部に円孔を四方向に穿ち、裾部付近に黒斑を有する。筒状部の内面は工具による細かな調整がみられ、裾部は内外ともハケで調整を行う。

色調は明赤橙色を呈する。96は円孔を三方に穿つ。外面は筒状部に工具の痕跡がみられ、裾部はタテハケで調整する。内面は筒状部にしぼり痕がみられ、裾部との境付近はヘラケズリを行い、裾部はハケで調整する。脚部は坏部との接合面で剥離しており、接合面には工具による刻みがみられる。色調は外面が淡灰褐色、内面が淡黄灰色を呈する。99は坏部の立ち上がりと脚据部を欠く。脚部は中実で、裾部は2か所に円孔がみられ、本来は三方に透かしがあったと考えられる。全体に磨滅するが、外面には縦方向のミガキを施している。色調は淡黄橙色～淡橙色を呈する。

97・98は八の字状に広がる裾部を呈する脚部片である。97はやや厚手の器壁で、脚端部は丸くおさめる。外面はタテハケ、内面はヘラケズリし、裾部はヨコハケで調整する。胎土はやや精良で、色調は橙褐色を呈する。98は脚部の基部が坏部との接合面で剥離し、裾部を欠く。外面は磨滅が激しいがタテハケがみられ、内面はしぼり痕が顕著である。胎土はやや精良で、色調は明褐色を呈する。

100は有段高坏で、口縁部と裾部を欠く。全体に厚手であるためか重量があり、典型的な畿内系の資料とは乖離し、在地産であろう。脚部の基部付近は中実である。全体に磨滅が激しく、脚部外面は粗いヘラケズリ後にタテハケ、内面は工具による調整を行ひ、裾部はヨコハケを行う。色調は淡灰黄色を呈する。

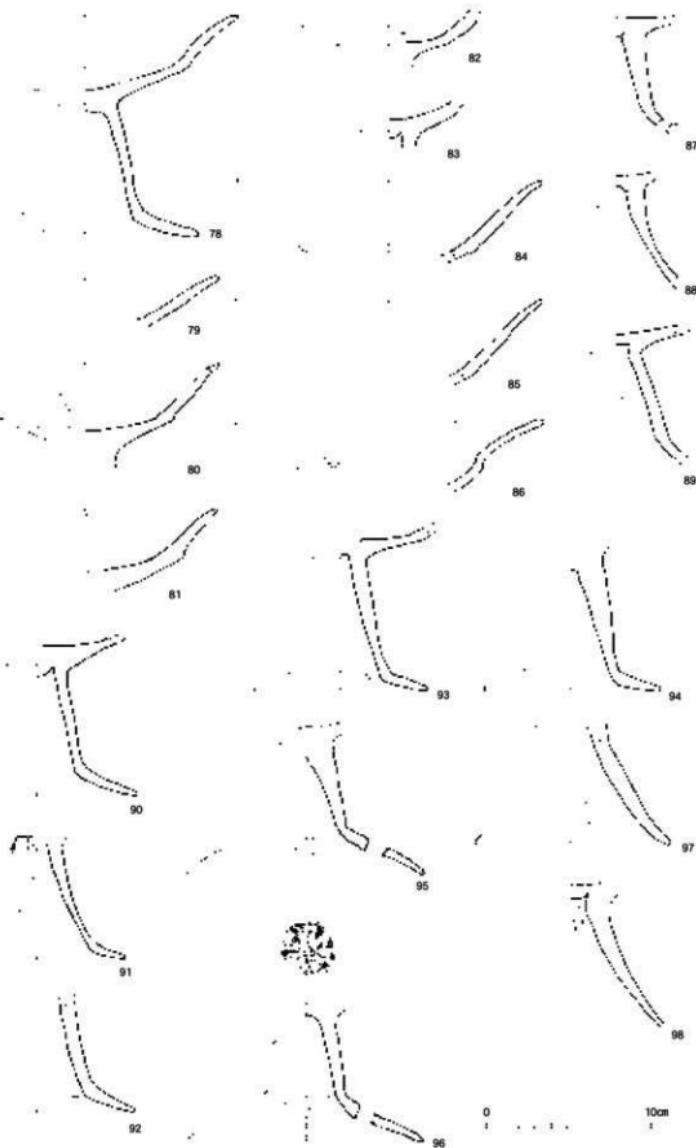
101は中実の脚部片である。細身の脚部であるが、有稜高坏の系統であろう。本来の数は不明であるが、円孔を1つ確認できる。色調は暗褐色～黄褐色を呈する。

102～106は楕形高坏の脚部である。102は八の字に広がる脚部で、脚基部内面に工具の痕跡が残る。外面は坏部を横方向のミガキ、脚部をタテハケ後に横方向のミガキで仕上げる。内面は磨滅により不明である。胎土はやや精良で、色調は淡黄褐色を呈する。103は中実の脚柱部が特徴で、裾部は短く八の字に広がる。外面は磨滅により調整不明であるが、内面は坏部にミガキ、脚裾部にヨコハケがみられる。また裾部に円孔が三方に穿たれている。色調は淡黄灰色を呈する。104は畿内系の楕形高坏で、裾部が大きく屈曲して広がり、柱状部は中実である。内外ともハケで調整し、色調は淡褐色を呈する。105は低く逆漏斗状に広がる脚部で、四方に円孔を穿つ。外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整する。色調は内外とも淡黄褐色を呈し、外面は黒斑により一部黒色を呈する。106は大きく八の字に広がる脚部で、柱状部は中実である。外面はタテハケ、内面は坏部をナデ、裾部を工具調整とナデで仕上げる。胎土はやや精良で、色調は淡褐色～明褐色を呈する。

107～134は鉢。107～108は丸底の小型鉢である。107は薄手で、口縁部のみ外反させる。内外ともナデ調整で、口縁端部は少し波打つ。胎土はやや粗く、色調は黄橙色を呈する。108は全体に厚手で、内外とも指圧痕が比較的良く残り、手捏ね土器を思わせる。色調は淡灰褐色を呈し、外面の一部に黒斑があり、部分的に煤の付着もみられる。

109～111はやや丸みを帯びた平底の鉢。109は口縁部をわずかに外方へ広げた形態で、内外ともハケ調整をし、内面は口縁部以外をナデで仕上げる。色調は淡褐色を呈する。110は器面に亀裂が目立つ。外面は底部をヘラケズリしたのちナデで仕上げ、内面はほとんど磨滅するがミガキを施す。色調は黄褐色を呈する。111は外面をナデ調整し、内面は口縁部以外にヘラケズリする。色調は灰黄褐色を呈し、底部に黒斑を有する。

112～114は平底の鉢。112は小型で、口縁部は指オサエで調整するためか不整形である。内面にハケ工具の痕跡が残る。色調は淡橙褐色を呈する。113は庄内系甕の底部の可能性も考えられた



第51図 古墳時代包含層出土遺物実測図⑦ (1/3)



第52図 古墳時代包含層出土遺物実測図⑧ (1/3)

が、ここでは鉢底部として報告する。外面に細かなタタキ調整の痕跡が窺え、粘土の接合痕が散見される。色調は外面が橙灰色、内面が灰褐色を呈する。114は粘土の貼付による底部を有し、外面はナデ調整で、内面はナデ後に粗くミガキを施す。色調は外面が黄褐色、内面が茶褐色を呈する。

115・116は台付鉢。115は高台を有し、外面はナデ、内面はヨコハケ調整する。色調は外面が灰褐色～明赤褐色、内面が明灰褐色を呈する。116は比較的高い高台を有し、脚部と鉢部外面はハケで調整し、鉢部内面はナデで仕上げる。焼成はやや甘く、色調は淡黄褐色～明褐色を呈する。

117は径が大きく、逆台形状の平底気味になる鉢。全体に厚手で、内外ともハケ調整し、外底面はヘラケズリの後にならる。内面および外底面に黒斑を有し、色調は淡灰褐色～黒色を呈する。

118～120は低平で丸底の鉢。118はやや薄手で、内外とも横方向のミガキで仕上げる。胎土は精良で、色調は淡灰褐色を呈し、内外の一部に黒斑を有する。119は全体に薄手で、磨滅が著しいものの外面にハケ調整がみられる。胎土は精良で、色調は淡褐色～淡橙褐色を呈する。120は前二者に比べて厚手で、外底面をヘラケズリし、内面にはミガキを施す。色調は茶褐色を呈する。

121・122は小型丸底鉢であるが、一般的に畿内産・畿内系と称される一群とは一線を画する。121はやや厚手で、口縁部を緩やかに屈曲させる。内外とも磨滅するがハケ調整し、胎土は精良で、色調は褐灰色を呈する。122は低平な形態で、口縁部をやや強く屈曲させ、端部を極めてわずかに内傾させる。胎土は精良で、色調は外面が淡灰褐色、内面が淡灰褐色～暗灰色を呈する。

123～133は脚付鉢。123は脚部を失い、外面は磨滅する。内面は放射状に粗くミガキを施す。色調は明褐色～灰褐色を呈する。124は口縁端部を強くなるため、外面に稜がある。やや磨滅するが、内外とも横方向のミガキを施し、脚部の内面にもミガキが認められる。口縁部外面に黒斑を有し、色調は外面が白灰黄色～白黄橙色、内面が白灰黄色を呈する。125はやや厚手の器壁で、八の字に広がる脚部を有する。全体的に磨滅するが、脚部外面と坏部内面にハケ調整がみられ、脚部内面はナデ調整である。胎土はやや粗く、色調は淡褐色～淡黄褐色を呈する。126は脚基部付近の破片である。内面は磨滅で調整不明であるが、外面は横方向のミガキで仕上げる。色調は黄褐色である。127は低平に八の字に広がる脚部片で、坏部との接合面で剥離している。内外とも磨滅により調整不明で、胎土は精良、色調は黄灰色～赤橙色を呈する。128は裾部で屈曲する脚部片で、三方に円孔を穿ち、外面はナデ後に縱方向のミガキを施し、内面はナデ調整し、裾部にヨコハケ調整を行う。胎土はやや精良で、色調は淡灰褐色～明褐色を呈する。129は八の字に広がる脚部で、外面はヘラケズリ後にナデ調整し、内面は基部側を工具によるナデ、裾部をヨコハケで調整する。色調は橙褐色を呈する。130は130と近似した形態で、外面にケズリ調整はみられないが、内面には工具ナデの痕跡が残る。色調は淡橙褐色を呈する。131は脚基部付近の破片で、円孔を三方に穿つようである。磨滅が激しいものの、内外面に縱方向のミガキが残り、坏部内面にもわずかにミガキが窺える。色調は淡灰褐色を呈する。132はやや厚手で、直線的に八の字に広がる形態をなす。内面はヨコナデ調整、外面は縱方向のミガキを施す。内面に黒斑を有し、外面は褐色～黒色、内面は黒色を呈する。133は基部からなで肩状に広がる形態で、円孔を三方に穿ち、うち1つの円孔の横には竹管状の刺突痕がある。内外ともタテハケで調整し、外面全体に黒斑を有する。胎土はやや精良で、色調は暗灰色～黒色を呈する。

134は有穿孔鉢で、平底の底部には内側から円孔が穿たれている。内外とも接合痕が目立ち、外面は指ナデ、内面はハケで調整し、内面底部付近のみ指ナデと工具による調整を行う。外面に黒斑

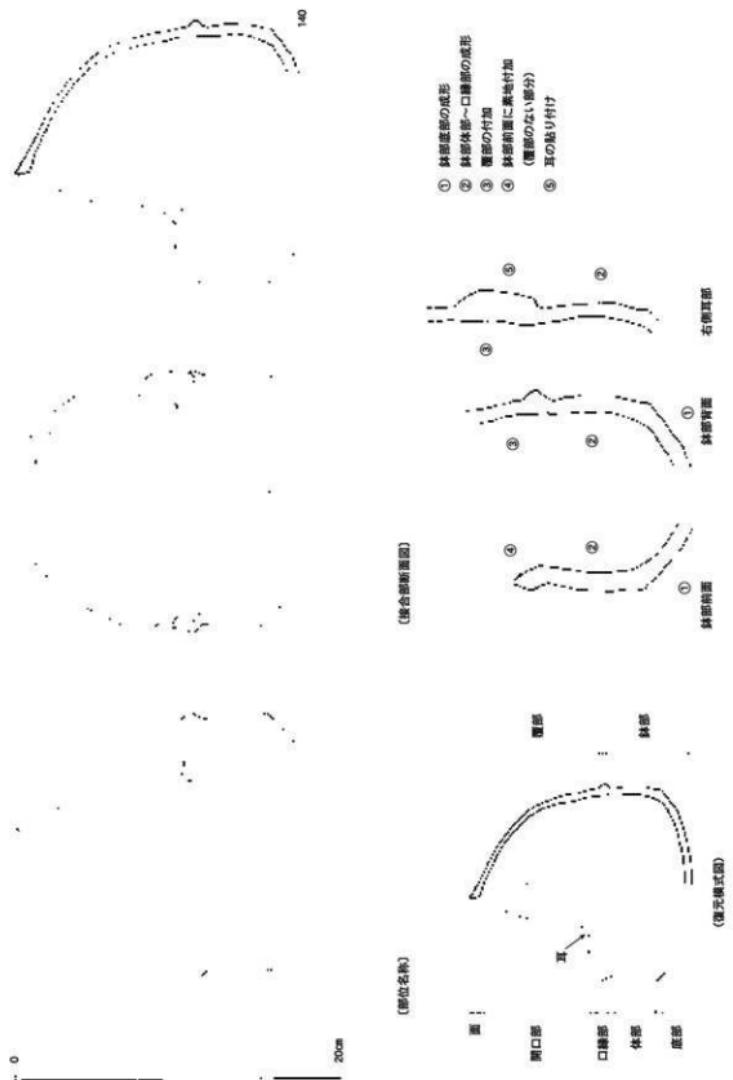


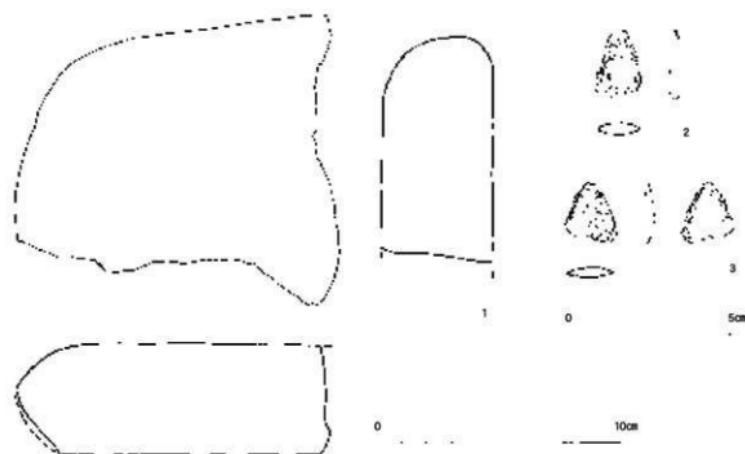
第53図 古墳時代包含層出土遺物実測図⑨ (1/3)

があるため、色調は外面が淡黄褐色～黒色、内面が淡黄褐色を呈する。

135～137は器台。135～137は畿内系の小型器台である。135は受部片で、浅い皿状を呈し、端部は丸くおさめる。外面はヘラケズリ後に指ナデで調整し、内面は粗い放射状のミガキを施す。色調は黄褐色を呈する。136は口縁端部を上方へ折り曲げる。外面はヨコハケ後に縱方向や横方向のミガキを施し、内面は放射状のミガキがみられる。外面端部には黒斑を有する。胎土は精良で、色調は淡褐色～明褐色を呈する。137は脚部片で、八の字状に真っ直ぐ広がる。外面は磨滅するが、一部にタテハケがみられる。内面は工具調整の痕跡が明瞭に残る。胎土は精良で、色調は淡黄橙色～橙褐色を呈する。

第54図 古墳時代包含層出土遺物実測図⑩ (1/3)





第55図 古墳時代包含層出土遺物実測図①（1は1/2、2・3は2/3）

138は山陰系の鼓型器台である。全体的に磨滅が著しく、調整は不明瞭であるが、鋸部内面はヘラ削りとみられる。色調は黄橙色を呈する。

140は手培形土器。開口部の周辺と鉢部の3分の1ほどが遺存する。鉢部は中程に屈曲部があり、そこに小さな突帯をめぐらせる。底部はすでに失われているが、屈曲部から底部に至る傾斜から推測すると、おそらく丸底というよりも平底気味になるだろう。覆部との接合部は鉢部側を少し「く」の字に曲げて、覆部を内側に接合する。内外ともやや磨滅するがハケ調整を行い、焼成はやや不良、胎土は精良で、色調は淡灰褐色を呈する。胎土や焼成具合は他の包含層出土土器にみられないもので、非在地的製品の可能性があり、他地域からの持ち込みも想定される。残存する器高は17.3cm、鉢部の径は15.7cmを測る。

139は平瓶である。上述してきた古式土師器の包含層の上層には、薄い古墳時代後期の包含層も認められた。ただし、遺物量は古式土師器に比べて極めて少なく、大半が壊片でかつ固化に耐えない資料が多いことから、ここでは多少なりとも形態が分かる1点について報告する。平瓶の体部下半で、焼成は精良である。内面は回転ナデ、外面は底部付近を回転ヘラケズリする以外は回転ナデで調整する。底部にヘラ記号を有する。色調は外面が灰黒色、内面が青灰色を呈し、外面全体に薄く灰かぶりがみられる。

石器(第55図、図版28) 1は安山岩製のすり石で、表裏両面に摺痕が残る。全体の4分の1ほどが遺存している。大きさと目の細かさから置き砥の仕上げ砥と考えられる。2・3は安山岩製の打製石鎌。2は凹基式で、先端部と脚部を欠損するが、先端は新しい欠損である。剥離は粗く中央に主要剥離面が残る。3も凹基式で、片方の脚部と先端をわずかに欠損する。剥離は粗く裏面に主要剥離面が残る。

古代の包含層

第4次調査で広範囲に認められた古代の包含層には、弥生時代後期からの遺物が含まれており、図化に耐えうる資料についてのみ掲載した。

出土土器（第56図）

1は弥生時代中期、2は後期の壺または壺の底部片。1はやや上底で内面と外底部にナデが認められる。外面は摩滅のため調整が不明だが、一部に工具のあたりと思われる痕跡が残る。外底部中央付近は平坦にする。内底屈曲部は指圧痕による調整が為される。2は摩滅が激しいが、内面はナデ調整、外底部は指圧痕による調整が認められ、ほぼ平坦である。3は底部ヘラ切りの土師皿で、口縁はやや開いて端部を丸く収める。体部内外面は回転ナデ、内底部はヨコナデを施し、外底部は未調整である。4は内黒の黒色土器口縁部小片で、内面のミガキはやや粗い。外面は回転ナデを施す。口縁端部は若干肥厚させて丸く玉縁状につくる。

(6) その他の遺構

上記報告の遺構や包含層の他に検出したピットや包含層、搅乱等からの出土遺物についてここで報告する。各遺構については調査区を越えた関連性を確定することができないため、報告は調査区ごとに行う。

第2次調査区

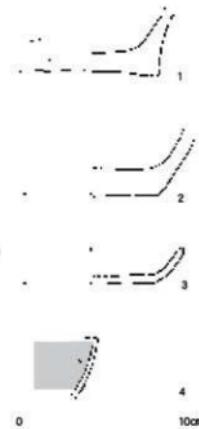
ピット出土遺物（第57図、図版26・28）

1は1号墳南くびれ部付近の墳丘下にあるピット43から出土した弥生時代前期の壺口縁部。直線的に内傾する口頸部から円弧を描き外反する口縁部へと続く。口縁端部の断面形状はやや丸みを帯びた四角。破片下端で比較的明瞭に屈曲し、胴部へと続くとみられる。外面調整は縦方向に近い角度での斜め方向のミガキで、胴部との境界の接付近は横方向ミガキ。内面調整は、口縁部の外反部分は横方向のミガキ、口頸部内面は粗い縦方向のミガキ。

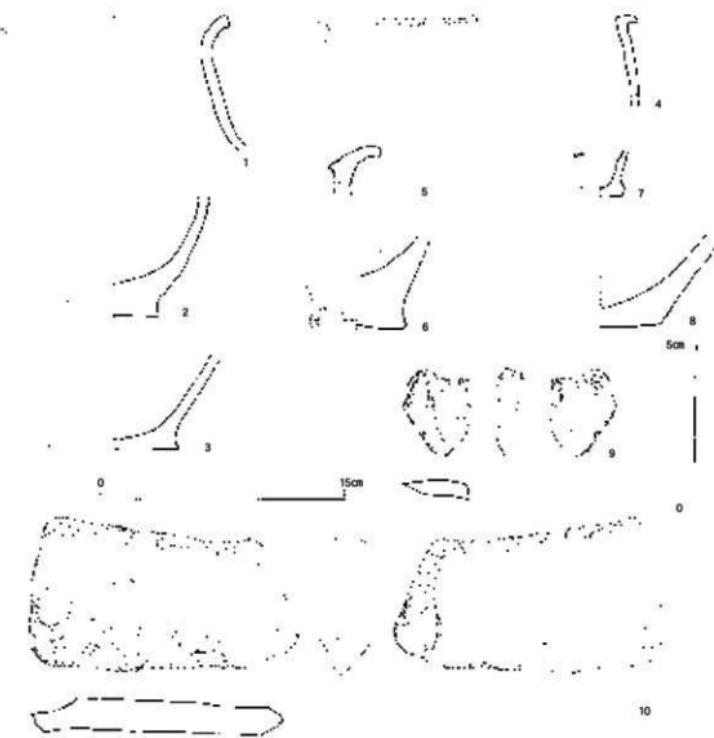
2は7号土坑の北側にある小ピット（ピット55）から出土した弥生時代前期の壺胴部。円盤状の底部から、細長く胴部へと続く形状。胴部最大径は12cm程度となる小形器種。小形の割には器壁は約8mmの厚さを測り厚手といえる。外面は横方向のミガキ調整で、底面にまでミガキは及ぶ。内面調整は条痕である。

3は1号土坑にあるピット35から出土した弥生時代前期の壺底部。底部は薄く6mm程度を測る。底面は平坦で、底部角は鋭角的に外方へ張り出す。胴部は直線的に開く形態。内外面の調整は観察し難いが、ミガキないしナデ。

4は調査区北東の風倒木痕付近にあるピット6から出土した弥生時代前期の壺。緩やかに内傾する口縁部の端に突帶を貼り付けて口縁部をつくりだし、側面にキザミを連続させる。突帶側面から下面にかけてのヨコナデは粗雑で凹凸が生じる。内外面ともにナデ調整で、堅敏に焼締まる。



第56図 古代包含層出土
土器実測図（1/3）



第57図 第2次調査区ピット出土遺物実測図 (1/3, 9・10は2/3)

5は2号竪穴住居南側にあるピット67から出土した弥生時代前期の壺口縁部。円弧を描きながら強く外反する口縁部であり、端部は四角く收める。口縁部内面に断面三角形の突帯を巡らせ、口縁部上面を強調する。

6は8号貯藏穴のコンクリート基礎を挟んだ北側のピット群にあるピット77から出土した弥生時代中期の壺底部。厚底の形態で底面中央部をわずかに窪ませる。外面はタテハケ、内面はナデによる調整。

7は1号墳周溝北西コーナー肩にあるピット62から出土した手づくり土器で完形品。緩やかに外反する体部を呈し、その径よりも若干大きい円盤状の底部をもつ。底面は平坦である。

8は1号貯藏穴北西にある径1m程度の略円形ピット(ピット37)から出土した壺ないし壺の底部。底面はごくわずかに凸レンズ状を呈する。外面はタテハケによる調整で、内面はナデによる。

9は調査区東端にあるピット24から出土した黒曜石使用痕剥片。左側に微細な使用痕がみられる。上面に自然面を残す。縦長剥片を使用する。

10は5号竪穴住居北側にある小ピット（ピット49）から出土した安山岩製のスクレーパー。横長剥片を使用する。上部には両面から剥離を施し刃部をつくりだす。下部は表面にのみ粗い剥離がみられる。裏面に一部原石面を残す。

包含層等出土遺物（第58・59図、図版27・28）

遺物包含層や擾乱等から出土した遺物を一括したものである。大半が竹重1号墳の周溝からの出土遺物であり、古墳に伴うと判断したものは既に報告しているが、そうでないものを今回図示している。なお、7・14・15・22は風倒木痕、3は試掘時、4・16・19は擾乱からの出土である。

1は縄文時代前期の鉢口縁部。内外面ともに右下がりの斜め方向の条痕が顕著である。2・3・4は弥生時代前期の壺。両者ともに弧を描きながら強く外反する口縁部で、端部は四角く収め側面をわずかに窪ませる。3は口頸部と胴部との境に断面三角形の突帯を巡らせる。3は外面から口頸部内面にかけて丁寧に横向方向のミガキを施し、器面に光沢が生じる。小型の壺の胴部。口頸部と胴部との境には、内外面ともに明瞭な段をつくる。しっかりとした細い沈線により山形文を描き、丁寧なつくりの印象を受ける。5は弥生時代後期の袋状口縁壺の口縁部で、弧を描きながら内済する形状。頸部との境の稜は、丸みを持つつも明瞭に巡る。6～22は弥生土器の口縁部であり、22が弥生時代中期末～後期初頭である以外は、弥生時代前期の範疇でおさえられる。6～11は口縁端部にキザミをもつもので、6・8・9は口縁部に突帯状につくりだすもの、7は口縁端部を若干つまみだしてキザミをいれるもの、10～11は如意形に屈曲させるものである。7・8のキザミは比較的大きく深いタイプであり、他は小刻みに施される。12～16・19は口縁端部にキザミをもたない如意形口縁の形態をなすもの。13～15は口縁部下外面に沈線を巡らせ、16は断面三角形の突帯を巡らせる。17・18・19・20は口縁部に突帯状の貼り付けを行うタイプであり、17・20の口縁部断面形状は三角形、18は短くL字形とするもので一部内面に向かって突帯状に張り出しつくるが大部分が剥離する。21は口縁端部の接合面で剥離する。22はく字状に強く屈曲させる口縁部で、小片のため径は出し得ないものの大形と推測される。

23～35は弥生土器の壺ないし壺の底部。23・24は立ち上がりの形状から前期の壺と判断できよう。23は内外面および底面に細かい丁寧なミガキを施す。25～32は平底の形態から前期の範疇で捉えられよう。33は底面が凸レンズ状となり後期に位置付けられる。34・35は小形の壺の底部であろう。小さい平底にわずかに開きながら直線的に立ち上がる胴部が続く。

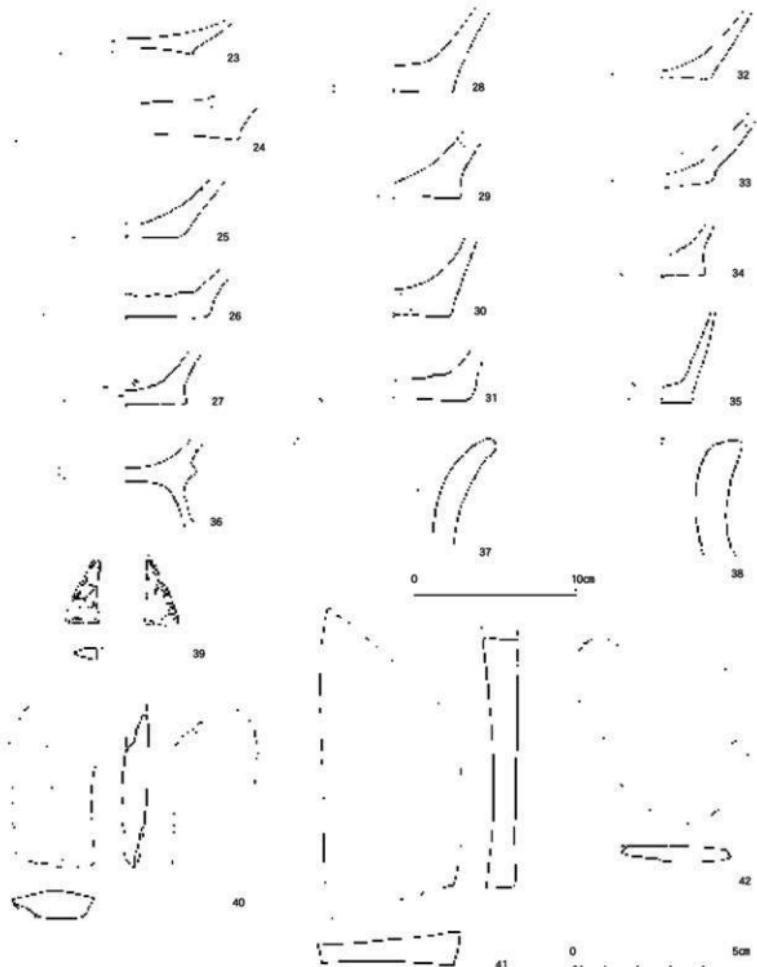
36は弥生時代前期の高坏で、坏部と脚部との境に断面三角形の突帯を巡らせる。焼成が甘く摩滅が著しい。

37・38は円筒形の器台口縁部で外反する形状。弥生時代中期もしくは後期の所産。

39は黒曜石製の打製石鎌で平基式。裏面に主要剥離面を残す。左側の抉りは新しい欠損の可能性がある。40は扁平片刃石斧と思われる頁岩製。下部にわずかに刃部を形成している。中心にややシノギがみられることから石剣の再利用品とみられる。41は砥石。泥岩製。砥面は表面及び裏面。側面及び下面は研磨による面取り。上面は風化しており、欠損ではなく本来の形状を示すものと思われる。42は石包丁とみられる。一部に穿孔の痕跡がみられ、背孔が2.8cmと広くなる。表面は剥離のため不明。粘板岩製である。



第58図 第2次調査区包含層等出土遺物実測図① (1/3)



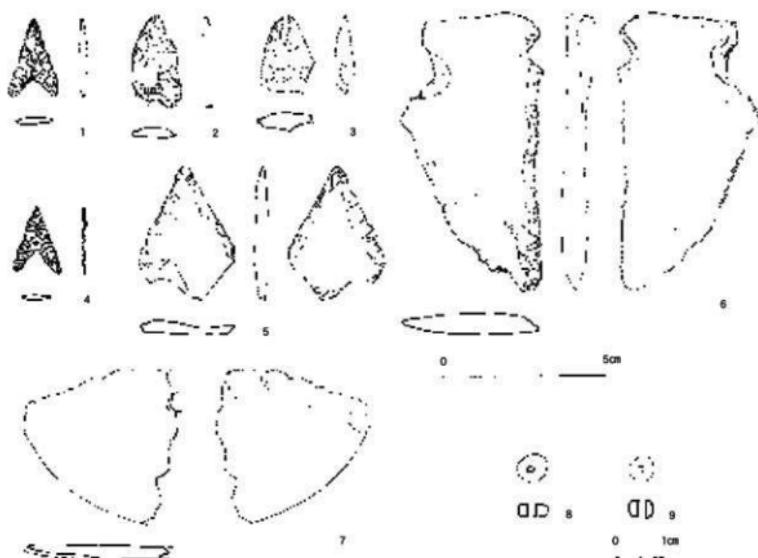
第59図 第2次調査区包含層等出土遺物実測図② (1/3、39~42は2/3)

第3次調査区

調査区のピット及び遺構面等から出土した遺物について一括して報告する。出土遺構は各個別に記す。

出土遺物 (第60図、図版26・28)

1~4は打製石鎌。1は凹基式で、側縁は細かい調整を施し、鋸歯状を呈する。抉りは深く繩文



第60図 第3次調査区遺構外出土遺物実測図 (2/3、8・9は1/1)

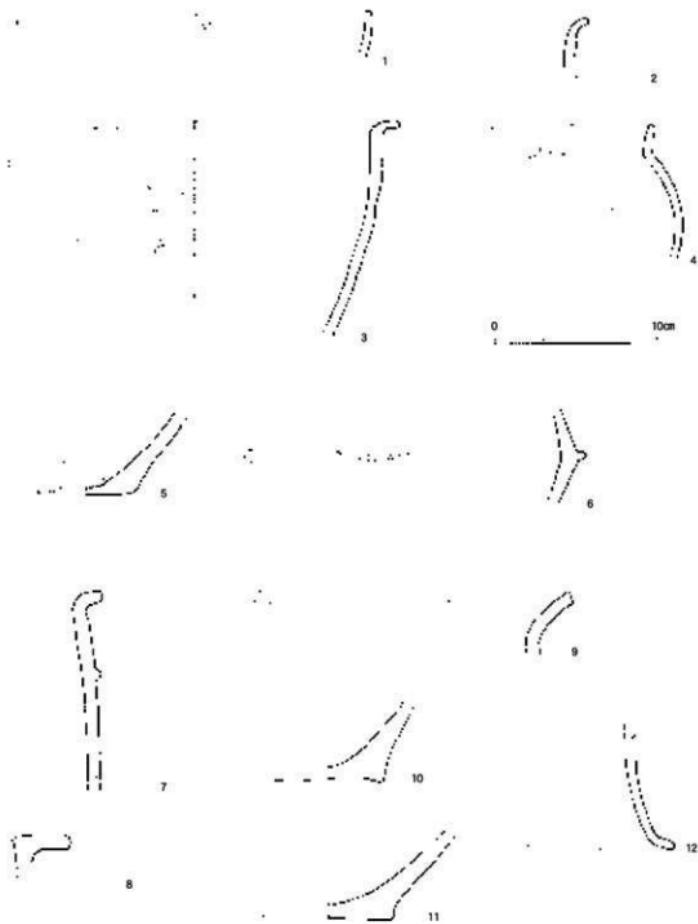
時代に属するものと考えられる。黒曜石製。8 A区遺構面出土。2は凹基式で片脚が欠損する。剥離は全体的に粗く風化が激しい。黒曜石製。7 A区遺構面出土。3は平基式で片脚が欠損する。剥離は全体的に粗く厚みがある。安山岩製。16A区ピット21出土。4は凹基式で、全面に細かい調整を施す。抉りが深く縄文時代に属するものと考えられる。黒曜石製。風倒木痕出土。5は石鎚の未製品と考えられる。横長剥片を使用し、両側縁にのみ調整を施す。両面とも中央に主要剥離面を残す。右下方が薄くなっているため失敗品として廃棄された可能性もある。安山岩製。6 A区遺構面出土。6はナイフ形石器と考えられる。右縁に連続剥離調整を施し、刃潰しをしており、上方には両側から抉りを入れている。刃潰しがあることからナイフとしているが、他器種である可能性がある。安山岩製。排土中出土。7は石窓。外湾刃半月形で残幅が大きいことからあまり使用されていないと考えられる。孔の部分で破損し、全体の1/3程度しか残っていない。背孔1.05cm。輝緑凝灰岩製。4 A区基礎埋土出土。8・9はガラス玉で、25C区出土。周辺から弥生時代後期の土器片が出土しており、当該時期と思われる。

第4次調査区

調査区のピット及び遺構面等から出土した遺物について報告する。出土遺構は各個別に記す。

ピット等出土遺物 (第61図、図版26)

1~4はピット及び攪乱からの出土。1は鉢口縁部小片。小片で摩滅が激しいため調整は不明瞭であるが、内面にわずかにハケ状の工具痕が認められ、その後ナデ消す。復元口径21.4cm。ピット



第61図 第4次調査区ピット等出土遺物実測図 (1/3)

88出土。2・3は広口甕の口縁部小片。2は口唇部を強く外反させる。外面頸部以下に細かいハケメが残り、その他はヨコナデ調整を施す。ピット44出土。3は口縁部から体部までが残存する。口唇部はほぼ水平に外反させ、ヨコナデ調整する。外面頸部下にヘラによる沈線を一条施す。体部外面は斜のハケ調整を施し、中位に指圧痕が認められる。内面は口唇部付近にヨコハケを施し、体部には、斜め方向の工具痕が認められる。また、中位には指圧痕が認められる。復元口径15cm搅乱出土。4は直口口縁壺で、口縁部は内外共にヨコナデ調整。外面はハケメによる調整と他の工具で調整し、外面の一部に黒斑が認められる。体部内面は丁寧なハケメ調整で頸部の稜は強い。復元口径

10cm、ピット91出土。

5・6は19区Aの谷部落ち際に形成されていた疊層からの出土で、古墳時代の包含層と考えられる。5は甕底部片。底部は平坦で細かくハケ調整し、外面も縦位のハケで丁寧に調整する。内面もハケ調整であるが、底部に工具のあたりが明瞭に残り、全体を6分割して丁寧な調整を施している。底径63cmを測る。6は弥生時代前期の壺体部小片で、中位に刻み目突帯を貼付する。場内外共にヨコナデ調整で薄く仕上げ、突帯貼付部内面には指圧痕が一列に並ぶ。復元体部最大径21cmを測る。

7~12は試掘調査で採集した遺物である。7・8は甕片。7は口唇部が短く、強く外反させるものである。体部上位に一条の突帯を貼付し、その内面は強くヨコナデを施す。その他はヨコナデ調整である。8は口唇部に刻み目を有する口縁部小片で、摩滅が激しくヨコナデ調整がわざかに認められる。9は壺口縁部小片である。口唇部は強く外反させ、端部を断面四角に仕上げる。外面は斜め方向のハケ調整を施し、内面は横方向の細かいハケ調整を施す。10は甕底部小片で、外底部はやや凹状に作られる。全体に摩滅が激しいが、ハケメが確認できる。11は壺底部片で、体部から底部に強い屈曲が見られる。外面は斜のハケメで調整して底部付近をヨコナデする。内面は摩滅が激しく調整は不明である。12は小型精製器台の脚部で、脚裾部の屈曲はやや緩やかである。外面はナデ調整し、内面は未調整で絞り痕が認められる。

(7) 戦争関連遺構

第2次調査の表土除去の際に、グランド造成時の堆積下においてコンクリート基礎が検出された。表土と併せて撤去することを試みたところ、大型重機を用いた作業であったにもかかわらずびくともしない強固なつくりであり、撤去によって遺構面が傷付く恐れもあったためにそのまま残すこととした。当初は現在の校舎に先行する学校基礎であると考えていたが、校舎のような配置とならないことから疑問が残り、また学校関係者に問い合わせたところ、校舎があった記憶はないとの返事を得た。コンクリート基礎に伴う搅乱も随所にみられ、何らかの施設があったものであろうという程度の関心で調査を進めることとした。折りしも同窓会が開催され、その際に聞き取りをしていただき、同窓生よりこのコンクリート基礎が戦時中の兵器工場であったとの証言を得た。要約すると「工場建設がはじまつたのは昭和19（1944）年のことである。工場ができる前は学校のグランドであり、工事が始まっても生徒には何ができるのか教えてくれなかつた。しかし土台を造った時点で終戦を迎へ、実際に工場は稼動していない。」ということである。また、工場は人間魚雷の部品を造るための工場であり、渡辺鉄工所に関連するものであるとの情報も得られた。渡辺鉄工所は現在でも渡辺鉄工株式会社として工業部品製造に携わっており、今回の調査成果について情報がないか問い合わせたところ、「福岡市周辺では工場がつくられ学徒動員として学生が兵器製作に関わったことは知られているが、浮羽高等学校内に施設が存在したことは聞いたことがなかつた。終戦時に全ての資料が焼却処分されているため記録類は残されていないが、当時渡辺鉄工所は軍需産業拡大の元、昭和18（1943）年に航空機部門である九州飛行機株式会社と兵器部門である九州兵器株式会社に分離されていたが、人間魚雷の部品を製作していたのならば、九州兵器株式会社の傘下で設けられた水雷兵器を製造する工場であったのであろう。」との情報を得た。

検出されたコンクリート基礎は大きく3ブロックからなる。それら基礎を繋ぐような位置に配管



第62図 戦争関連施設実測図 (1/100)

があり、配管は調査区外へ延びることから別の構造が調査区外に存在する可能性は高い。下記文中の「柱穴」とは24cm四方の深い穴を指し、内側コーナーは狭い面を持つ厳密には八角形をなすものが多い。コンクリート屑や土砂が堆積していたため深さを確認していないが、一部の状況から判断してかなりの深さがあるものと想定される。柱穴と記したものの、柱が伴うとは断言できず、機器もしくは機器の台座を固定するためのものかもしれない。また「アンカー」と記述したもののは径3cmの非常に太いもので、一部にはボルトを伴うものもある。基礎の強固さとともに柱穴の深さ・アンカーの太さから考えて、かなり大形の機器を伴うものと判断される。

南西側の基礎は東西に3ブロックに細分される。西区画は周囲に厚さ16cmの壁を立ち上げ、内部には正方形の柱穴が並ぶ。中央区画はアンカーが連立。東区画は南から東にかけて厚さ16~20cmの壁を立ち上げ、その内側に溝を巡らせる。基礎南東角から配管を南側へ出す。内部はアンカーが8本連立し、中央部には1.3m×1.0mの台座を置く。

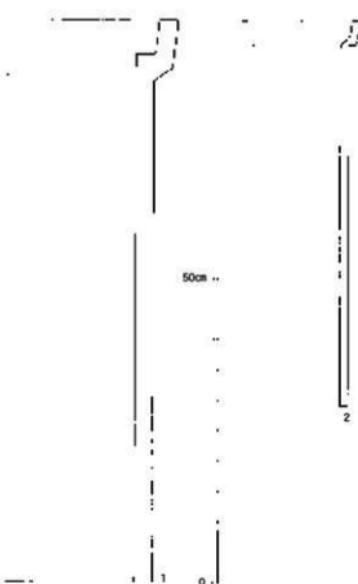
南東側の基礎は、4ブロックに細分される。北西側に飛び出す区画は長方形の柱穴4と正方形の柱穴2からなり、北側のみ壁が立ち上がる。西区画は2×2と2×3の正方形柱穴が並ぶ。中央区画と東区画は2×2のアンカーが二重に立ち上る。

北側基礎は2.8m四方の基礎の北東側に3ブロックが加わる状況を呈する。それぞれのブロックには四周に正方形の柱穴を配する。

配管には、コンクリート製のもの（第63図1）と陶器製のもの（第63図2）の二種類がある。前者は基礎群の北側を東西及び北に向かってT字形に走り、後者は基礎群の南を東西に走る。コンクリート製のものは、鉄筋を配置した大形のもの。縦方向に径4mmの太い鉄筋を3本用い、外周に沿う方向に約20cm間隔で径2.5mmの鉄筋をまわす。用いられるコンクリートは径1~2mmの丸みを帯びた砂利を多量に含むもの。配管同士の接合部の隙間にモルタルが充填してあった。なおこれらの遺物は現地にて実測を行い、取り上げは行っていない。配管が交わる部分にはレンガを用いた溜め橋が設置されている。そのレンガは235mm×114mm×60mmを測るもので、刻印は認められなかった。

戦時中の資料は大半が焼却されていることもあり、文献に表れない歴史を紐解く学問として考古学が果たす役割も感じずにはいられない。

今回の戦争関連遺跡の調査にあたっては、浮羽究真館高等学校奥野事務長をはじめ、学校関係者の皆様にはこの基礎に関心を持っていただき、情報提供に多方面に声をかけていただき、その際に多くの同窓生の皆様から情報を提供いただきました。また渡辺鉄工株式会社には多忙な折にも関わらず情報の提供に協力いただきました。文末ではありますが、深く感謝いたします。



第63図 戦争関連遺構出土土管実測図（1/8）

(8) 4号貯蔵穴出土の奇石について

4号貯蔵穴の中位付近から、不思議な形状の石が出土した（第25図・写真5）。その形状から人為的な石製品か自然の産物か判断し難かったため、九州大学理学研究院坂井卓助教に鑑定をお願いした。以下がその結果である。

浮羽郡の遺跡から産した奇妙な石

本標本の肉眼観察による岩石学的特徴を以下に記述する。

1. 外見上の特徴

本標本は、風化面は乳白色を呈し、茶色の0.7~2.0cmの厚さで平行状のバンドをもつ（写真1）。切断した研磨面では乳白色の風化面は0.5~2.0cmの厚さをもち、漸移的に未風化元來の黒色の色調に変化する（図3）。バンドの部分は風化の程度は弱く、ごく表面に限られている。

塊状の部分はかなり不均質で、研磨面で見るとバンドが連続性を絶たれて、レンズ状や角礫状の包有物として含まれている（写真2・3）。

2. 岩石種

本標本は、流動構造^aで特徴づけられ、縞状の部分はその周囲の部分に比べて粗粒である。縞状・塊状部ともに細粒なガラス質の石基をもつことから火山岩と同定できる。乳白色の班晶は斜長石からなり、石英の班晶は肉眼ではほとんど確認できない。黒色の有色鉱物で短軸な結晶は輝石である。長柱状のものは角閃石と思われる。黒色細粒部はガラス質の石基にあたる。以上の特徴から、輝石角閃石安山岩溶岩とみてよい。色調が黒く、やや玄武岩質な組成かも知れない。詳細な岩石種の決定には薄片観察や化学分析による詳しい調査が必要である。

他の特徴である縞状組織について見てみる。縞状バンドを構成する無色・有色鉱物はともにやや細粒で、より黒色の色調を呈し、塊状部と若干組成が異なるよう見える。また、両者は白濁した境界で境され、個々のバンドはほぼ平行状に配列する（図3）。また境界は明瞭だが、必ずしも平面ではなく、細かい凹凸が観察できる。塊状部には、バンドが引き延ばされてレンズ状になったものから、角礫状に分離したさまざまな形状が観察できる（図4）。

以上の特徴は、この溶岩がマグマ溜まりで混合作用、つまりマグマ混合を起こした事を示している。バンド部が側方に引きちぎられたブーディン^bの形状や角礫状になっていること、そして白濁反応線をもつ産状から見て、バンド部はある程度固化した状態にあり、そこへ塊状部のマグマが入ることで、混在化が生じたと解釈できる。バンドの配列はマグマ溜まりの圧力条件あるいは沈積作用のいずれかで生じたと考えられる。

3. 浮羽付近の火山岩

浮羽付近には、2種類の火山岩類が知られている（図5）。中新世後期～鮮新世の北坂本層に含められる輝石安山岩溶岩および貫入岩と、鮮新世の英彦山火山岩類の輝石安山岩である（唐木田ほか編、1992：久保ほか、1993）。このうち、北坂本層の火山岩類は浮羽鳥屋山周辺に幾つかの小岩体で現れる。英彦山火山岩類は東部～北東部の英彦山から日田にかけて広く分布する。本標本は転石であるが、母岩は筑後川上流域の上記地域に由来すると思われる。

4. 考察

本標本が石器として使用されたことに関しては疑わしい。その理由は、研磨断面で認められるよ

うに、風化帯は礫全体を取り巻いている。仮に、打石器として使用されたのであれば、両端の少なくとも一部で柔らかい風化帯が失われて未風化部が表面に現れるか、あるいは埋積後に使用部分で風化帯の厚みに変化が認められるはずである。そのような証拠は認められない。

*流離構造の一一種で、特に異なった鉱物組成や結晶度・組織を示す薄層の線状配列による面構造。（地学事典：平凡社）

**岩石が引き延ばされてソーセージ状に膨縮した変形。

(九州大学理学研究院 地球惑星科学部門 固体地球惑星科学助教 坂井 卓)

以上の鑑定結果から、この奇岩は石器ないし石製品ではなく自然石であり、使用痕を伴わない祭祀的な使われ方があった可能性は残されるが、その形状は人為的に施されたものではなく、自然の作用によるものと判断される。



写真3

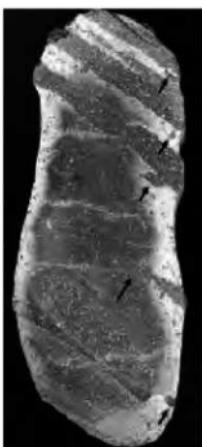


写真4

写真3：繊状岩石の外見

写真4：乳白色の塊状部に茶色のバンドが発達した繊状の組織。塊状部（写真中～下部）中の暗褐色の斑点は、茶色のバンドの破片と有色鉱物からなる。

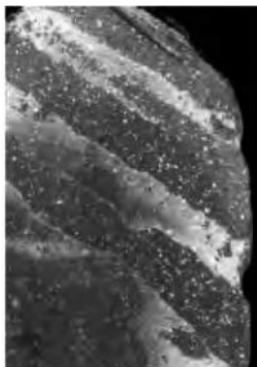


写真5



写真6 溶岩形成石出土状況

V おわりに

1 竹重遺跡について

平成10年度から4次にわたり竹重遺跡の発掘調査を実施した。調査では第2次調査で確認された前方後方墳をはじめ、縄文時代～古代の遺構・遺物を検出し、既存の校舎建物の基礎等により破壊、削平されている部分はあるものの、全体の概要が明らかになった。ここではこれまでの調査で検出した遺構について時期別に概要を述べることによりまとめにかえる。

竹重遺跡は南東部を中心として広がる台地状の平坦地と、西の谷部へ向かって傾斜する緩やかな斜面で構成される。検出された遺構は第64図に示すように、平坦部には弥生時代前期および後期の集落が営まれ、古墳時代前期には前方後方墳が築かれる。遺跡の北東部および西部の傾斜地では、弥生時代前期・後期の溝やピット、少数の土坑が認められ、古墳時代前期には掘立柱建物と井戸が作られる。また縄文時代前期と古墳時代前期、および古代の包含層が形成される。

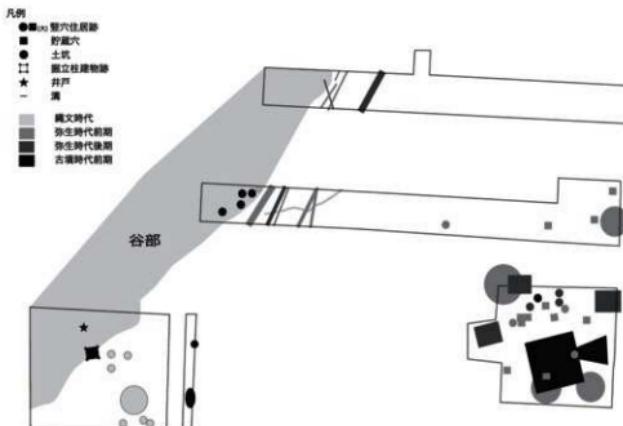
遺構を時期別に概観すると、まず縄文時代では、谷部落ち際の縁辺部、平坦部から斜面に移行する地形変換点に遺構が認められる。第1次調査区の住居跡と考えられる炉を伴う遺構1棟と土坑6基（風倒木痕？）、第3次調査区の縄文前期の包含層の下から検出された土坑1基と溝1条がこれにあたる。住居跡は削平によりプランは明確ではないが、焼土ピットとこれを囲む溝状遺構から住居と考えられ、前期に属するものである。第3次調査の土坑と溝は出土遺物がなく包含層との前後関係からの推定に留まるが、縄文時代前期以前のものと捉えられる。なお、第1次調査区の土坑は形状等から風倒木の可能性が高いが、これらからも前期の遺物が出土している。住居跡の削平状況からも、住居跡周辺で検出された多数のピット群など、さらに住居等が存在した可能性も考えられる。また谷部への傾斜地から谷内に形成される包含層からは、ある程度まとまった前期の土器が出土しており、これらからも周辺に集落が存在したことが推察できる。これまで周辺地域で実施された調査では当該期の明確な遺構は確認されておらず、わずかに採集され土器から耳納山麓の扇状地周辺に集落の存在が想定されていた。今回の調査で生活遺構を検出し、包含層を始め多数の縄文土器が出土していることはその想定を裏付けるものであろう。

弥生時代前期では南東部の台地状平坦部を中心に集落が営まれ、住居跡4棟、貯蔵穴11基、土坑4基、溝7条が検出された。溝以外の生活遺構は調査区南東部に集中しており、西部および南部への広がりは確認できないことから、集落端部にあたると考えられる。住居跡については、調査区の制約と残存状況の悪さから全容を知り得るものはないが、すべて円形を呈し、貼り床や炭化物が検出されている。この他にも円形に廻るピット群等、住居跡と考えられる遺構も認められ、本来はさらに広範囲に集落が展開した可能性もある。貯蔵穴は平面形状が円形または方形を呈し、多くは断面ラスコ形にオーバーハングする。出土遺物は多くはないが、全て前期に位置づけられ、住居跡と併存したものであろう。弥生時代後期には住居跡3棟、土坑3基が同じく平坦部に作られ、遺構配置から前期同様集落の端部にあたると思われる。この中で調査区西端に位置する1号住居跡は規模が大きくかつ深く作られており、他の住居とは違った様相を見ることからやや特別な施設の可能性が高い。今回の調査地域内では判断が難しいため、今後の周辺地域の調査を待ちたい。居住域

を離れた調査区西側、谷部までの傾斜地に数錠の溝が認められる。いずれも埋土は粗砂や細砂がほとんどので、わずかに最下層にやや粘性のある土が堆積しており、耳納山系からの強い流れ込みにより堆積したような状態が見てとれる。堆積は大きく3回から4回が認められ、形状や埋土の状況から自然流路の一部であろう。これらは出土遺物が少なく小片が多いことから時期の決定は難しいが、弥生時代の範疇、集落が形成された時期に併存したものと考える。なお本地域は耳納山脈からの土石流が多くなったことも指摘されており、さらに山際の遺跡から流されたことが想定できる。耳納山麓の扇状地において当該期の集落の調査は少ないものの、山麓のより高い場所に当該機の集落が展開していた可能性は高く、今後新たな発見が期待できる。

古墳時代前期には、平坦部には前方後方墳が築かれるが、これについては『竹重遺跡2』において詳細に検討されているため詳細は省く。遺跡南西部で掘立柱建物1棟、井戸1基が検出されている。掘立柱建物は柱の下に甕を敷いた状態が確認されていることから、地鎮祭や立柱祭を行っていたようである。井戸は更に谷側に作られており、建物とセットになると思われる。本遺跡の南側に位置する富永正地遺跡では同時期の住居跡が数棟検出されており、この集落の一部と想定できるが、谷の落ち際という立地や祭祀を行っている事、周辺に住居などの生活遺構が認められないことなど、集落端部に作られた特殊な施設であることも想定できる。また、傾斜地から谷部に形成された包含層からは、手焙形土器をはじめとする古式土師器がまとまって出土している。手焙形土器については後に詳しく考察するが、富永正地遺跡でも同時期の土器がまとまって出土しており、同一包含層の可能性が高い。浮羽地域では在地系や畿内系、山陰系の古式土師器が出土しており、今回の出土でより好資料が加わったと考える。

今回の調査では、縄文時代～古墳時代前期の各時期の集落の一端を確認し、良好な出土資料を得ることもできた。富永正地遺跡をはじめ周辺遺跡との関連は深く考察できなかったが、耳納山麓に展開していた各時代の遺跡の存在を示唆するものとして、今後の調査研究の一助になれば幸いです。



第64図 出土遺構配置図

2 竹重遺跡出土の手焙形土器について

4 次にわたる発掘調査では古墳時代前期の集落そのものの発見には至らなかったが、谷部に廃棄された多量の土器は生活域の存在を想定するに足る量である。

その中で注目されるのは、第3次調査で西側の谷部包含層から出土した手焙形土器である。手焙形土器そのものの出自については、山城から近江にかけての地域が想定されており、近年では近江系土器として把握されることも多い。弥生時代終末期から古墳時代前期前半を中心に比較的短期間のうちにみられ、畿内周辺地域から吉備地域にかけて多くの事例がある。ただし、多く出土するとはいえ土器様式の中に占める割合は極めて小さい。

さて、福岡県下では竹重遺跡出土例を含めると、以下の15例が確認できる（註1）。

①うきは市竹重遺跡第3次調査包含層（本書） 古墳時代前期前半の包含層中から出土した。鉢部の体部と底部との境はわずかに突帯をめぐらせる。覆部は鉢部口縁の内側に接合し、面は外側へ折り曲げる程度である。面付近の覆部内面に煤らしき痕跡を確認できる。色調は淡い灰褐色を呈し、胎土が精良で器面が摩滅しており、他の土器との区別は比較的容易である。なお、県下では唯一耳を有する。

②朝倉市天皇山石棺群内土坑（福岡県立朝倉高等学校史学部1969） 体部は平底の鉢状で、くの字に外反する口縁部に覆部が接合される。面は縁を外側に折り曲げる単純な成形で、加飾はない。高坏脚部片と伴出したものの、明確な時期決定根拠に欠ける。

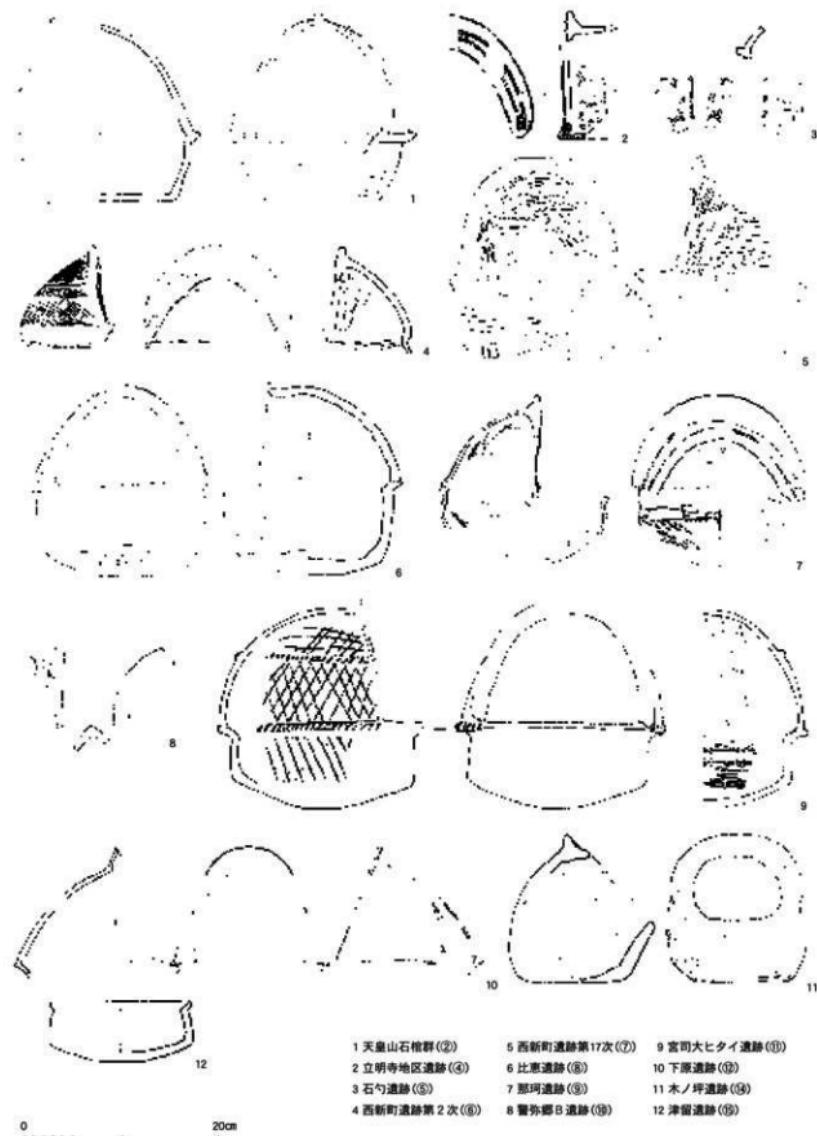
③筑前町桜木遺跡（高橋1998） 未確認資料で、高橋一夫氏の記述に従う（高橋1998）。覆部の面は断面T字状を呈し、円形の浮文を配する。鉢部の口縁は、くの字状を呈する。

④筑紫野市立明寺地区遺跡B地点II区（株式会社島田組2009） 覆部の開口部付近の破片で、面はやや広く断面T字状を呈し、前面に二条の隆起線を設け中央部に円形浮文2～3個を配する。面の外側下端には刻みを施し、鉢部上端の外面にも刻みを施す。遺構に伴わないが、検出遺構の内容を考慮して弥生時代終末から古墳時代初頭の幅で捉えたい。

⑤大野城市石勺遺跡H地点SX19（大野城市教委1997） 土坑出土資料で、覆部の面の破片で、鉢部との接合部が遺存し、鉢部の口縁は小さな受口状を呈する。面の幅はやや狭いが断面T字状を呈し、前面には2条の隆起線を設け、その周囲に8mm前後の円形浮文を2個ずつ配する。伴出土器から古墳時代前期前半に位置付けられる。

⑥福岡市西新町遺跡第2次調査E区3号住居（福岡市教委1982） 住居跡出土で、覆部のみ半分ほどが遺存する。面は幅が広く、断面T字状を呈し、前面には2条の隆起線を有する。覆部の外面には櫛書きによる平行文と綾杉文が施される。鉢部の口縁部は、くの字状を呈し、体部外面に綾杉文の一部が確認できる。覆部内面に煤が付着する。共伴資料はないが、切り合い関係から古墳時代前期前半の2号住居跡より先行する。

⑦福岡市西新町遺跡第17次調査8号住居跡（福岡県教委2006） 住居跡から多数の土器とともに出土した。わずかに覆部口縁端部の一部を欠損する程度で、概ね完形品である。鉢部に一条の突帯がめぐることから、外観上は覆部と鉢部されるが、全体が一体的に作られており、突帯は最終的に付加されたものである。高橋一夫氏が「だるま型」と称した部類に入る（高橋1998）。覆部の面は小さいながらも断面T字状を呈する。内外ともミガキを施すが、装飾性に乏しい。



第65図 手焙形土器の諸例 (1/5)

⑧福岡市比恵遺跡第81次調査SD06（福岡市教委2004） 溝出土の略完形品である。覆部の面は小さく外側に折り曲げる程度である。鉢部は若干丸底気味の平底で、口縁部は小さなくの字状を呈する。素文で加飾性はない。

⑨福岡市那珂遺跡第49次調査SD03（福岡市教委1996） 溝出土の資料で、覆部の面の破片のみである。面は接合部で剥離するが、断面T字状を呈し、前面に2条の細い隆帯が貼り付けられている。ともに出土した土器から古墳時代初頭ごろの時期が推定される。

⑩福岡市誓弥舞B遺跡第3次調査SD01（福岡市教委1995） 溝からの出土で、底部の一部を欠損するが完形に近い。鉢部は丸底で、受口になる口縁部の内側に覆部を接合する。面は幅広く断面T字状を呈し、前面に2条の隆起線を張り付け、一部に赤色顔料の塗布がみられる。直接煤の付着は確認できないが、内面の黒変や底部片の二次被熱の痕跡から内部で火を炊いた可能性が考えられている。時期は古墳時代前期中葉と推定される。

⑪福津市宮司大ヒタイ遺跡第2次調査SC35（津屋崎町2002） 住居跡出土の略完形品で、覆部は半球形を呈する。面は端部をくの字に強く曲げ、外面には中程に刻み目を施した突帯を1条めぐらせ、上段には平行線と斜め線による斜格子文、下段には斜格子文を施す。鉢部は丸底気味の平底で、口縁はくの字に折れる。口縁端部は突帯状にみせ、刻み目を施す。体部外面にも斜格子文が施される。時期は弥生時代終末である。

⑫宮若市下原遺跡4号住居跡（若宮町教委1990） 住居跡から多数の土器とともに出土した。鉢部を失うが、覆部は概ね完形である。面に相当する部分は内湾気味に外反させ、甕や鉢の口縁部のつくりに似る。鉢部の口縁はくの字状を呈し、端部付近で覆部が接合する。

⑬川崎町田原A条里遺跡第3次調査（註2） 未報告資料であるが、展示品を見る機会を得た。ほぼ完形品であるが、鉢部と覆部は接合部で剥離したようである。覆部の面はやや広く、直角に外方へ折り曲げる。鉢部は平底で、口縁部は小さくくの字に折り曲げ、口縁部上面のほぼ全体に鉢部が接合する。鉢部の口縁端部及び体部と底部の境には刻み目突帯を設ける。全体に厚手である。共伴資料等については不明である。

⑭苅田町木ノ坪遺跡25号住居（苅田町教委1987） 住居出土品で、県内出土例の中では唯一鉢部と覆部が一体化する形態で、概ね完形品である。底部は平底で、斜め上方に向かって円筒状にのび、面の断面はT字状であるが、強く指で押さえるためY字状に近い。伴出した土器から弥生時代終末ごろと推定される。

⑮行橋市津留遺跡溝5（福岡県教委1991） 溝からの出土である。鉢として報告されているが、在土地器には存在しない形態で、手焙形土器の鉢部と覆部の接合部で剥離する例が少なくないことから、手焙形土器の鉢部である可能性を考えたい。底部は平底で、口縁部は外側にくの字に折れる。伴出した土器から弥生時代終末ごろの時期が推定される。

以上のように、県下の事例は住居跡から5例、溝から4例、土坑から2例、包含層から1例、その他3例となり、②の石棺群中の土坑出土例を除き、基本的には集落遺跡（生活域）からの出土に限られている。また、存続時期は弥生時代終末から古墳時代前期中葉ごろで、他地域の時期とも齟齬はない。

形態的な特徴では、福岡平野周辺の③～⑥・⑧～⑩が面の作りなどが類似し、その他の事例とは一線を画する感がある。とくに⑭の木ノ坪例は覆部と鉢部が一体化して区別がなく、鉢に覆いを設

けるという本来の意味を失っている。こうした様相からは、前者から後者への形態変化の過程が想定される。しかし、伴出する土器と比較すると必ずしも時系列に沿った変化とはいはず、多様な形態が併存する状態にある。

ところで、今回取り上げた諸例の中には近江産と報告された事例もある。確かに竹重遺跡出土例も、色調や胎土から他の土器との識別は比較的容易であり、持ち込みの可能性を否定できない。ただし、県内出土の諸例の形態に注目すると、覆部はともかく鉢部に関しては近江で出土した諸例を見る限りでは形態的な差異は小さくなく、むしろ河内・大和あたりに幾つか類例が確認できる。また、手焙形土器以外に近江産・系の土器を伴わないことも考慮すれば、県内諸例の多くは仮に手焙形土器の系譜が近江に求められても、おそらく大和や河内などからの搬入、あるいはそれら地域からの模倣である可能性が高いのではないだろうか。ただ、この点については胎土分析等による確認作業も必要であろう。

以上、簡単に手焙形土器について述べてきたが、触れ得なかった論点も多い。今回は基礎的の作業として県下の事例の把握に努めたが、今後、他の古式土師器も含めて検討を行うことで、竹重遺跡の古墳時代集落の実像に迫れるだろう。

註1 今日は時間的制約もあり高橋一夫氏が集成された資料に、管見に触れ得たものに限り追加した。そのため、遺漏があるかもしれないが、諒承いただきたい。

註2 田原A条里遺跡出土品は未報告資料であるが、川崎町教育委員会の末吉氏に実測図の複写資料の提供と本書での紹介を快諾いただいた。記して謝意を表する。

【文献】

福岡県立朝倉高等学校史学部1969「天皇山石棺群」「埋もれていた朝倉文化」

朝倉町教育委員会1971「須川遺跡群」朝倉町文化財調査報告書

大野城市教育委員会1997「石勺遺跡Ⅱ」大野城市文化財調査報告書第50集

株式会社島田組2009「立明寺地区遺跡B地点」

苅田町教育委員会1987「黑派・法正寺地区遺跡群」苅田町文化財調査報告書第6集

津屋崎町教育委員会2002「津屋崎町内遺跡」津屋崎町文化財調査報告書第19集

福岡市教育委員会1982「西新町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集

福岡市教育委員会1995「警弥郷B遺跡2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第414集

福岡市教育委員会1996「那珂16」福岡市埋蔵文化財調査報告書第455集

福岡市教育委員会2004「比恵33」福岡市埋蔵文化財調査報告書第782集

福岡県教育委員会1991「津留遺跡」(行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集)

福岡県教育委員会2006「西新町遺跡Ⅶ」福岡県文化財調査報告書第208集

若宮町教育委員会1990「中遺跡群Ⅰ」若宮町文化財調査報告書第8集

高橋一夫1998「手焙形土器の研究」六一書房

第1表 出土土製品・石器・石製品一覧表

辨別番号	番号	種類	次數	出土地点	長・径 (cm)	幅 (cm)	厚・高 (cm)	重量 (g)	残存率	材質	備考
5	1	打製石鏹		浮羽高等女学校採集	(1.65)	1.65	0.35	0.8	先端欠	安山岩	
5	2	打製石鏹		浮羽高等女学校採集	(2.05)	1.45	0.40	0.9	完存	安山岩	抉り4mm
5	3	打製石鏹		浮羽高等女学校採集	1.6	1.25	0.40	0.5	完存	安山岩	抉り3mm
5	4	打製石鏹		浮羽高等女学校採集	(1.35)	1.65	0.35	0.7	先端欠	安山岩	
5	5	打製石鏹		浮羽高等女学校採集	2.65	(1.75)	0.30	1.1	片脚欠	黑曜石	抉り6mm
5	6	打製石鏹		浮羽高等女学校採集	(2.3)	(1.95)	0.50	1.5	片脚欠	安山岩	抉り3.5mm
5	7	打製石鏹		浮羽高等女学校採集	2.45	1.9	0.60	1.7	完存	安山岩	抉り3.5mm
5	8	打製石鏹未成品		浮羽高等女学校採集	3.6	3.05	0.80	9.2	完存	安山岩	
5	9	打製石鏹未成品		浮羽高等女学校採集	4.15	2.65	0.45	4.9	ほぼ完存	安山岩	
10	2	スクレイパー?	2	1号土坑	3.4	4.75	1.15	11.7	完存	安山岩	
11	36	筋縫車	2	1号堅穴住居	4.24		0.5	17.9	ほぼ完存	綠色片岩	孔徑0.5cm
14	23	投掷	2	2号堅穴住居	(2.2)	(2.45)	0.9	6.1	1/3		
14	24	投掷	2	2号堅穴住居	(2.35)	(2.0)	0.9	4.3	1/3		
18	7	扁平片刃石斧?	2	前方後方墻外周部	(5.0)	2.7	0.85	14.9	欠損?	頁岩	
18	8	砥石	2	第2次調査区邊構面	(9.55)	4.50	1.1	66.1	欠損?	泥岩	
21	11	磨製石斧	2	2号貯藏穴	14.1	5.9	2.85	326.0	完存	頁岩質砂岩	
29	14	棒状石製品	2	11号貯藏穴	6.45	3.85	3.55	120.6	1/3	花崗岩系	
35	4	石錐	3	6A区 4号土坑	7.85	8.0	2.5	202.9	完存	凝灰岩	
36	3	石庖丁	3	18A区 12号土坑	(3.1)	(4.85)	0.5	9.1	破片	泥岩	
37	4	打製石鏹	4	16A区 7号溝	(2.9)	(2.2)	0.5	2.8	先端のみ	安山岩	
37	5	ラウンドスクリーパー	4	16A区 7号溝	4.3	3.0	1.3	17.4	ほぼ完存	安山岩	
37	7	四石	3	7A区 1号溝	14.15	16.8	7.3	1643.0	完存	花崗岩	
43	1	打製石鏹	3	縄文時代包含層	1.25	1.3	0.25	0.4	完存	安山岩	抉り1.5mm
43	2	打製石鏹	3	縄文時代包含層	1.4	1.1	0.25	0.3	完存	チャート	抉り2mm
43	3	打製石鏹	3	縄文時代包含層	12.5	1.1	0.35	0.4	完存	黒曜石	抉り1mm
43	4	打製石鏹	3	縄文時代包含層	1.3	1.35	0.4	0.4	完存	黒曜石	
43	5	打製石鏹	3	縄文時代包含層	2.8	1.05	0.45	1.4	完存	安山岩	
43	6	打製石鏹	3	縄文時代包含層	4.45	1.85	0.4	3.2	ほぼ完存	安山岩	抉り6mm
43	7	スクリーパー	3	縄文時代包含層	1.7	2.8	0.45	1.9	完存	安山岩	
43	8	スクリーパー	3	縄文時代包含層	2.7	2.25	0.45	3.2	完存	安山岩	
43	9	2次加工洞片	3	縄文時代包含層	3.25	2.35	0.95	6.0	完存	黒曜石	
43	10	スクリーパー	3	縄文時代包含層	4.4	5.2	1.1	26.4	完存	安山岩	
43	11	スクリーパー	3	縄文時代包含層	3.85	4.35	1.05	16.5	完存	安山岩	
43	12	2次加工洞片	3	縄文時代包含層	4.1	2.3	0.95	9.4	完存	安山岩	
43	13	磨製石斧	3	縄文時代包含層	(5.35)	3.9	1.25	30.9	1/2	燧狀岩	
43	14	砥石	3	縄文時代包含層	4.3	4.65	4.35	121.4	完存	片岩	
44	15	石鍬?	3	縄文時代包含層	18.2	14.85	3.6		完存	凝灰岩	
44	16	すり石	3	縄文時代包含層	10.15	14.45	5.1	924.0	完存	安山岩質灰岩	
55	1	すり石	3	縄文時代包含層	(11.85)	(13.35)	4.65	1157.0	1/4	安山岩	
55	2	打製石鏹	3	縄文時代包含層	(2.0)	1.4	0.3	1.3	先端脚部欠	安山岩	
55	3	打製石鏹	3	縄文時代包含層	(1.85)	(1.65)	0.35	0.9	先端脚欠	安山岩	
57	9	使用痕洞片	2	ビット4	2.7	2.1	0.85	3.4	完存	黒曜石	
57	10	スクリーパー	2	ビット49	4.8	8.3	1.5	59.5	完存	安山岩	
59	39	打製石鏹	2	前方後方墻外周部	(2.05)	(1.05)	0.3	0.5	1/2	黒曜石	
59	40	ノミ形石斧	2	5号堅穴住居付近邊構面	(5.15)	(1.05)	1.15	11.8	1/3	頁岩	
59	41	砥石	2	5号堅穴住居	5.8	4.55	3.0	112.8	完存	細粒砂岩	
59	42	石庖丁?	2	表土	(5.7)	(5.55)	0.6	21.4	破片	粘板岩	
60	1	打製石鏹	3	8A区 邊構面	2.4	1.5	0.25	0.6	完存	黒曜石	抉り5mm
60	2	打製石鏹	3	7A区 邊構面	2.9	1.55	0.4	1.9	片脚欠	黒曜石	抉り2.5mm
60	3	打製石鏹	3	16A区 ピット21	2.4	1.65	0.6	2.1	片脚欠	安山岩	
60	4	打製石鏹	3	風呂木痕	2.05	1.4	0.2	0.4	完存	黒曜石	抉り8mm
60	5	打製石鏹未成品	3	6A区 邊構面	4.1	2.95	0.5	4.4	完存	安山岩	
60	6	ナイフ形石器?	3	耕土中	8.55	4.3	1.1	33.9	完存	安山岩	
60	7	石庖丁?	3	4A区 基礎埋土	(4.7)	(4.7)	0.4	13.3	1/3	輝綠岩質灰岩	背孔1.05cm
60	8	ガラス小玉	3	25C区 邊構面	0.6		0.3	0.1	完存		コバルトブルー
60	9	ガラス小玉	3	25C区 邊構面	0.5		0.35	0.1	完存		藍色

()内は参考値

第2表 調査遺構番号対照表

次数	報告番号	調査時番号	時期	特記事項
2	1号堅穴住居	S-1	弥生後期	残存良好
	2号堅穴住居	S-2	弥生後期	
	3号堅穴住居	S-20	弥生前期	
	4号堅穴住居	S-21・22	弥生後期	3号堅穴住居を切る
	5号堅穴住居	S-15	弥生前期	7号貯藏穴と切り合う
	6号堅穴住居	S-26	弥生前期	
	1号貯藏穴	S-2	弥生前期	
	2号貯藏穴	S-11	弥生前期	
	3号貯藏穴	S-23	弥生前期	
	4号貯藏穴	S-10	弥生前期	5号貯藏穴と近接
	5号貯藏穴	S-12	弥生前期	6号貯藏穴を切る
	6号貯藏穴	S-13	弥生前期	5号貯藏穴に切られる
	7号貯藏穴	S-16	弥生前期	5号堅穴住居と切り合う
	8号貯藏穴	S-18	弥生前期	
	1号土坑	S-14	弥生前期	
	2号土坑	S-9	弥生前期?	
	3号土坑	S-25	弥生前期	
	4号土坑	S-7	弥生後期?	
	5号土坑	S-8	弥生後期?	
	6号土坑	S-19	古墳前期	
	7号土坑	S-24	弥生後期?	
3	7号堅穴住居	S-2	弥生前期	
	9号貯藏穴	S-1	弥生前期	
	10号貯藏穴	S-2	弥生前期	
	11号貯藏穴	S-3	弥生前期	
	8号土坑	土坑1	古墳前期	
	9号土坑	土坑2	古墳前期	
	10号土坑	土坑3	古墳前期	
	11号土坑	土坑4	古墳前期	
	12号土坑	土坑5	弥生前期?	
	13号土坑	土坑7	縄文時代	
	1号溝	溝1	弥生後期	7号溝と繋がるか
	2号溝	溝2	弥生前期?	1号溝と平行
	3号溝	溝3	弥生前期?	4号溝に切られる
	4号溝	溝4	弥生前期?	3号溝を切る
4	5号溝	溝5	弥生前期?	
	6号溝	溝6	縄文時代?	縄文時代包含層の下
	7号溝	S-1	弥生後期?	1号溝と繋がるか
	8号溝	S-2	弥生前期?	10号溝に切られる
	9号溝	S-3	弥生前期?	10号溝に切られる
	10号溝	S-8	弥生後期?	8・9号溝を切る
	11号溝	S-78	弥生後期?	

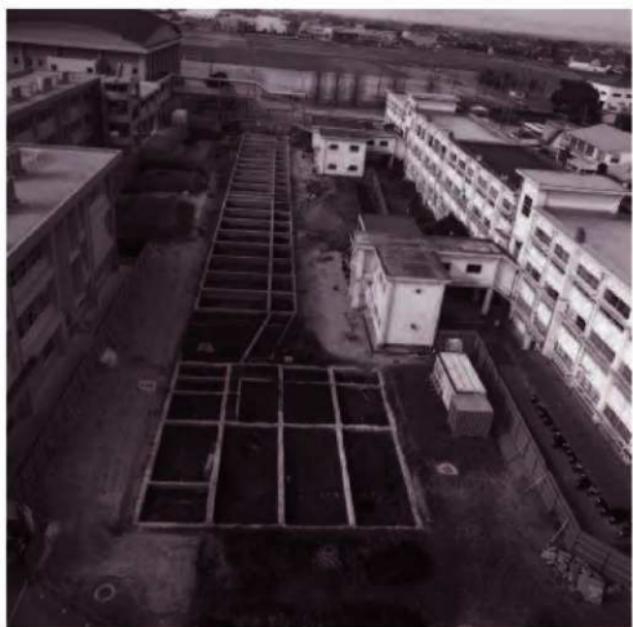
図 版



1 上空より北側
筑後川方面を望む



2 第2次調査区全景
(上が北)



1 第3次調査区全景
上空より西側を望む



2 第4次調査区全景
上空より東側を望む



1 第3次調査区
23~28 区



2 第3次調査区
5~12 区



1 第4次調査区全景
(上が北)



2 第4次調査区
1~4区



3 第4次調査区
12~22区



1 1号竪穴住居跡
貼床検出状況（東から）



2 1号竪穴住居跡（北から）



3 2号竪穴住居跡（北から）



1 3・4号竪穴住居跡
(空中写真 上が北)



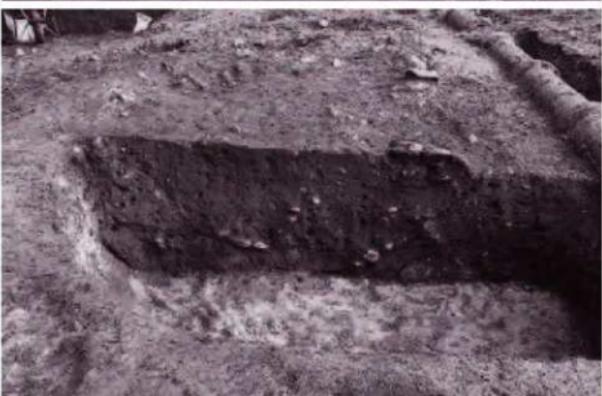
2 3・4号竪穴住居跡
検出面遺物出土状況



3 5号竪穴住居跡
(空中写真 上が東)



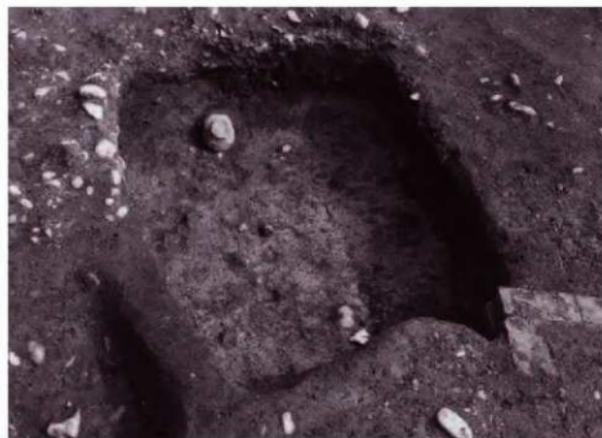
1 1号貯蔵穴（西から）



2 1号貯蔵穴堆積状況
(西から)



3 2号貯蔵穴（西から）



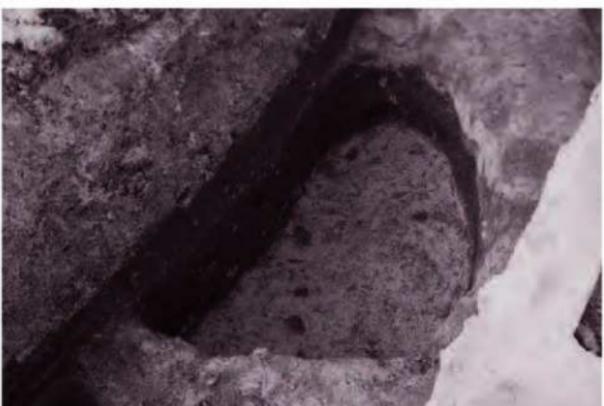
1 3号貯藏穴（西から）



2 4～6号貯藏穴（南から）



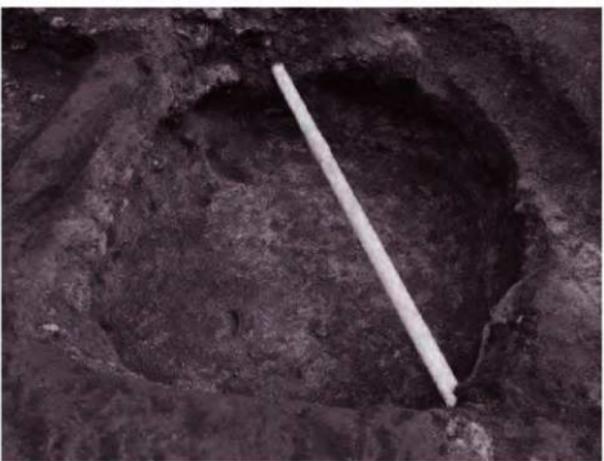
3 4号貯藏穴（南から）



1 7号貯蔵穴（北東から）



2 9号貯蔵穴（北から）



3 11号貯蔵穴（南から）



1 1号土坑（南から）



2 2号土坑（南西から）



3 3号土坑（西から）



1 4号土坑（南から）



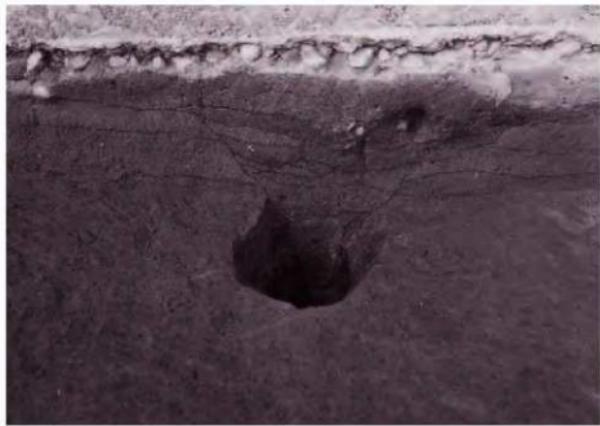
2 5号土坑（北西から）



3 8号土坑完掘状況
(西から)



1 9号土坑出土状況
(東から)



2 9号土坑断ち割り・
完掘状況 (東から)



3 10号土坑出土状況
(東から)



1 11号土坑出土状況
(東から)



2 1・2号溝完掘状況
(北から)



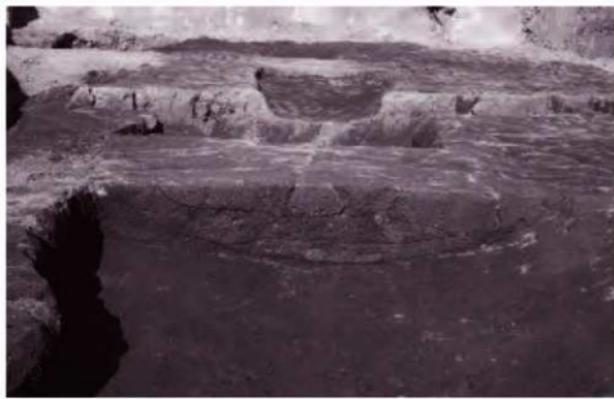
3 1・2号溝土層
(北から)



1 1・2号溝土層
(北から)



2 1号溝土層 (南から)



3 4号溝土層 (南から)



1 5号溝土層（北から）



2 5号溝土層（北から）



3 7号溝完掘状況
(南西から)



1 7号溝土層（北から）



2 8・9号溝完掘状況
(南西から)



3 第3次調査区
3 A区西壁谷部
堆積状況（東から）



1 第4次調査区
22A区北壁谷部
堆積状況（南西から）



2 第4次調査区
22B区縄文時代包含層下
地山検出状況（北から）



3 第3次調査区
4 A区古墳時代包含層
土器出土状況（北から）



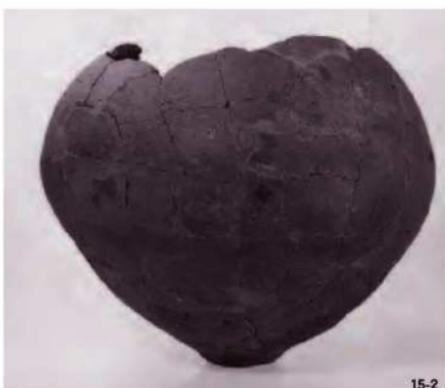
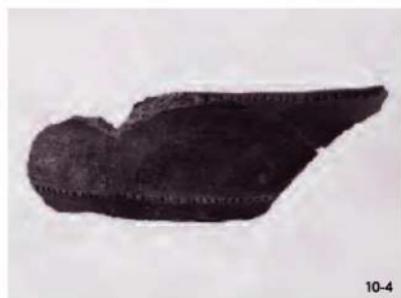
1 第3次調査区
4 A区古墳時代包含層
土器出土状況（東から）



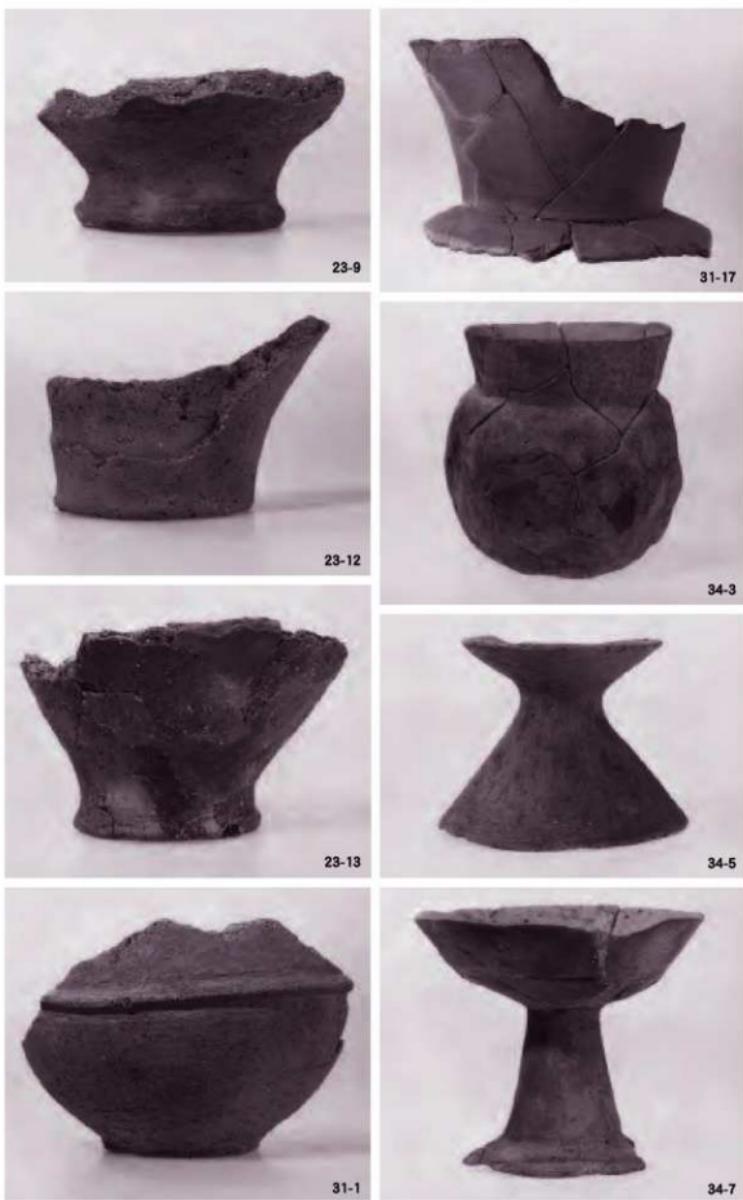
2 第4次調査区
19 A区古墳時代包含層
土器出土状況（南東から）



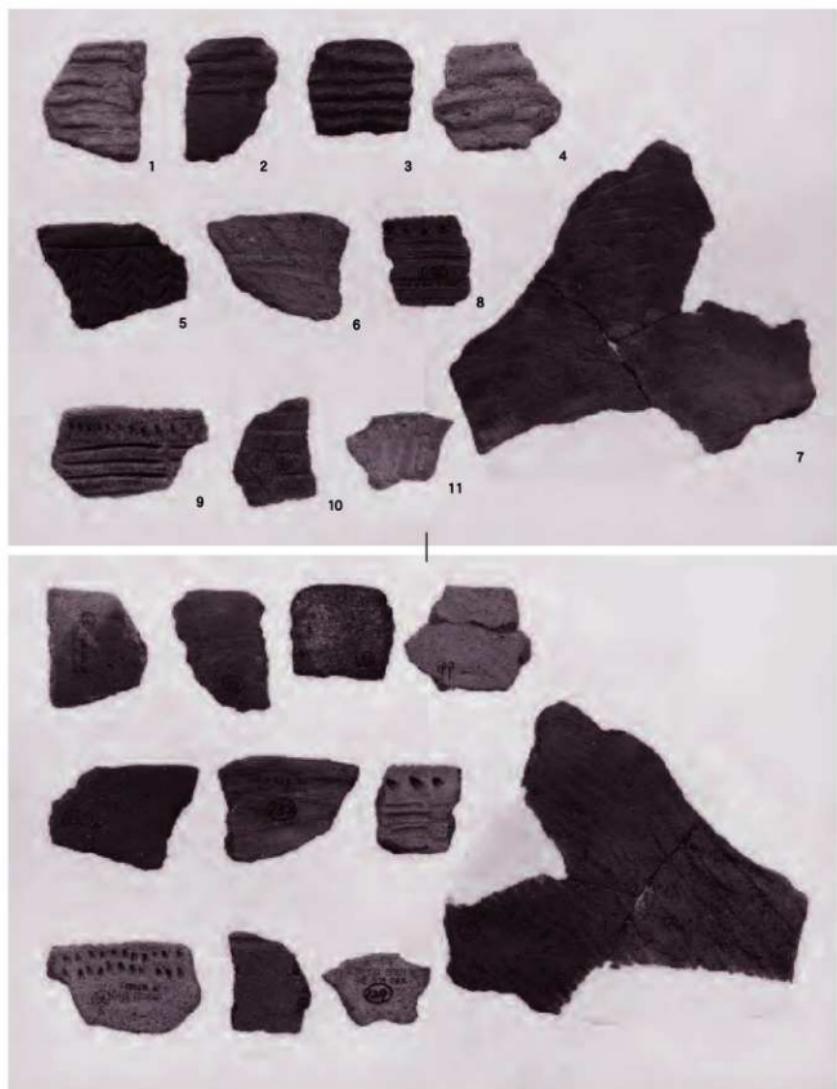
3 第4次調査区
19 A区古墳時代包含層
土器出土状況（西から）



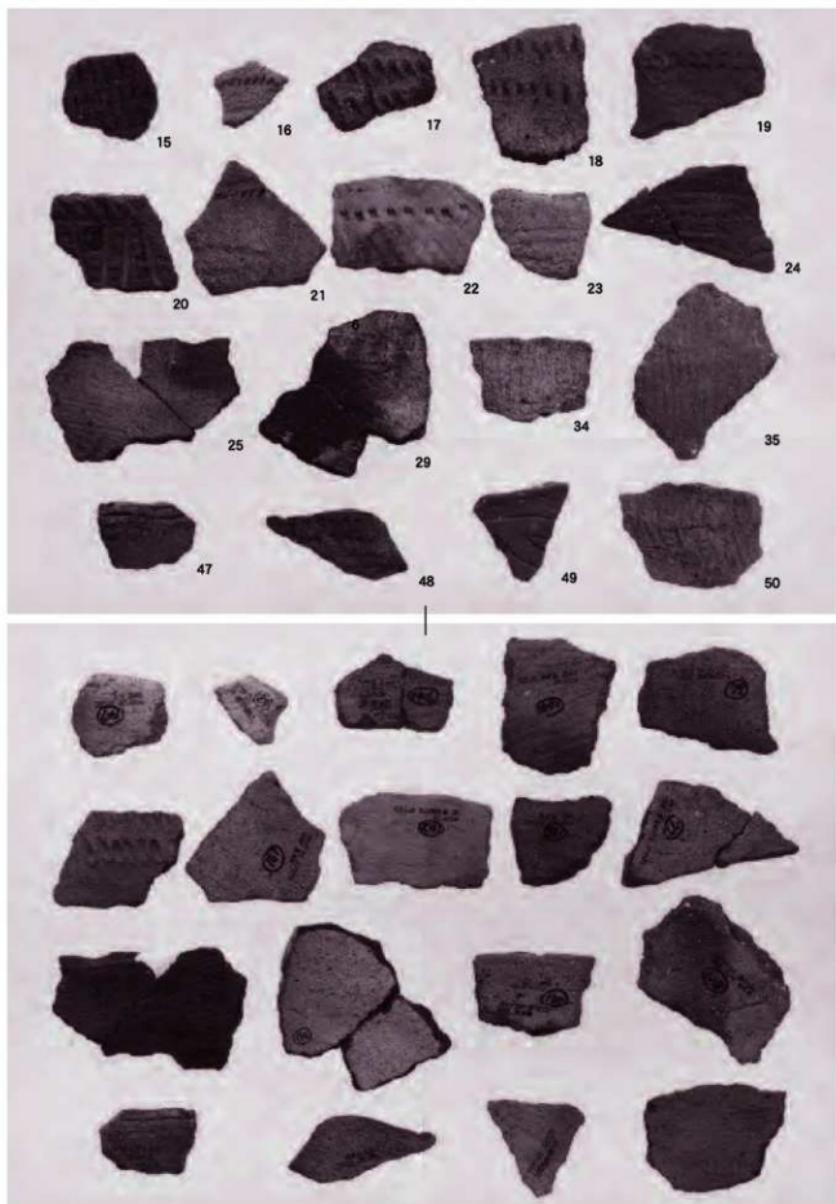
1 ~ 4 号竖穴住居跡・1号貯藏穴出土遺物



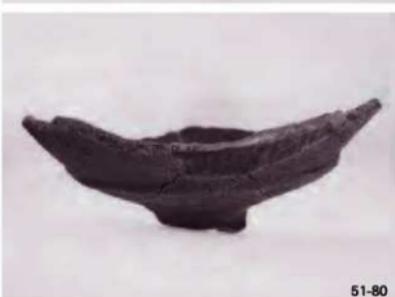
2号贮藏穴・1・6・9号土坑出土遗物



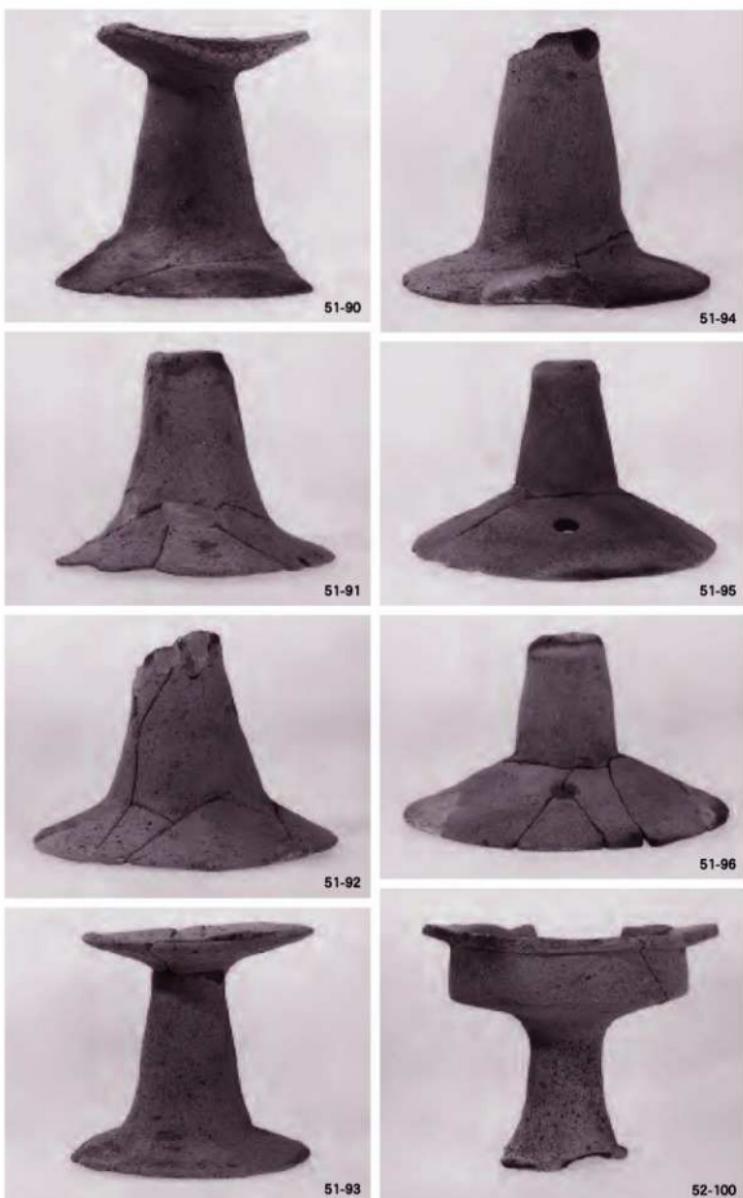
繩文時代包含層出土遺物 ①



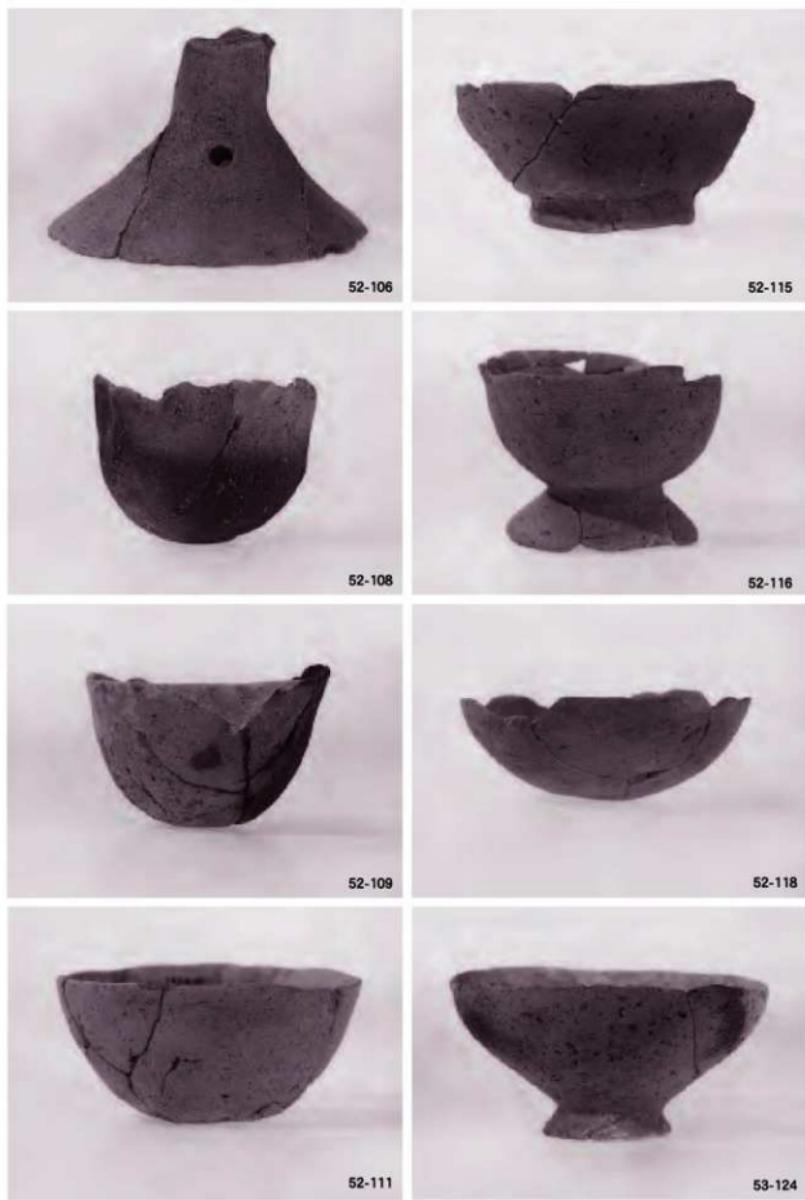
縄文時代包含層出土遺物 ②



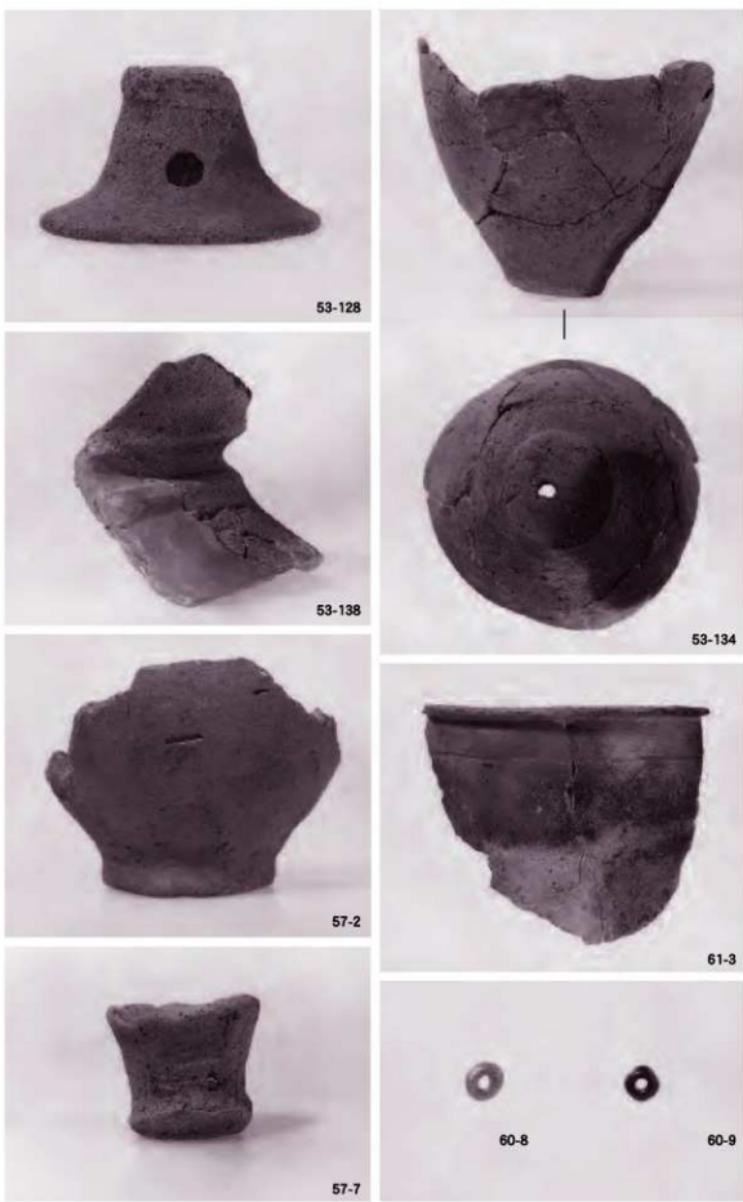
古墳時代包含層出土遺物 ①



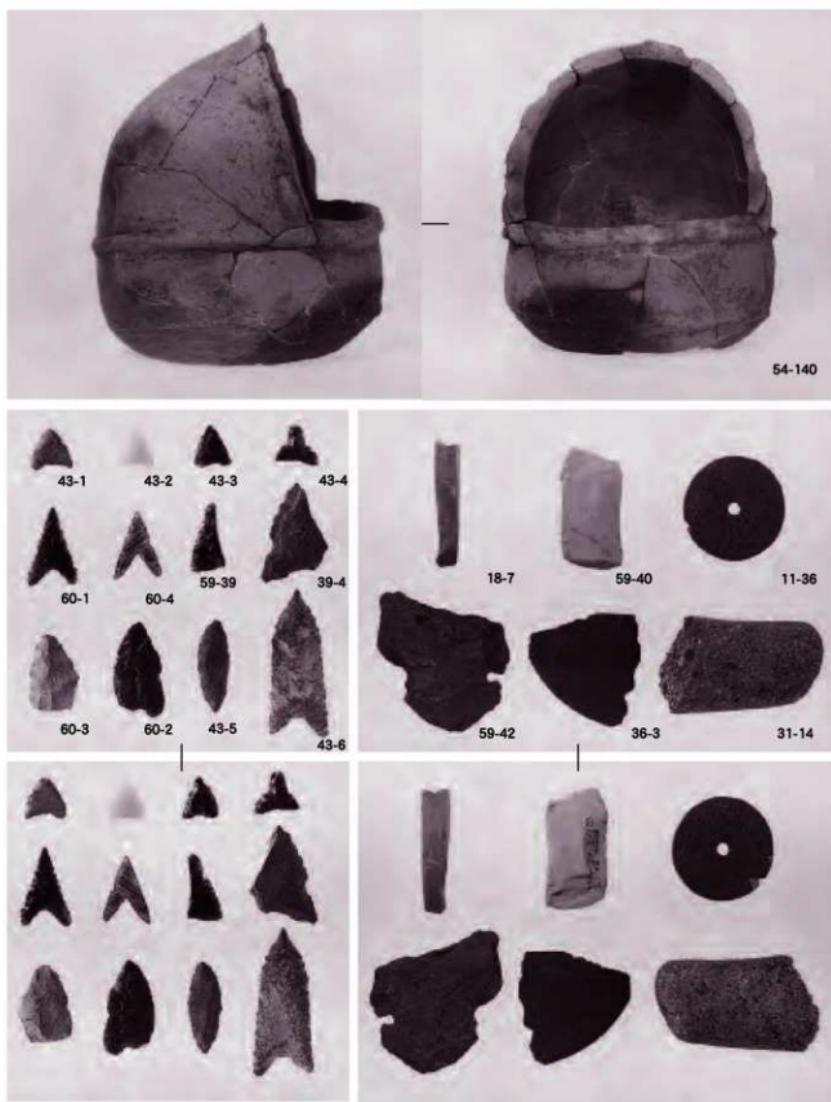
古墳時代包含層出土遺物 ②



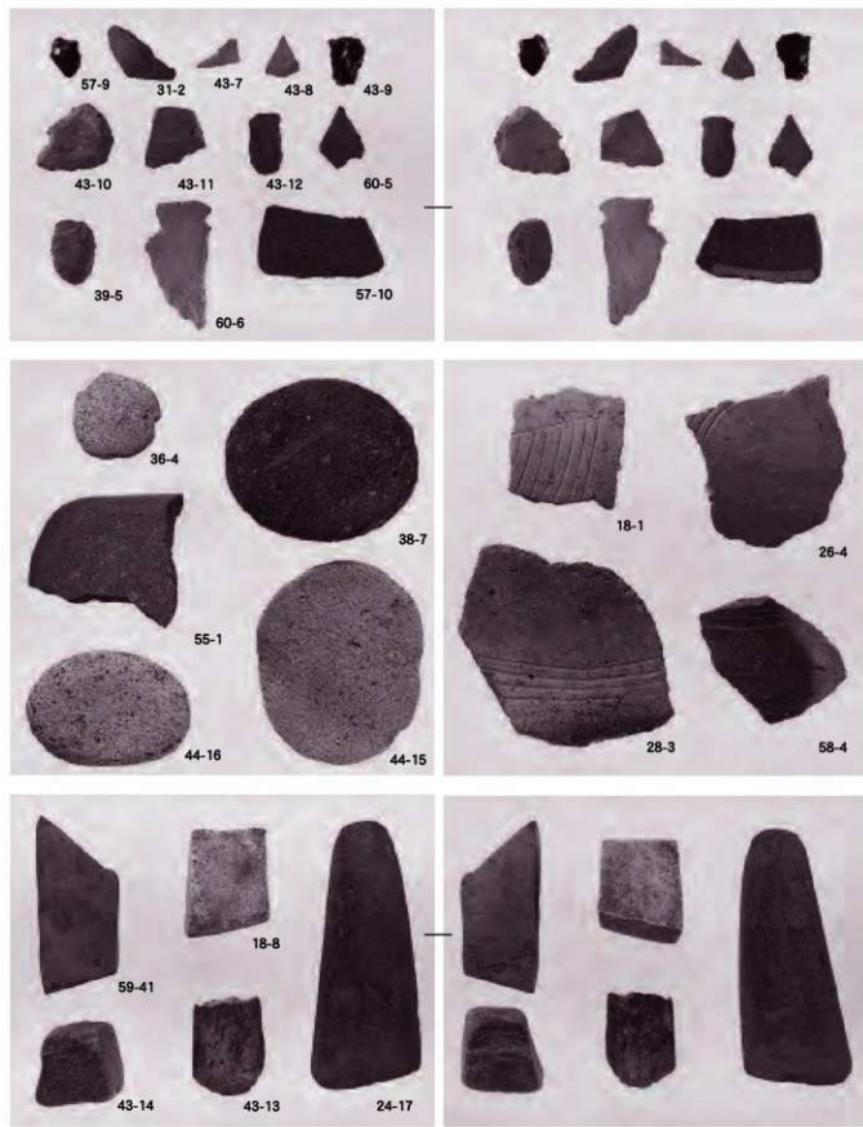
古墳時代包含層出土遺物 ③



古墳時代包含層・その他の遺構出土遺物



古墳時代包含層・調査区内出土遺物



調査区内出土遺物

報 告 書 抄 錄

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 21	登録番号 3

竹重遺跡3

福岡県文化財調査報告書第227集

平成22年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 築上印刷(有)
〒828-0043 福岡県糸島市大字岸井201番1
TEL 0979-82-1301 FAX 0979-82-8109